
クローバー：コード

坂津狂鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバー：コード

【Nコード】

N2876Y

【作者名】

坂津狂鬼

【あらすじ】

壊せ、命と同等の価値がある物を。
それはメールから始まる壊し合いゲーム。

『ゲームの概要説明 参加者9名のうち一人の勝者を決めるゲームです。』

参加者全員、コード、と呼ばれる不思議な力を持っています。

参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合ってもらいます。

参加者が死亡した場合でも、物が破壊されなければ敗退にはなりません。

敗退条件は、ものの破壊です。

敗者は参加者の命、それと同等の物の破壊を禁じます。

勝者は失ってしまった大切なものを復元する事が出来ます。例えばそれが命であっても。

なお参加者それぞれのコードは《無影無綜》《非観理論》《否定定義》《完全干渉》《干渉不可》《禁思用語》《異見互換》《結論反転》《絶対規律》となっております。

ゲーム開始時刻は明日の0：00からでございます。

くれぐれも殺し合いと勘違いなさらないように。これはあくまで壊し合いです。

それではご検討を祈ります』

「月は何で明るいと思う？」

「そんなもん、太陽光を反射しているからに決まってるだろボケ」

二人は空に大きく輝く月を見上げながら話し合う。

「何それ。夢が無さすぎるでしょ」

「ロマンチストになれるような人生は送れなかったからな」

「どんな人生を送っても、人は夢を見たり奇跡を信じたりするものよ」

「夢を見たところでそれは夢でしかなくて、奇跡を信じたところで何かが変わる訳じゃない」

「……………それもそうね」

「随分と諦めが早いんだな」

「諦めるしかない人生しか送れなかったからね」

「……………そうか」

沈黙の間も二人はずっと月を眺め続ける。ただ何の目的も無く。

「俺は」

二人のうちの一人が、沈黙に耐え切れなくなったためか独りでに呟く。

「俺はここから抜け出す」

「無理だよ。無謀だよ。無力な貴方には絶対に出来ない」

「……………そんなすぐに否定することも無いだろ」

「ここから抜け出すなんて無茶を言うからいけないんだよ」

「無茶じゃない」

「無茶だよ。絶対に無理。不可能。諦めるべきだよ」

「無茶じゃない。絶対に無理じゃない。不可能じゃない。諦めるべきじゃない」

「急にどうしたの？ ホームシック？」

「別に。家族なら昔、目の前で殺されたからホームシックではない」

だろ」

「ならどうしてここを抜け出すなんて言うの？ 当てでもあるの？」

「当てもない。目的も無い。ただ、ここで終わるつもりも無い」

「バカなの？ バカでしょ？ バカなんでしょ？ ここから抜け出すなんて絶対に無理なのに何でやろうとの？」

「だから無理じゃない。お前が協力してくれば可能だ」

「誰が協力したところでここから抜け出すなんて」

「絶対に出来る。俺は全てを欺いて見せる」

「なんだ、夢の一つ見れるじゃない。そんな哀れで儚い夢の一つ」

「夢じゃない。現実に変えてやるよ」

「……何を言ってるの？」

「簡単な事だ」

間を置き、答える。

「欺いてみせる、世界も神様も。だからお前は俺を信じて協力してくれればいい」

~~~~~

「……………」

朝日が眩しく、堪らず目を覚ます。

どうやら俺はいつの間にか寝ていたみたいだ。しかもソファで。

お蔭で体の節々が痛い。首を傾げただけで、関節がバキボキ鳴り響く。

寝惚けた頭で壁に掛けてある時計を見る。

時刻は4：44。捉え方によっては幸せと死遭わせに分かれてしまふような数字だ。

4という数字はややこしい。

死を意味したり、四つ葉のクローバーのように幸せの象徴だったり。幸運と不幸が織り交ざった数字である。

まあ俺は数字に不気味さを感じる事が少ないため、不幸の象徴やらと考えた事が無い。

だからといって幸運の象徴とも考えた事は無いが。にしても、体が痛い。二度とソファで寝るものか。

そんな事を心に決めながら、冷蔵庫へふらふらと向かう。

ちなみに俺の現在の住家はダイニングキッチンであるから、数秒で冷蔵庫に辿り着いた。

まあキッチンが別な場所にある家は相当な豪邸か、昔の建築物かのどちらかだろう。

ともかく俺は冷蔵庫の中身を探る。

……ス力である。空。新品同様の中身無し。

ふざけるなよ、あの野郎。

そう思いながらも朝っぱらから怒声を撒き散らしたら近所迷惑になる事だろう。

残念ながら俺は周りに気を遣える男であるため、静かに財布を持って家を出た。

理由は簡単。24時間365日営業の利便性社会の骨頂、コンビニに行って朝飯を確保するためである。

早朝の街は妙な静けさを帯びながらも、深夜よりかは人の気配を感じやすい。

日の光というものは人を引き付ける効果があるのかもしれない。

いや、生物皆、蛾のように光に惹き付けられる習性があるのかもしれない。

一体全体、光に何があるっていうんだ。

あんなもの、ただ眩しいだけじゃないか。

あんなもの、あんなものこそ一番、穢れている。

ポケットの中で何かが振動する。

家に置き忘れたと思っていた携帯がメールを着信したためだ。

にしても誰だ？ こんな朝っぱらにメールなんてしてくるドアホは？

『ちいはいシーチキンおにぎりが良い』

なんてメールを送ってくるドアホとドアホを足してドアホを掛けたようなドアホは？

いやまあ俺の記憶が欠落していない限り、こんな生意気なドアホは一人しか思い浮かばないんだが。

っていうかアイツだろ？ 冷蔵庫の中身を空にしやがった張本人は。

「ハア……………」

溜息を吐きながら携帯の待受け画面を見る。

画面の真ん中にデカデカと時刻が表示され、その右上に小さく何年何月何日何曜日かが表示されるシンプルな待受け画面。

今日は、11月8日月曜日。俺が転入生として高校に通う日だ。

「一輝、これシーチキンじゃないツナマヨ」

1時間近く朝の街を散歩し、コンビニで立ち読みをして、計二時間近く外に出てた俺が最初に言えに入ってから30秒後に言われた一言だ。

「別にツナマヨもシーチキンも変わりないだろ」

「変わるよ。大きく変わる。産業革命レベルで変わる」

絶対に大袈裟に言ってるやがる。

「つーか、そんなに文句言っなら食うな。代わりに俺が食うから」

「一輝に食われるくらいならゴミとして捨てられた方がマシってツナマヨが言ってる」

ツナマヨは喋りません。

俺は溜息を吐きながら先程から文句を言ってくる主の方を見る。

腰まで伸びきった銀色の髪、左右で瞳の色が違ういわゆるオッドアイ。右が青で、左が黄色……じゃなくて琥珀色だっけか。

ともかくそんな日本人と言う枠組みを超えている容姿をしている少女。

名前は濁川千秋。にじかわちあき戸籍上は俺の義理の妹ということになっている。

まあ、なんやかんやコイツとは付き合いが長いから義妹と言うよりは幼馴染や親友とかの部類に入る気がする。

仕方が無く、俺の義妹である感じだ。仕方が無く。

そんな銀髪少女は散々文句を言っていたツナマヨおにぎりを一口で頬張り、口元にご飯粒を付けるという定番の絵面になっていた。

………これを教えずに学校で恥をかく義妹の姿を見たいという悪意を持って何が悪い、いや悪くない。

「ん？ 私の顔に何か付いてるの？」

あまりに俺が長い間千秋の顔を見ていた為、反射的にそんな事を訊いて来た。



「お前のその色違いの目はいつ見ても不思議さを感じるな、て思ってたんだ」

「他人が気にしている事をさらりと言う。一輝って本当にデリカシィが無いよね」

「生活力が無いよりかはマシだ」

大体、二日前までゴミ屋敷だったこの家を一般生活が出来るレベルまで掃除してやったのは誰だと思っていやがる？

俺だぞ、俺。

到着早々この家の惨状を目の当たりにした俺が、寝る間も惜しんで二日間！

カビやらゴキブリやら異臭やら何かよく分からないキノコやらを撃退して、やっと終わったと思ってソファに横になっいたらいつの間にか寝ていて、体の節々が痛く、それでも朝食をと思って冷蔵庫を開ければ中身が無く、仕方が無くコンビニへ行ってる途中にシーチキンおにぎり買って来いと言われた上に、買って来たらツナマヨだと文句を言われたこの俺の感情が分かるか！？

銀髪でオッドアイだからってお嬢様でも無いお前が料理、掃除、洗濯やらの家事全般が出来なくて良いわけにはならないだろうが！  
そもそも何なんだよ！ 掃除をしている時だって！

近所の方々は『あらカメラは何処なの？』って完全にテレビの特番とかで掃除していると勘違いしているし！

そのまま立ち話を続けてこっちの作業を遅らせるし！ こっちの人員は独りなんだからわざわざ掃除してるときに邪魔すんなよ！

っていうか有名なゴミ屋敷にすんなアア！！

「……一輝、全部口から出てるよ」

「お前に聞こえるように言ってたんだよ！」

このダメ人間精神満点の銀髪女がっ。

俺の自分用を買ってきた鮭とシーチキンと昆布のおにぎりを数十秒で食い終わり、

「ちよつと待って！ 今シーチキン有ったよね！？」

「黙れよ銀髪。一々細かい事にうるさいんだよ」

「細かいって言うか、わざわざシーチキンがあるのにちにツナマヨ与えたの!？」

「その自分のことをちいって呼ぶ癖をいい加減直せって言うてんだろ。ガキじゃないんだから」

「ガキとかガキじゃないとかそういうの関係無いよ!　ちいのシーチキンを取りやがって、吐け!」

殴りかかろうとする千秋を片足で押さえつけながら優雅にお茶を飲む。

よし、朝食も取ったし、真面目な話でもするか。

「おい千秋。本当に居るんだよね？」

「……居るよ。間違いない。確認した」

両手をブンブンとアホのように振り回すのを止め、千秋が答える。

「三人だっけか？」

「二人に減ったよ。《否定定義》と《非観理論》が協力して《完全干涉》を倒したからね」

「それぞれの名前は？」

「《否定定義》は鋼<sup>こうなま</sup>風<sup>ふう</sup>梓<sup>あずみ</sup>美。《非観理論》は虎<sup>いたどり</sup>杖<sup>きあ</sup>紀<sup>き</sup>亜。その両名とも、今日から一輝が通う高校に居るよ」

「知ってるさ。だからわざわざ俺はそこ高校に転入するわけだしな」  
もう一口お茶を含ませた後、俺は面倒臭そうに言う。

「……《完全干涉》はもう反応無しなのか？」

「案外そうじゃないんだよね。面白い事に」

「何が面白いんだよ」

ニヤニヤと不快な笑いを浮かべる千秋に俺は問いかける。

「まずは《非観理論》だけだね、使用者<sup>ユザー</sup>が途中で変わってるんだよ」  
「どうやって？」

「前使用者の日記帳……正確には記録帳を見たら、簡単に次の使用者になっちゃったの」

「それが《完全干涉》にも起こってると？」

「そんな感じかな？　ちいにも詳細はよく分かんないから」

「使えない女」

「酷ッ！」

「そんな事より、もうそろそろ準備しないと学校に遅れるぞ」

「ああ、本当だ」

慌ててどこかに行つた千秋。

俺はと言えば、そんな千秋の無鉄砲な行動を「バカだなあ」なんて思いながらゆっくりとお茶を飲んでいた。

………　つて、何で俺はそんなに優雅に過ごしているんだよ！？  
俺、今日が初日だからいつもより早く出なきゃいけないんじゃないのかよ！！

残っていたお茶を流し込み、バカにしていた千秋と同じ行動を取っていた俺がいた。

## s 2 (後書き)

あらずじ書かなきや いけないよなあ  
.....

コード。

俺や千秋はそう言っている。

所謂、超能力や異能のようなものだ。

他には、仮想空間具現化現象などと言った堅苦しく長かったらしい名称もあるそうだが、俺達はコードと言っているから、コードで統一する。

コードの概要は、自分のルールだ。言い換えれば、自分だけの極論や暴論。

それを能力のように使うことが出来る。

いくつかコードにも共通したルールがある。

一つ目。能力として使用できるルールは一人一つまで。変更はできない。

二つ目。コードは何かを指定しなければ発動できない。

三つ目。コードは現実世界では使えない、という風に誤認してしまう。

俺が知りうる限りではこの三つがどのコードにも共通した事項である。

一つ目、二つ目までは異能系の漫画などでよくある設定だと思うから詳細は言わない。というか書いて字の如くだ。

三つ目に関しては、少しややこしい事になるため説明しにくいのだが。

簡単に言えば、思い込みや先入観が先導して、結果、三つ目の共通事項が生まれたということになる。

まあそもそもこれら全て、俺が考察したのではなく受け売りなのだが。

ともかくそんな不思議な能力(?)であるコードは、実は俺と千秋も使える。

使えるからといって、だからどうした、という話なのだが。

「濁川一輝にじかわ かずきです。父の仕事の事情でこちらに転入してきました。これから宜しくお願いします」

自己紹介のときに黒板に氏名を書くなんてのは、アニメや漫画とかのみの設定なのだろうか？

そう俺が思った原因は、単に自分が担任教師に黒板に名前を書いてくれと言われなかったからである。

わざわざ自分から名前を書いたとしても、図々しい奴だと思われるだろうからそのまま言葉のみの自己紹介をした。

しかし驚いた。

自分の席は一番端の廊下側の一番後ろの席だと思っていたのだが、ちょうど俺の転入に合わせて席替えなんてものをしたので、結局、俺は中央の一番後ろから二番目というなんとも微妙な席に座らされたのだった。

自分のくじ運の無さとその微妙な位置に俺は驚いた。

まあそんな事はともかく。

午前の授業を平然と乗り切り、昼休み。

当然、弁当など持参しているわけもなく、行きの途中でコンビニに立ち寄る時間もなく、虚しい昼を送っている最中、千秋からメールがあった。

『ちいのお昼ご飯がない。ください』

間髪入れずに返信には『だが断る』と打ち、俺は自分の教室を出て校内の散策を始めた。

出た理由は簡単。

なんとなく、そろそろクラスの奴らの一人か二人が話しかけてくる様子を取っていたからだ。

人と接するのが苦手、というわけではないが、あまり交友関係が無駄に広めても行動しにくくなるだけである。

だから余り人と喋らない根暗な性格を貫き通そうと意識した結果、こんな行動を取ったわけだが。

「一輝、弁当」

廊下を適当にぶらついていたら千秋と会った。まあなんたる偶然。俺に差し出してくる千秋の手にぶつ刺すシャーペンが無くてガツカリだ。

「千秋、情報」

もう千秋とは学校で会っても二度と口を利かないことを心の中で誓いながら、俺は千秋に聞く。

「それより弁当」

そう返してきた千秋の頭を鷲掴みし、無理やり場所を移動する。

っていうかコイツは何だ？ 何なんだ？ 朝から俺をまるで自分の執事か何かと勘違いしてるんですか？

「痛い痛い痛い痛い痛い、ごめんなさい放して」

謝辞を入れてきたので俺は仕方が無く、千秋の頭を放す。

「《否定定義》と《非観理論》についての情報。今すぐに言う」

「今、鋼尻梓美も虎杖紀亜もそれぞれの教室で昼食を取っています。ちいもお弁当食べたいな」

「お前、自分の事をちいとか言って恥ずかしくないの？ それともわざとキャラ狙ってやってるの？」

いい加減、昔からの癖を直せよ千秋。溜息を吐きながら俺はそう思う。

しかし、《否定定義》《非観理論》の両者とも接触をわざと避けているのか。

それとも、定期的に……例えば校外やメールのやり取りなどで接触しているのか。

こちらら早く、この二人と接触したいんだが。まあ焦っても仕方がないか。

ともかく千秋に二人を見張らせておくのが一番無難だろう。

「おい、千秋」

「ちょっと待つて。二人とも動いた」

千秋が何か携帯とかを見るわけでもなく、焦点が合っていない視界のまま俺に言う。

「二人はどこに？」

「……特別教室棟の階段、多分そこに向かつてる」

「わかった。行ってくる」

「え、もう仕掛けるの！？ 早過ぎない！？」

今度はしっかりと俺に焦点を合わせて、千秋が反対してくる。

「殺し合いをするわけじゃない、話し合うだけ。それと少し教えてやるだけだ」

「絶対に争いごとになると思う。ならなかったら奇跡」

ジト目で俺の評価を表してくれるなんて、なんて妹だ。あとでお仕置きが必要かもしれない。

「あつちが一方的に警戒して攻撃をしかけてすべて失敗するだけだ。何の問題もない」

コードは火を出したり、水を操ったりする魔法的なものじゃない。

まあ使い方によっては出来るだろうけど、そんな最初から物理的破壊をもたらすような危険な代物じゃない。

限りなく、周りに被害は出ないだろう。

「……………特別教室棟、2階と3階の間の踊り場に二人とも集まったみたいだよ」

千秋が正確な位置を教えてくれたため、俺はいそいでそこに行く。まあでも、見送りまでジト目じゃなくても良いじゃないか千秋さんよ。



### s3 (後書き)

展開早いよね。そうだよな。  
まあggaggよりもマシか。マシかな？

「本当にありがとう虎杖君。貴方のお蔭でテストはバッチシ」

「いやー、もう僕は何も言えないよ。《非観理論》をカンニングの為に使う破目になるなんて」

男子高校生と女子高校生の話し声が聞こえる。

……… って当たり前か。ここは高校なわけだし。

しかしこの特別教室棟つてのは白昼なのに人が無い。放課後になれば部活などで賑やかになったりするんだろうけど。

まあそんな事はどうでもいい。

さっさと俺も《否定定義》と《非観理論》のお喋りに参加しなきゃな。

「いやー、それは確かに驚くな。コードをそういう風に使うとは」

「……… ツ!？」

三階の踊り場に登場した謎の学生を最初に見たのは《否定定義》使用者である鋼風梓美。

後に続いて《非観理論》使用者である虎杖紀亜も謎の学生を見上げてくる。

謎の学生たる俺は平然とした顔で「あ、ドヤ顔決めといった方が良かった」なんて事を思っていた。

「誰？ 虎杖君の知り合い？」

「……… いいや違う。今日ウチの学校に来た2年の転入生だ」

「別に《非観理論》を使って調べなくたって名乗ったのに」

俺の口から《非観理論》という言葉が出た事によって、さらに二人が警戒を強める。

んー、なんかマズい。この二人に漂う緊張感は完全に臨戦態勢を整えてるって感じた。

別に暴力やコードを振りかざして二人を屈服させようなんて微塵たりとも考えていないのに。

「どうせそつちには《非観理論》があるから自己紹介する必要も無いんだけど……まあ、小さい時に散々仕込まれた事だからな。礼儀は通さなきゃ」

戦闘前の敵キャラとかが言いそうな台詞だなあ、なんて若干傍観者を気取りだした内心を無理矢理引き戻し、俺は二人に自己紹介をする。

「俺の名前は濁川一輝。使うコードは《無影無綜》。自らと自らが触れた物質を消し隠す事が出来るんだ」

「コード……？」

鋼風梓美の方が俺の言葉に少しばかり首を傾げる。

「仮想空間具現化現象とも言う。けどそれだと長いし、コードって言った方が短くてカッコいいだろ？」

まあ正直なことを言えば、俺はカッコいいからコードと言っている。

「俺がこの学校に転入してきた理由は二つ。一つはぐうたら妹の生活改善のため。一つは、お前達二人だ」

「……わたし達を殺しに来たっていうわけ？」

「《完全干渉》やお前と一緒にするなよ殺人鬼。俺はもっと穏やかな人間だ」

鋼風梓美は少し眉を動かし、虎杖紀亜は苦笑いを浮かべる。

「俺はまあ、簡単に言えば、お前達を独断で審査しにきた」

「審査？」

鋼風梓美がまた首を傾げてくる。虎杖紀亜の方は完璧に口を挟まない気である。

まあ話す相手は一人の方が楽か。

「お前たちは分かっているだろうが、《否定定義》と《非観理論》の組み合わせは非常に危険だ。過去、未来、現在の情報の全てを掴みきったと言っても過言じゃない」

「それで危険因子であるわたし達を独断と偏見で審査して、結果、本当に危険だと貴方が判断したら？」

「当然、殺す」

俺がそう言った途端、鋼風梓美が何かを投げてきやがった。

俺はその場から一旦姿を消し、何かが通り過ぎた後、また姿を現す。

「それが《無影無綜》？ 逃げが中心のルールみたいね」

「ドアホ。人の話を最後まで聞くように、両親に教わらなかったか？」

「生憎、その両親は小さい頃に目の前で殺されちゃってね。わたしはあんまり両親に教わったことを信じてないの」

「そりゃ、ご両親が恵まれない」

「別にそんなわたしには関係無いっ！」

鋼風梓美は勢いよく階段を上って、俺との距離を一気に詰めようとする。

このお転婆娘が。別に俺はあんた方と戦う気は無いのによ。

俺は後ろへ下がり、どうにか廊下まで退く。

「随分と逃げ腰じゃない。殺すんじゃないの？」

「殺すのは判断後だ。まだ判断すらしない」

「なら良かったじゃない。良い判断材料ができて」

ああそうかい。このお嬢さんは俺の答えなど聞いていないというわけかい。

上等だ。お兄さんに喧嘩を売ったらどうなるかを身を持って知るが良い。

「そこまで死にたきゃ、さっさと死ねよ」

直後、三階の踊り場が丸ごと消える。

《無影無綜》。自らと自らが触れた物質を消し隠すコード。

そしてその使用者は俺である。俺が居た……足で触れた場所は隠す事が可能だ。

「さて、問題です。俺は先程までどこに居たでしょうか？」

「……………ッ否定！！」

自由落下しかけていた鋼風梓美の体は尻餅をつくように踊り場に落ちる。

《否定定義》。ルールを無効化するコード。

つまりそれは、相手の理論であるコードをも無効化できるという事。  
一筋縄ではいかない相手だ。

……… って違う！ 相手じゃない！ 俺は平和的にことを進めようと思ったのに！

いつから少しバトルっぽくなってんだよ、バカか俺は！

ああー、これは千秋に怒られる。絶対に怒られる。そして弁当と言われ続ける。

っていうか。

「おい、お前スカートの隙間からパンツ見えてるぞ」

ホント、最近のスカートって短いよな。冬場とか絶対に寒いだろうに。どうするだよ。

まあミニスカよりかは長いけども。本当に冬場どうするんだよ。っていうか今冬場だろどうするんだよ。

「~~~~~ッ！！ …… 殺す」

物凄く冷淡でまるで機械のような冷たさを感じる声が鋼凧梓美から発せられる。

ああー、俺の発言一つ一つが平和という文字をぶち壊していくなんて。

もういつその事、俺のコードは《平穩崩壊》に改名したほうが良いんじゃないか？

鋼凧の右手にはシャーペンが握られている。

ただの文房具だとは思うが、人によつては目に突き刺して凶器へと変貌させる天才がいるんだ。極稀に。

そしてそういう天才の雰囲気は今、鋼凧は纏っている。

まあ平和とは少しかけ離れたが、ここは一つ遊びを、  
「かくれんぼでも、始めようじゃないか」

#### S 4 (後書き)

やっぱりバトルっぽくなると俺ってグダるなあ……………

先程から何度か、鋼凧に姿が見つかってしまっている。

というよりは《無影無綜》を無理矢理《否定定義》で無効化させられて見つかったているのだが。

《否定定義》

あらゆるルール……物理法則や常識、さらにはコードなどを無効化できる中々強く厄介なコードだ。

対するこっちは《無影無綜》。

自らと自らが触れた物質を消し隠すことができるコード。

しかし消した物質は《否定定義》によってすぐに元に戻っされてしまふ。

だからまあ普通に考えたら、《無影無綜》が《否定定義》に勝てるわけがないのだ。

真正面から渡り合えば、の話だが。

さて、そろそろ《無影無綜》の本来の使い方をお嬢さんに教えてあげようか。

「……チツ、どこに行ったあの変態」

鋼凧は特別教室棟の廊下にてボヤク。

謎の転入生の姿は何度か《否定定義》を使って、捉えてはいるものの、すぐにまた《無影無綜》によって姿を消されてしまう。

しかしそれでも転入生が特別教室棟にいることは分かっている。

(……しかし、本当に何なの？ あの転入生は？)

虎杖に《非観理論》を使わせてもう少し調べ上げていればよかったと、鋼凧は少し後悔する。

《否定定義》はコードによる相手の小細工、策略に対して強い。

しかし無効化するだけであるため、自らが小細工や策略に気付かなければ意味が無い。

鋼凧自体が相手の行動を先読みするようなことを苦手としているため、情報戦そのものが弱点となっている。

鋼凧の予測では、あの転入生はそういう小細工や策略などが得意なタイプだ。

決して真正面から対決せずに相手の背後を刺すような、そんなタイプの人間だ。

（……虎杖君のところに一旦戻ったほうが良さそうね）

### 《非観理論》

過去未来現在のあらゆる事象が観測できるコード。そしてあらゆる者から観測されないコードでもある。

しかし《非観理論》を使って観測した事象には言動、行動などの手段を持つてして干渉することが出来ない。

だが、《否定定義》を使えば、その制限を無効化することができる。つまりは、あらゆる事象の結末を観測することが可能なのだ。そしてその結末を変えようと足掻くことも可能となる。

簡単に言えば、相手がどういう小細工や策略を仕掛けてきてどういう結果になるのかを予知することが可能となるということだ。

目的変更し、階段へ向かおうとする鋼凧。

しかし、進行方向の廊下の床が姿を消した。

直後、鋼凧が今まで歩いてきた廊下の床が姿を消した。

「……………否定」

近くに居る、と直感的に感じ取った鋼凧は迷う事無く《否定定義》によってコードを無効化する。

《無影無綜》の厄介なところは見えないということだ。姿を捉える事が出来なければ、攻撃が当たらない。

だから迷う必要無く《否定定義》によって無理矢理、姿を現させて攻撃を加えればいい。

その考えが間違えだった。



「動くなよ」

鋼皿が間違いに気付くのはすぐだった。

転入生は鋼皿の目の前に現れ、包丁を首筋に当ててきたからだ。

「そんなの、持ってましたっけ？」

「いいや、これは学校のだよ。借りてきたんだ」

借りてきた？

鋼皿は転入生の言葉に疑問を抱くも、それを口に出す事はできない。不用意に喋ろうとすれば、包丁で斬りつけられてしまう可能性があるからだ。

「まあこれでやっと、落ち着いて話し合えるな」

《無影無綜》の正しい使い方。

それは言うまでも無く物を消すことだ。というかそれ以外何も出来ないのが《無影無綜》。

だからそれを最大限に活用する。

例えば鍵が掛かって開かない調理室に入りたい時。ドアを丸ごと消し、無理矢理、侵入する。

例えば机や棚などで何処に仕舞ってあるか分からない包丁を探す時。棚や机を消し、入っている物を全てを無理矢理、外に出す。

この二つだけでもう窃盗し放題ではあるのだが、残念ながら俺は泥棒じゃない。

散らかした物はしっかり仕舞って来た。証拠隠滅のためであるが。得物の調達が終われば、あとは気になるあの子を振り向かせるだけである。

……いや正確には抑止させて、話し合いに持ち込むだけなのだが。パターンとしては色々あるが、一番楽で二人つきりで話せるものを選択した。

ようは退路と進路を消し、首に得物突きつけて相手の動きを抑制

するものだ。

そして今、それは見事に成功し無事に話し合いに持ち込むことが出来た。

めでたし、めでたしという事だ。

「ええーと、《否定定義》。言っておくが審査と言っても見る要点は二つだけなんだ。ほぼ確実にお前達を殺すことは無いと言ってもいい」

「首に刃物突き付けておいて、そんな言葉が信用されると思ってるの？」

「お前が思う思わないじゃない。俺は真実を話しているだけだ」

おおよそだが鋼風よりも、虎杖紀亜の方が絶対に話を通じる。

こいつは人の話を聞く訓練から小学校でし直してこい。

「見る要点の一つはお前達の情報網。簡単に言えば、他にも通じてるコード使用者がいるのかって話だ」

「殺した奴は一人いるけど、今のところはわたしは虎杖君と貴方だけよ」

「……………つーことはこっちが先だったわけか」

「……………何を言ってるの？」

「別に。こつちの話だ。それよりも」

「そこまです」

背後から聞こえた声に、俺は目だけを向ける。

そこに居たのは千秋と虎杖紀亜だった。そして千秋は相変わらずジト目で俺を見ていた。

まあ確かに、殺し合わない言っておいて女子生徒の首筋に刃物当ててますもんね。

完全にこれは千秋に怒られる。

## S5（後書き）

ほらやっぱりグダった。  
戦闘グダった。もうダメだ俺。戦闘無理だ。

「一輝言ったよね？ 問題無いって」

「……はい」

「で、一輝はさっきまで何をやっていましたか？ ちいに分かり易く説明してみてください」

「……なあ、お前いい加減ちいって呼ぶの」

「つべこべ言わずに早く。ナウ」

「……《否定定義》のコード使用者である鋼風梓美が好戦的な態度をとった上に殺意をむき出しにされて自分の命の危機を感じましたから、自己防衛のため、鋼風梓美の首筋に刃物を突き立てて抑止していました」

叩かれた。千秋にジト目で思いつき俺を叩いて来た。

「一輝が交渉とかには向いていない事がよく分かった」

「俺は交渉とかに向いてないわけじゃない。お前よりは向いてる自信がある」

「分かった言い直す。一輝は平和的交渉には絶望的に向いていない事が詳しく理解できました」

「……返す言葉もございません」

いや別に俺が、俺のみが完全に悪いわけじゃないと思うんだよ。

鋼風にも非はあるし、そもそも鋼風が仕掛けて来なければこっちは争う気なんて微塵も無かったんだから。

俺のみが怒られるのは不公平って言うか……まあ公平なんてものがあるなんて信じては無いけど……絶対に千秋の言い方だと俺が10割方悪いように感じるじゃんなんか。

気に食わないな……気に食わない……………。

「ウチの一輝が、本当に失礼しました」

まるで犬が誰かを噛んだりした時のように千秋が謝る。

いや、俺は犬ですか？ 躰けが成ってない犬とでも言いたいんです

か？

「いえ、ロクに話を聞かないで喧嘩を吹っつけた僕達も悪いわけですし」

虎杖も、まるで犬同士が吠えあつた時のように苦笑いをしながら謝る。

ちよつと待て。鋼皿が犬だろうがネコだろうがダニだろうが構わないが、俺をそれと同種のように扱うな。

俺はあんなにバカじゃない。アイツと同種にされるのだけはご免だ。

「ちい……私たちがそちらに接触した理由は、偵察の一環なんです」「審査つて、さっきは言つてたんですけど？」

「まあ審査もあながち間違つてはないですけど。私たちはあるコード使用者を探してるんですよ」

千秋の言う通り。俺たち……正直言えば、俺があるコード使用者を探している。

「そいつを見つけたらどうするんですか？」

「半殺しだ」

虎杖の問いに、千秋の代わりに俺が答える。

「あいつのコードを奪つて、精神を壊して、牢獄へブチ込む」

「なんだ。わたしとなんら変わらないじゃない、貴方も」

「変わるさ。殺すなんて生温い方法を取ってるお前とは」

口を挟んできた鋼皿をすぐに否定し、また睨み合いになる。

つていうか鋼皿を睨んでたら、千秋に蹴られた。痛い。

「ともかく私たちが捜しているコード使用者は危険なんです。世界レベルで」

「……それで僕の《非観理論》を使ってそのコード使用者を探そうと？」

「ちよつと違います。《非観理論》でも見つかるかどうか怪しいので、そんな曖昧なものには頼りません」

虎杖は少し驚いた顔をする。

まあ本来、《非観理論》は全ての事象を観測できる。

でもコードを使えば、その監視の目を掻い潜る事だつて可能だ。

虎杖が驚いたのは、こいつがまだそれ程多くの……《否定定義》と《完全干渉》の二つのコードしか近くに無かったからだろう。

「私たちが接触した理由は、私たちが追っているコード使用者がそちらに接触してないかを確かめるためです」

《否定定義》と《非観理論》。

この二つが揃えば、無限に未来を予知できる。

出来れば、味方につけたいコンビである。まあ俺は鋼凧とは気が合わないと思うから味方に付けたくないんだけども。

ともかく俺が追ってるコード使用者は今何処で何を考え何をしてるかが分からない。

だからまずは悩みの種を摘み取っていく。

取り敢えず、こいつらはまだコード使用者に会っていない。

だが、後々接触される可能性がある。だから俺はわざわざこの高校に監視目的で転校してきたわけだ。

「一輝は少しはしゃぎ過ぎましたけど、私たちに敵意はありません。できればそちらと協力したいとも思っています」

「絶対に嫌だ」

嫌な気が合う俺と鋼凧は同時に言い、その直後、俺は千秋に踏みつけられた。

このヤロウ、絶対に後で覚えておけよ。夕飯はお前の嫌いなピーマンとナス炒めにしてやる。

「ま、まあこつちも多分……最低限、僕は敵意がありませんのでそちらに協力したいと思います」

踏みつけられている俺の姿を見て、口を押えてバカにするように鋼凧が笑っていたので俺は唸り牙を剥きながら威嚇していた。

……じゃなくて、苦笑いをしながら虎杖が返事をする。

取り敢えずこれで、千秋と虎杖の協力関係は結ばれたわけだ。

ただ一つ言える事があるとするならば。

その後、放課後の体育館裏で俺と鋼凧が喧嘩をしたことを知ったら、

もつ次は千秋が激ギレして折檻してくるかもしれないという事だ。

「…………チッ」

転入初日の騒動から数日後。

俺が起きた時刻は4：27。

いつも学校に行ってる時間は7：00。

遥かに無駄に早起きしてしまった模様だったため、朝食と弁当を作ったりしていたわけなんだが……。

現在時刻は6：30。

そろそろ眠り姫、千秋を起こしに行くべき時間か。

っていうかアイツ。そんなに夜更ししてるわけじゃないのに、むしろ夜の8時には寝てるような子供のような生活を送っているのに、何でこの時間までブツ通しで寝れるんだ？

……まあ一番打倒な理由は精神的な疲労だろう。

容姿のこととでやかく言われないわけが無い。俺は知らないがイジメなどもあるかもしれない。

まあイジメなんて物をされれば、千秋はその倍返して相手の精神をスタボロにぶち壊すこと間違いないが。

「入るぞー…………」

元ゴミ屋敷、現俺の住処であるこの家。

2階まである一戸建てで、まあ物凄く広いわけでは無いが、家族単位で暮らすには問題無い広さがある。

その2階の部屋の一つのドアを開け、俺はノックもせずに入。千秋の部屋。ベットとクローゼット、それに縦長のデカくて全身が見れる鏡……姿見が一つ置いてあるだけだ。

まあ本来なら無駄なプリントやらペットボトルやら缶やらが散乱していたのだが、つい最近、俺の手によって全て片付けられた為、現在はこうしてシンプルかつ綺麗な部屋となっている。

……………んな苦勞話はどうでもいい。



ベットに薄いタオルケットを一枚掛けて寝ている千秋。

秋も暮れ始め、もう一ヶ月しないうちに12月になるのにタオルケット一枚は寒かるうに。

「おい、起きろよ眠り姫」

そう言つてタオルケットを引き剥がす俺。

そして、その直後、静かにまたタオルケットを丁寧に掛けて上げたのは、決して千秋を可哀想だと思つてやったわけじゃない。

まさか義妹であり幼馴染のようなものであり親友でもある千秋が裸ワイシャツで寝てるとは思わなかったからです。

裸ワイシャツでタオルケット一枚……………こいつは風邪を引きたいのか？

「おい、千秋。さつさと起きろ。学校遅刻するぞー」

無理矢理起こす方法から、体を揺さぶつて起こす方法にチェンジ。数秒後、のそりと千秋が起き上つてきた。機嫌が悪そうな顔をして。

「…………ちい、吐くかと思つた」

「吐く物も食つちやいないだろ。さつさと朝飯食え」

そう言つて俺は千秋の部屋から出て行き、1階に下りダイニングに一人分の食事を用意する。

俺はもう千秋を起こしに行く前に食い終わつてるから、千秋の分だけを用意する。

十数秒後、千秋が騒がしく階段を下り制服姿で俺に向かって喚き散らす。

「一輝！ 見てないよね！？ ちいのその…………見てないよね！？」

「ああ、見てない。それにしても人間の体つて凄いやな。昔は貧相だったものも今では大きく豊かになつてるんだものな。俺さっき驚いちゃったよ」

「それつて何の話！？」

「にしても裸ワイシャツにタオルケット一枚は止めておけ。もうそろそろ寒くなつてくるんだから風邪引いちまうぞ」

「見たなあ！！」

千秋が朝から柄にもなく無駄に大はしゃぎしている。何故だろう？  
あ、バカで寝起きだからか。

「おいおい千秋、胸倉を掴むな。行儀が悪いだろ」

「行儀も礼儀も仁義も知ったものかあ！　ちいの恥ずかしい姿を見た限り、一輝の死は確定しているう！」

「恥ずかしいと思うなら、ちゃんと服着ればいいじゃないか。それに俺はお前の裸を見たわけじゃないし、ワイシャツ越したっし。それと後、下着越してもあったな」

「だからその下着姿が恥ずかしいってちいは言ってるの！」

「ワイシャツが有った。問題無い」

「うるさい黙れ一発殴って記憶を抹消してやる一輝のバーカ！」

「ハア……………6：42。賢いお前なら意味分かるよな？」

俺が現在時刻を言った途端に急いで朝食を摂り始める千秋。

本当、バカって扱い易くて楽だね。

そう思いながらテレビを……………付けたくても我が家にはそんな物はないので、新聞を……………読みたくても我が家はそんな物を取っていない。仕方が無いので、携帯でニュースを見る。

政治、経済、その他諸々。スポーツと芸能は除いてる。興味が無いからだ。

暇ならニュースを見る。義父……………まあ俺と千秋を引き取ったクソ野郎に昔教え込まれたことの一つで、俺にとってはちよっとした一環になってきているものだ。

ニュースは出来事の断片的な部分しか伝えられないが、多くの情報を得られる。

その多くの情報の中には、時々コード使用者が起こした事件も含まれている可能性すらある。

それに、コードなんて異能を持っていて悪用をしないのは平和ボケで頭がマンネリ化したような奴かよっぱど正義に憧れたバカ野郎しか居ない。

だから月一のペースでコード使用者が起こした事件が入ってるはず

だ。

そんな風に、義父は言っただけのような気がする。

まあその後、その事件を見つけられるかどうかはお前の洞察力や直観次第だけだな、と付け加えていたが。

直観なんて哲学的な言い回しでムカついたことを今でも覚えている。しかしまあ……………。

「送検中の強盗致死罪の男が逃走。今朝方、この市内で目撃された情報あり……………」

「普通の人からしたら怖いね、それ」

朝食を呑み込みながら、千秋がそんな感想を呟く。

まあそうだろう。普通の人も、普通じゃない人も警戒すべき事件だ。この市内は思ったよりも物騒かもしれない。

## s 7 (後書き)

グダる。いっそ、もう本番へ入ってしまおうか？

「……え、今なんて言った？」

放課後、千秋に呼び出された俺は、誰も居ない、なんとも不気味な教室にて話を聞いていたのだが。

あまりにも唐突で、というか予想の斜め上なことを言ってきたので、もう一度と聞き返してしまった。

「だから、今日ウチに梓美ちゃんと虎杖君を招いて親睦会をやるうと思っ……」

分かった。千秋はきつとアホなんだ。

「……ねえ一輝。ちいの話聞いてる？」

「聞いてない。聞かない。聞きたくない」

「何？ 梓美ちゃんが来るのが恥ずかしいのお？」

よく分からないが、多分アホの千秋なりに俺をからかおうとしているんだろう。

しかし残念。俺は少しでもム力つく台詞を言われると徹底的にそいつを虐めなくなっちゃう性格なのだ。

……嘘である。しかし千秋の場合は、それは真実になる。

「まあ恥ずかしいな。わざわざ家に来てもらってお前の裸ワイシャツ姿を見て帰ってもらうのは。いくら義兄でも恥ずかしい」

「いや、あれはそのええと……っていうか見たんでしょ！ ちいのその……朝の姿！」

「見た見ないはこのさい関係無い」

「関係ある！」

「重要なのは、お前がはしたない姿で寝ていた事だ」

「うう……」

「お兄ちゃんは驚きだ……まさか妹が……血が繋がってはいないとはいえ、俺の妹がそんな変態趣味に目覚めたなんて……」

「変態趣味って何！？ 一体、ちいが何に目覚めたっていうの！？」

「露出だろ？」

「目覚めてない！」

「いいよ、もう。自分に嘘を吐かなくなつて。お兄ちゃんは驚かないよ、妹が露出狂でも」

「そこはむしろ驚くべきでしょ！？　っていうかちいには自分に嘘なんて吐いてない！」

「もういい……お兄ちゃんは妹が露出狂でも見捨てたりしないから。むしろ喜ぶから」

「喜ぶって何！？　一輝の方が変態じゃない！」

「バカ野郎！　男は皆、変態なんだよ！　おっぱいに至福を感じるんだよ！」

「~~~~~ッ！！　変態！　最低！　一輝なんか死んでしまええ！」

「さて、千秋を一通り弄り終わつたところで」

「今までの全部冗談だったの！？」

「ああ冗談だ。男は皆、変態なんかじゃない。男は皆、狼なんだぞ。覚えとけ」

「まあ確かに一輝は狼っぽいけど……」

俺が狼？　つまりそれって……。

カッコいいって事か！　いやあー、千秋も嬉しい事を言ってくれる。本来なら狼つてのは嘔吐きや独りぼっちとかを意味するのに、カッコいいという風に使うとは。

中々良いセンスしてるじゃないか千秋。

まあそんな事はどうでもいい。

「鋼皿と虎杖を誘って、ウチで親睦会をしてもいいぞ」

「えっ！？　ホントに！？」

「ああ。一応あの二人には色々言わなきゃいけない事があるし……追加で忠告もしときたいしな」

「……忠告？」

「まあともかくウチで色々話をしよう。千秋は二人を誘ってくれ。」

「分かった」

さて……………鋼皿が嫌いな料理は何だろうか？

[illegible]

そして大方、食事が終わった頃。

「濁川先輩って、モテますよね」

余談だが、鋼皿と虎杖は高<sup>1</sup>。俺と千秋は高<sup>2</sup>なので一応あの二人

それでこの言葉だ。

つまりこの台詞を言われたのは俺と同じ苗字を持つ、千秋である。

「そんな事ないよ。告白とかされた事ないし」

「またまたご謙遜を。ウチのクラスでも時々噂としてでますもん」

まあそれに千秋は何故だかお胸が豊かだし、顔だって整っている。

「噂といえばカスも最近噂になってますね」

「カスじゃない一輝だ」

しかし俺の噂？ こいつとの喧嘩以外は特に何かをした覚えはない

んだが。

「誰も近付けようとはしない孤独でキザな転校生。まあでもその実態は覗き趣味の変態よね」

「変態は俺じゃない、千秋だ。履き違えるな」

「……………えっ？」

鋼皿は俺の台詞の意味が分からずフリーズして、千秋は顔を赤らめて下に俯いてしまっている。

「いやぁー絶景。面白いくらいに良い眺めだなあ、おい。」

まあそんな事はどうでもいいか。そろそろ本題に入ろうか。

「で、どうだった……………俺が作った飯の感想」

「これ、一輝先輩が作ったんですか？　ってきり僕は千秋先輩が作ったんだと……………」

両方ともに敬語を使ってくれる虎杖。いや偉い。鋼皿は是非見習うべきだ。見習え。

「ちい……………私は料理とかあんまり上手じゃなくて。一輝に作って貰ってるの。美味しいでしょ？」

「せ、先輩。冗談はよしてくださいよ。こんなに美味しい料理をこのカスが作れるわけがないじゃないですか」

「何言ってるんだよ。俺はわざわざお前が嫌いそうな料理を精一杯憎悪を込めて作ってやったんだぞ。感謝しろ」

「すいません濁川先輩。食べた料理を吐きたいのでトイレを貸してください」

「おい鋼皿。その前に一つ聞くが……………案外割と美味しかったろ？」

「美味しくない、むしろ不味かった。ゴミ溜めに捨ててある生魚のような味がしたわよ」

「おかわりしたのに？」

「してない」

「僕の方も掻つ攫っていったのに？」

「くっ……………」

虎杖も雪辱を晴らすように、鋼皿へ言う。

「っていうか取られたのに何も言わなかったのかよ……………」



「まあお前は素直に『美味しかったです。すいませんでした』って  
言えればいいんだよ」

「何で謝んなきゃいけないの!？」

俺の台詞にまさかの鋼風ブチ切れ。しかし謝るのは当然だろう。

「お前、プライドのせいでわざわざ食材を無駄にするところだった  
んだぞ。魚を取るにしろ、野菜を育てるにしろ、肉を得るにしろ、  
手間が掛かるんだぞ。本来なら土下座ものを寛容な俺は言葉で謝る  
だけで許してやるって言ってるんだ。さあ早く」

「一輝、無茶苦茶……………」

千秋が呆れる様に言うが、とにかく俺はこの鋼風に謝らせたいのだ。  
理由? そこに鋼風がいるからだよ。

## S 8 (後書き)

いい加減、ゲームを始めようかな？  
いやまだか。いやもういいか。いやまだだ。

「……美味しかったです、すいませんでした」

鋼風敗北。俺勝利。

いやあ、物凄く気分が良い。余の気分は最高潮だぞ。ハァーハツハツハ！

……少し反省しようか自分。

「そう言えば一輝。なんか教室で二人に話があるって言ってたけど」  
「ん……ああ、そうだな」

千秋の発言で俺は真面目モードに入る。

……っていうか、俺に真面目モードなんてものがあるのだろうか？  
まあ、どうでもいいか。

「そういえば千秋。《完全干涉》の件はどうなった？」

「んん……あれはまだ市内にいるよ」

「ちよつと待つてよ。《完全干涉》って言ったの？」

険しい顔つきをしながら鋼風が俺に問うてくる。

「ああ。だがまあ安心しろ、お前が今危惧している事は起こってない」  
「………？ 何を言ってるの？」

「虎杖の《非観理論》は本来のコード入手法以外で手に入れただろ。それと同じ事が《完全干涉》にも起こってる。詳細は不明なんだがな」

「……僕が日記帳を見たいに、誰かが《完全干涉》が残した何かを見たって事ですか？」

「そういう事だ。つまりまあこの市内に《完全干涉》のコード使用者がいるって事になるんだが」

俺は一旦言葉を区切り、少し間を空ける。

理由は簡単。

この先の言葉はあくまで俺の予測であって確証がない。だから言う

必要が無いかもしれないと思ったからだ。

でもまあ、可能性が低いわけではない。一応言っておくか。

「この市内だけでコード使用者が6人以上いる状況になったかもしれない」

「6人以上？」

千秋が少し驚いたように聞いて来る。

「ココに居る4人。そしてこの市内にいる《完全干渉》。そして今朝方の逃走犯。誰かが逃走の手助けをした可能性があるから6人以上だ」

「……逃走犯って、朝のニュースでやってた奴ですか？」

「ああ」

虎杖の確認に、俺は短く答える。

「ちよつとニュースの記事を見ておかしな部分が有つたら調べてみたんだ。当時の大まかな状況、それと逃走犯が捕まる以前に何をやらかしたか。どちらとも調べたんだが、おかしいんだ」

「何がおかしかったんですか？」

「直観的に、おかしいと感じた」

「……………カスは頭の中もすっからかんという事が分かったわ」

「一輝、もう少し論理的に考えようよ」

鋼風にバカにされた上、悟ったような声で千秋にもっともな事を言われた。

こんな屈辱は初めてだ！ このクソ野郎共が！

俺だつて論理的に考えたいが、相手のコードが分からない上に、コードによつて事実を変えられてんだから論理的に考えるのは不可能なんだよ！

比較して変わった部分を見つけるにしても、変更前の情報がない。だから論理的に考えるのは不可！

「上等だ、この尼ども！ 証明してやるよ！」

「一輝。言葉遣いをもうちよつと考えようよ。そんな興奮しないで」

「尼？ なんでいきなりア○ゾンが出て来るわけ？」

何なんだこの女二人は！

千秋はさっきから俺を諭してくるし、鋼凧に関しては尼は隠語じゃないほうの意味なんだよバカヤロウが！

ああ、だから言うのを躊躇ったんだ。ほぼ確実にこうなるから。

「でもなんでそんな風に思ったんですか？ 直観以外にも理由があるから言っただんじゃないんですか？」

「ほぼ経験則だな」

「虎杖君、このカスを相手にしてたら自分が疲れるだけだから気を付けた方がいいよ」

この四人の中の唯一の良心、虎杖に忠告する鋼凧。

まあ確かに、疲れるだけだから反論もできない。

「ともかく、この市内にコード使用者が集まってる傾向にあるってことだ」

「あ、一輝が無理矢理話を進めた」

こら、千秋。余計な事を言うんじゃない。鋼凧が食いつくだろぅが。というか、別にコード使用者が集まったとしてもこっちが不用意に力を使わなきゃお互い気付かないんじゃない？」

お、鋼凧はそっちに食いついたか。よかった。

「おいバカの鋼凧。一つ良い事教えてやる」

「何？ 言ってみなさいよカス」

「ここに集まってきたているコード使用者の目的は『非観理論』だぞ。不用意とかは関係無い」

だからわざわざお前ら二人を我が住処へ招いたんだよ。

「でもそんな簡単に虎杖君が『非観理論』の使用者だってバレることとは」

「ある。俺たちが証拠だ。コードには使用者を探せるようなものもあるんだよ」

「……………」

鋼凧が押し黙る。先程とは違って実際にそうだと分かっってしまうくらいである。

「まあ、俺たちは《非観理論》……虎杖の味方だ。他のコード使用者に好き勝手にはさせない」

「他の使用者を伝って、目的の人物との関係を持たれると困るからですか？」

「まあそついう事。それにお前を助けて損になるような事は無いからな」

俺はそう言い、食器を洗いに行く。

まあ今やらなくてもいいけど、俺が言いたい事は言ったからな。

後は本来の親睦を深めることを勝手に三人でしてくれや。

## s 9 (後書き)

ほら、グダってきたグダってきた。

「……………メール？」

食器も全て洗い終わり、三人がボードゲームやらランプなどをして鋼皿が大惨敗している様を優雅に眺めていると、ポケットの中で何かが振動した。

当然、振動したのは携帯なのだが……メールのやり取りをする友達を作った覚えがなければ、俺の携帯のアドレスを知ってるのは義父と千秋と外国に住んでる知り合いの程度だ。

千秋がメールをしてくるわけが無いし、義父が俺にメールをする事なんて無いし、外国の知り合いはゴミ屋敷を掃除している時にしばらくメールしないという連絡が来たし、迷惑メール対策もしているし。

俺の携帯がメールを受信するはずが無いのだ。

一応メールかどうかを確かめる為に、ポケットから携帯を出す。

確かにメールを受信していた。だが内容は、

『このメールに本文はございません』

何とも奇怪な物だった。

アドレスも俺が知るものではないし、タイトルも無い。そして本文も無い。

迷惑メールでも無いだろう。ある意味迷惑なんだが。

「おいカス」

「いきなりなんだ、クソ皿」

「これって、貴方のアドレスなの？」

そう言っただけで鋼皿は携帯画面を俺に差し出してきた。

画面に映されていたのは題名も本文も無い、俺に送られてきたのと同じアドレスのメール。

「千秋、虎杖。お前らも今メール受信したか？」

確認を取ると、二人とも頷いた。



……という事は考えられるのは三つ。

一つはこの市内の全員に同じメールが行き届いているという可能性。  
一つは俺たちが通う学校の全員にメールが送られた可能性。

一つはコード使用者にのみこのメールが行き届いてる可能性。  
多分、これしか俺たち四人の共通点は無いはずだ。

「……ッ！」

俺が思考に耽つてしていると、またメールを受信した。

『おめでとうございます！ 貴方は参加者に選ばれました！』

本文に書いてある文章を読んだ瞬間、直感的に俺の中で答えは一つに絞られた。

これはコード使用者にのみ送られてきたメール。

参加者……ということは何か面倒事が起こるってわけか。

そして続けて俺の携帯がメールを受信する。

『ゲームの概要説明 参加者9名のうち一人の勝者を決めるゲームです』

『参加者全員、コード、と呼ばれる不思議な力を持っています』

『参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合つてもらいます』

『参加者が死亡した場合でも、物が破壊されなければ敗退にはなりません』

『敗退条件は、ものの破壊です』

『敗者は参加者の命、それと同等の物の破壊を禁じます』

『勝者は失ってしまった大切なものを復元する事が出来ます』

『例えばそれが命であつても』

『なお参加者それぞれのコードは』

『《無影無綜》』『《非観理論》』『《否定定義》』『《完全干渉

《》』『《干渉不可》』

『《禁思用語》』『《異見互換》』『《結論反転》』『《絶対規律

《》』

』となっておりです』

『ゲーム開始時刻は明日の0：00からでございます』

『くれぐれも殺し合いと勘違いなさらないように。これはあくまで壊し合いです』

『それではご検討を祈ります』

そのメールを最後に携帯は静かになった。

しばらく誰も喋らない沈黙が広がる。何が起きているかを理解する時間である。

パニックを起こして騒ぎ出すか、冷静に判断し落ち着きを掃うかの二つに別れる時間である。

正直、鋼風がパニックを起こしてほしい。そうすればいくらでもバカに出来るから。

「一輝、どう思う？」

最初に声を出したのは千秋だった。案外、皆冷静なんだな。

「どうもクソも無いな。まず最初に狙われるのは千秋と虎杖だ」

誰もパニックを起こしそうにないので、パニックになりそうな事を言ってみたが結局誰もパニックらなくて俺は物凄く残念だ。

「《非観理論》を使ったら、何を壊せばいいかバレますもんね」

「こつちには《否定定義》がいるからな。そう言う事だ」

自分が狙われているというのに冷静過ぎる虎杖が少し心配になりながらも、一応答える。

「まあ良かったのは参加者9名のうち、ここに約半数が集まっていることだ。それだけでも相当有利だ」

「……つまり他の奴らを潰せば後は争う必要は無いつていうわけ？」

口を挟んでくる鋼風。だがまあ言ってる事は正しい。

「そう言う事。だけど不用意には動かない方がいい」

「派手に余計に動いたら、他の5人が協力する可能性があるから？」

「ああ。そうすれば不利になるのはこつちだ」

姿を隠すコード。ルールを無効化するコード。全ての事象を観測できるコード。それと千秋のコード。

これだけで他のコード一気に相手するのは無理だ。

鋼皿。何かお前は人を殺すとか潰すとかそういう面では頭が冴えるんだな。

「でも一輝。まだ一つ疑問に残るんだけど」

だが、命まで復元できるのか？ 精神まで復元できるというのか？

人や物を復元できる、それだけのコード……。

また壊す……。

壊し過ぎて、物が無くなって、壊すために直す……元に戻す……復元する。また壊すために。

「参加者『絶対規律』か……」

⌈  
⋮  
?  
⌋

そんなに心配せずとも、俺は正気だ。まだ正気だ。まだ墮ちてない。

「あひや」

自分が誰で何処に居て如何しているかも分かっている。

自分がどういふ奴だかしっかり分かって、演じてる。

[illegible][illegible][illegible]

八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
つ  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八

[illegible][illegible]

[illegible]

「一輝……？」

だから千秋、心配するなつて。まだ俺は正常だ。ただ嬉しいだけだ。嬉しくて嬉しく嬉しくてうれしくてうれしくてウレシクテウレシクテ、

とてつもなく気分が高揚しているだけなんだ。

「みいーつけた」

探してた者がやっと見つかって、嬉しいだけなんだ。

## S10（後書き）

主人公発狂www

いや嬉しいだけらしいですけど、

探し物一つ見つかっただけでここまで笑わなくても、ねえ？  
これでやっとゲームに進めるよ……ハア。

## サイド

《干涉不可》は築40年以上の、周りの住民からは魔女の館と呼ばれる雑草や木々が生い茂るボロアパートにてメールを受け取った。

「……《無影無綜》？」

連続して送られてくるメールの中で、《干涉不可》の興味を一番惹いたものはそのコード名であった。

（……《無影無綜》って、どういう事？ アイツは確か……）

《干涉不可》は《無影無綜》とは面識がある。あるがしかし。

《干涉不可》が知っている《無影無綜》はもうすでに他界しているはずなのだ。

（アイツが生きてたって事……？ そうだとしたら……）

自分がこの手で《無影無綜》の全てをぶち壊してやらなければ。

最初の獲物を定めた《干涉不可》は静かに動き出す。

「ゲームだあ………？」

雑居ビルの2階にある診療所にて《完全干涉》はメールを受けていた。

やっと仕事が終わったというのに、こんどはこんな迷惑メール。

連続して送られてくるメールが癪に障り、思わず携帯を折ってやるうかという思考まで行きついていった。

が、ある文面を見てその気持ちは消え去ってしまう。

『勝者は失ってしまった大切なものを復元する事が出来ます』

『例えそれが命であっても』

その文面を見た途端、《完全干涉》の気持ちが大幅に揺れた。

別に何か失ってしまった物が、どうしても元に戻したいものが有るわけではない。

ただこの一言が《完全干渉》の今までの人生を否定することになっていた。

だから決める。自分がこのゲームに参加することを。

勝者を出させない為に。今までの人生を肯定するためだけに。

《禁思用語》と《結論反転》は同じ場所でこのメールを受信した。

「……ねえ《結論反転》。手を組まない？」

そして《禁思用語》が提案してきたのが協定であった。

「何故？ お前と組んで最後まで残れたとしてもお前との潰し合いだ。意味が無い」

「こつちのコードは独りきりだと基本的に弱い。この参加者9名の中じゃ最弱を誇ってもいいくらいかも。だけどサポートに回ればまあ強い」

「……つまり、お前の為に組めと？」

《禁思用語》を睨みつけながら《結論反転》は問う。

「そつちの為でもある。もしも最終的に残れたとしたら、あとは最弱のコード使用者を潰せばいいだけ。リスクが少ないでしょ？」

「……まあ、他の使用者が単独で行動するとは限らないからな  
いいだろう」

そして今、《禁思用語》と《結論反転》のコンビが結成された。

「『勝者は失ってしまった大切なものを復元することができます。  
例えばそれが命であっても』か……」

《絶対規律》は自分の胸に手を当て、メールの文面を音読する。

（もしも、これが本当だと言つのなら…… 本当だと言つのなら……  
……）

失ってしまった命さえも元に戻せるというのなら、自分の望む物は一つしかなかった。

自分に一番大切なことを教え、一番大切なものをくれたあの人を生き返らせること。

自分のコードを持ってしても叶えられない儚い望みを叶えられるというのなら。

《絶対規律》は自ら進んで参加する。

『参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合ってもらいます』

その文面を見た瞬間、《非観理論》……虎杖紀亜は困惑した。

（僕が命と同じくらいに大切にしているもの……それって何だ？

何なんだ？）

物心ついた頃には母親は居なく、父親も夜遅くまで働きその上転勤も多かった為、友達と呼べるような関係も作れぬまま今まで過ごしてきた。

家でも外でも独りつきり。そんな自分が命と同等に大切にしている物など思いつきもしなかった。

「どうもクソも無いな。まず最初に狙われるのは千秋と虎杖だ」

一輝のその発言で自分が物思いに耽っていたことに気付いた紀亜は取り敢えずその言葉を肯定する。

「《非観理論》を使ったら、何を壊せばいいかバレますもんね」

そう自らのコード《非観理論》を使えば、自分がどんな物を大切にしているかが分かる。

しかし、そうしなければ何を大切にしているかが分からない自分が居る事がとてつもなく嫌だった。

嫌悪感に負け、紀亜は《非観理論》を使用し調べるのを止めた。



(…………ゲームなんて、ふざけてる)

一輝への質問が終わり、鋼凧はそう思った。

正直、命と同じくらいに大切にしているものを壊し合えなんてふざけたゲームに参加はしたくなかった。

そんな事を考えた下郎を引きずり出して、ボコボコにしてやりたかった。

自ら行った復讐以上に酷い目に遭わせたかった。

しかし、

(…………それをするには、わたしもゲームに参加しなきゃいけない……………)

そして勝ち残るためには、参加者全員の…………虎杖や濁川千秋の大切な物も壊さなければいけない。

どんな理由を並べようと、その行為は絶対に悪だ。

そのくらい鋼凧も分かっている。勝ち残るためには途中で裏切るしかない。

だから決心する。自分が悪党になっても自らがしたい事をするために。

(…………わたしは勝者になって、皆の壊された大切な物を元に戻して、そして主催者をブツ飛ばすッ！)

「参加者《絶対規律》か……………」

「…………？」

一輝がおかしい。そう千秋は直感的に思った。

自分がした質問の答えとならない言葉を呟き、その顔は何か不気味な笑いで歪んでいる。

おそらく一輝は何かの答えに辿り着いた上で発言しているはずだ。

《絶対規律》。それが失った物を復元させるコードなのか？  
 しかしたとしたら、何故、このゲームに参加している？

このゲームはそもそも出来レースだったという事なのだろうか？  
 だとしたら何故《絶対規律》はこんな酔狂なゲームをするのだろうか？

出来レースならば賞品だって嘘ということになる。ただ大切な物の壊し合いの虚しいゲームになってしまう。

参加者全員への復讐のため？ それともコード使用者への復讐？  
どちらも千秋にはしつくりこなかった。一輝もきつとそうだろう。  
では《絶対規律》は主催者ではないということか？

何が何なのか千秋の頭が混乱し始めた時。

「あひや」

一輝が堪えきれなかったように笑い出した。

[illegible]

「輝……？」

思わず、千秋は一輝の名前を呼んでいた。

一輝がそこまで喜びを示すほどの、何かに自分は未だ辿り着けないでいる。

どこか自分が一輝に置いて行かれているような気がして、思わず名

前を呼んでしまった。

（いやだ……………）

千秋は心の中で否定する。拒絶する。嘆く。求める。

（一輝にまで置いて行かれるのは、いやだ……………ッ！！）

## サイド（後書き）

ちよつと色々間違えちゃった。まあいいか

## 序盤戦況

「……………」

目覚めたばかりの頭で携帯の時刻表示を確認する。

現在時刻、8：46。

いつもならとうに学校にいるべき時間だ。

しかし幸いな事に今日は土曜日。俺たちが通ってるあの学校は私立校じゃないため、入部もしていない俺がわざわざ土日に行く必要は無いのだ。

しかし珍しく体が怠い。頭がまだ全然働いていない気がする。

しばらく天井のシミを数えていると下から香ばしい……………いや確実に焦げている臭いが……………火事か？

いや、千秋だな。

起動しなかった脳の活動が急に活発化し、いそいで俺はキッチンへ向かう。

あのダメ人間、まさか料理を作らない俺に対して、料理で故意に火事を起こして殺すなんて暴挙に出たわけじゃないよな！？

頭の中でいくら否定しても、無意識での殺人という不気味な言葉が浮かんできて仕方ない。

「千秋、何をした！？」

キッチンに行くと、顔中に煤を付けたエプロン姿の千秋が居た。

「……………ごめんなさい」

千秋は自らの罪状を告げずに、俺に謝罪の言葉を言ってきた。

取り敢えず、キッチンに燃え盛る炎は確認できなかった。

火は出てない。しかし何かを焦がしたんだろう。まあ、不幸中の幸いかな。

「ハア……………取り敢えず、お前は顔洗って来い」

換気扇のスイッチを入れ、近くの窓を全開にしながら俺は千秋に言う。

前言撤回だ。何が幸いだ。大不幸じゃないか。

よりにもよって俺の秘蔵のDVDをグリルで焼きやがったよ畜生め。そりゃ焦げる臭いがしても火が出ないわけだ！　だって溶けてんだもん！

ホントこの屁、どうしてくれようか！！

「……だ、だって……一輝が悪いんじゃない！」

「アア！？」

このクソ野郎、俺に罪を転嫁しようとしやがって。

処刑だ、死刑だ、極刑だ！

「昨日ちいが覗いた時に、そんなものを見てる一輝が悪いんだよ！」

「お前に価値が分かる物じゃねえーんだよ！」

一体、俺の何が悪いんだ？

自分のパソコンでDVDを見て、何が悪いと言った！？

俺のどこに非がある！？　むしろ勝手に覗いたうえでグリルで焼いたこのバカ野郎に全ての非があるだろ！

ちなみに、俺が見ていたDVDの内容は……パンダが生みたての実の子供を殺したり、親の酷い虐待映像だったり、まあ大雑把にまとめてしまえば動物の子供が酷い仕打ちにあっている映像の類を見ていたわけだ。

「あんなものに価値が有るわけが無いじゃん！　あんなの見たって

」

「俺には価値が有るんだよ。お前なら分かるだろ？」

「分かるかあ！」

千秋が怒号を上げて俺の言葉を否定する。

酷いなー、この趣向を分かってくれと思ったのに。

いや、千秋のコードなら分かってしまう。

《異見互換》

相手の主観性や価値観などを解析理解する。また、相手の視界を共

有することが出来るルール。

それが千秋のコードだ。

つまり相手の考え方や判断基準を理解することが出来る。

それを使えば、俺の物の価値だつて理解できるのだ。

だがまあ、千秋はこのコードを大概、覗き見で使っている。

相手の視界を共有することが出来るルールを使い、俺を何処に居るかを確かめてパシリに使ったり、メールを見たかどうかを確認したうえで俺が無視したらしくくメールをしてきたり、何か俺をパシリに使いたい時に何をしているかを確かめたり。

まあ、最初に俺が鋼風と虎杖に接触する前にあいつらの居場所が分かったのも覗き見のお蔭なんだが。

大体は俺をパシリに使うために乱用されているコードだ。

本当、使いようによつてはコード使用者を探せたりするんだが……

使用者が残念なため残念な使い方しかされていない。

「ともかく、俺のDVD焼いた罰として昼食は抜き。決定」

「え、待つてよ！　ちい、そんな事されたら死んじゃう！」

「死ぬほど反省しろという意味だ、理解しろ」

「酷い！　最低、外道、鬼畜、下衆、悪魔あ！」

「そうだぞ、お前のお兄ちゃんは最低で外道で鬼畜で下衆で悪魔でサディストだ。よく覚えとけ」

「うにゃー！！！」

というわけで昼飯を作らなくてよかったので、しばらく俺はソファに座りながらB4ノートに色々と書き綴っていた。

「ちいはお昼御飯が食べたいです。お願いします、許してください」と言う言葉をまるまる無視しながら。

ノートに書いている事は、ゲームの事だ。

よく分からないあのメールから数日。鋼風と虎杖には無闇にコードを使うなどと言っている。

《完全干渉》 《干渉不可》 《禁思用語》 《結論反転》 《絶対規律》。  
この五つのコード使用者が動き出すまでこちらは動かない体勢だ。  
無闇に動き出さなければ、こちらのコードがバレないから。

幸い、俺の予想とは違い、この中に使用者を探し出すようなコードは無さそうなのだ。

コードは大体、名前の通りのルールしかない。

《無影無綜》にしても《非観理論》にしても《否定定義》にしても《異見互換》にしても。

名前通りのルールを有している。

だから五つのコードの名前を…… まあ全て漢字だからその一字一字の漢字の意味を徹底的に調べ上げた。

その結果、二つを除いた他の三つのコードは安全と判断。

残った二つ…… 《完全干渉》と《絶対規律》の動向を《非観理論》を使って虎杖に探らせ、その結果を元に五つのコードには使用者を探し出すコードが無いと判断した。

まあ更に、こっちには《非観理論》と《異見互換》の二つがある。

両方とも情報収集に向いているコードだ。

まあ《非観理論》には観測した事象には干渉できないという規制があるが《否定定義》もこちらにいる為、規制無しで情報も集め放題だ。

となると、やはり問題は……。

「…… 《非観理論》と《否定定義》か」

問題となるのはこの二人。今は味方であるこの二人。

まあでも、幸いなのはこのゲームが殺し合いではなく壊し合いというところか。

殺し合いのゲームならばこの二人を終盤まで脱落させてはならない。死んでは困るからだ。

だが壊し合いのゲームなら、敗退したとしても援助を受けれる。死なないから。

しかし普通に考えて、自分が勝ち残りたいから命以上に大切にしてい



る物を壊させてくださいと言われて『はい、どうぞ』と言う奴なんてこの世にはいない。

つてなると必然的にあの二人とはいずれ対決することになる。

それはできれば避けなければいけない事態だ。あの二人の援助を受けなくてもいいくらいに参加者が少ない終盤でなければ対立できない。

まあ、二人の合意の上で敗退させる手法はあるが………できればそれは緊急回避の手段として用いたい。

つまり俺がこのゲームの中盤まででやらなければいけない事は一つ。一つは、あの二人のどちらかを敗退させること。しかも自らの手を汚さずに。

もしも五人の使用者の誰かを利用して敗北させるとしても、こちらが疑われないようにごく自然に立ち振る舞わなければダメだ。なんとも難易度が高いゲームだこと。

## 意志

「あ、カス」

「……………チッ」

秘蔵DVDが焼かれた2日後。まあようは月曜日。

昼休み、昼食も食い終わったしちよつと食後の運動として廊下をぶらついていたら、鋼風とエンカウントしてしまった。

よりにもよってコイツかよ。まだ千秋の方が良かった。

「カス、今わたしの事を無視しようとしたよな。おい」

「クソ風、それは大きな勘違いだ。俺はお前を無視しようとしたんじゃない。お前みたいなゴミクズだと思ったんだ」

「カスの目は節穴ということがよく分かったわ」

「俺の目が節穴なんじゃない。お前のオーラがゴミと同じなだけなんだ」

「え？ 何？ 無情に残虐にブチ殺して欲しいって？ 運が良いわね。丁度護身用に改造スタンガンを持ち歩いていたのよ」

「何だよ？ 何ですか？ お前、俺に喧嘩で負けたのもう忘れちゃったんですか？ もう一度、誰が強いか躰け直して欲しいんですか？」

「上等だよ、コラ。お前ちよつと屋上来いや」

「オオケー、分かった分かったよ。歳上に対する礼儀と作法をもう一度教えてやる」

と言う風に喧嘩を売られ、言われるがままに屋上へ来たはいいとして。

鋼風が居ない。というか予め遅れて来るからと言われてある。

あの野郎……挑発もほどにしないとお兄さんブチ切れちゃうんだよ？

「お待たせ」

ただ変化が無い青空を平然と眺めていたら、鋼風が片手にビニール袋を引き下げて屋上にやっと来た。

まだ昼食を取っていなかった、というわけなのだろうか？

まあ俺のつつちゃどうでもいい事だ。

なんて思っていると鋼風が袋の中を漁りだし、そこから一つ、おにぎりを俺へ向けて出してきた。

「一ついります？」

「何を企んでるんだ、お前は？」

鋼風が俺に向けて何かを分け与えようとしただけでなく敬語で話し掛けて来るなんて。

絶対に何かを企んでいるに違いない。間違いない！

「今から真剣な話をしたいのに、罵倒の仕合になったら会話になりませんもん」

「……なら一つ、貰っておくかな」

差し出されたおにぎりを奪い取り、十秒以内に食べ終えた。

そのな様子を見る気も無い鋼風は、俺におにぎりを取られてすぐにまた袋を漁り、コロツケパンを取り出し、食べ始めた。

自分はパンで俺にはおにぎりか。まあどっちでも良かったんだが。

「それで、真剣な話ってのは？」

「……………ゲームについてですけど、わたしの為になぜと敗退してください」

「……その話、何で千秋や虎杖にする前に俺に言った？」

返事よりも何よりも、俺はそっちの方が気になったので鋼風に聞いてみる。

驚いたのか、少しばかり目を見開きながら鋼風はパンを口に運ぶ。

「よく分かりましたね。何ですか？」

「千秋はアホだから、何かあればすぐに俺に伝えてくる。だがお前の今の話は初耳だ」

ということは千秋には伝えてない事になる。

そこから先は予測だが、おそらく虎杖に先に伝えてるとしたら、鋼  
風の中の最低優先度にある俺に話すよりも前に千秋に話をするだ  
ろう。

しかし千秋に話をしていないという事は、もしかしたら虎杖にもし  
ていない可能性が割と高い。

まあ人つてのは無意識に番付通りに動こうとしたりするからな。

もしかしたら、と思って言ったら当たっていた。たったそれだけの  
話だ。

「なんやかんやで、わたし達のグループでのリーダー格って言った  
ら貴方じゃないですか」

「そうか？ リーダーがいるグループだったらもうちょっと統率性  
があると思うんだが」

「一番リーダーっぽい人って意味ですよ。濁川先輩が頼ってるから  
でしょうけど」

「違うな。きつと俺のカリスマ性が自然と溢れ出ている結果だろう」

「……ハア………そんなわけで、一番最初に話を付けるべきは貴  
方と思ったわけです」

「んじゃ、一番最初に聞かれた者らしく振る舞うけども。お前は勝  
者になって何をしたいわけ？」

俺が鋼風の瞳をしっかりと見て聞くと、鋼風は視線をずらすことなく  
答える。

「こんな最低なゲームを考えたクソ野郎をぶん殴ってブッ飛ばして  
やりたいと思ってます」

「その為に、お前は他の８人の参加者の命と同等に大切にしてる物  
をブチ壊すと？」

「壊した物は、勝者の権限で全部復元させます。これが悪い事だと  
いう事も自覚して、貴方に頼んでるわけです」

「……お前、大切な物を目の前で壊される痛みを知ってるか？」

「知ってますよ。わたし、実は家族を目の前で殺された経験がある  
んです」

「そうか……………なら、なおさらだ。お前は他の８人にもあの痛みを味あわせる事になるんだぞ？」

「……………分かってます。だからこそ、そんな痛みをこれからも多く生み出す可能性があるものを潰すんです」

「その大義名分のためなら、自分がいかに悪魔や下種や鬼と呼ばれても構わないと？」

「……………その覚悟くらいはあります」

最後の言葉を言い切るまでしっかりと俺の瞳を見続けた鋼皿。

ちよつと無駄話をするが、どこかの心理学の本に『異性に嘘を吐くときは、大概の人間が相手の目を見て話をします』なんて物が書いてあった。

まあそんな余計な知識で、バカが考えたバカなりの誠意を無為にするのは可哀想だろう。

だから俺はしっかりと返事を返してやる。

「断る」

「やっぱりですか……………」

予期していたのか、鋼皿のショックはあまり大きくなかった。

「まあそんな強い意志があるなら、誰かに頼み込んで負けて貰うんじゃないくて、無理にでも勝てよ。そうじゃなきゃ、敗者がやりきれないだろ」

「そうですか……………そうですね」

心のどこかでは諦めていたんだろう。どうせ交渉相手が俺だしな。

「でもまあ……………お前の意志は少しばかり貰っていくよ」

「……………えっ？」

「奇遇な事に、俺も目の前で一度ばかり大切な物がブチ壊れたことがあるんでな。こんなクソつまらないゲームを考えるクズ野郎をぶん殴ってブツ飛ばすっていう意志くらいは、共有してやるよ」

そう言いながら、俺は鋼皿に手を振りながら屋上を後にする。

## 意志（後書き）

ダラダラしてるよ、展開が。  
つまらん。ggggは好きではないぞ。俺。

## 覗き

今、俺は無謀な挑戦をしようとしている。

それは《無影無綜》を最大利用した作戦……その名も、NOZOK I。

まあ簡単に言えば、変態行為をするだけなんだけどな。

「で、なんで僕まで呼ばれたんですか？」

「当然、当作戦には《非観理論》の協力が必要だからだよ虎杖君」

「いやですよ僕は。鋼凧や千秋先輩とかに殺されるのは」

「鋼凧は大丈夫だ。アイツはコードを無効化できるがコードが使用されてるかどうかまでは分からない」

「でも千秋先輩が」

「そう問題は千秋なんだよ」

千秋のコードは《異見互換》。

視界を共有できる、という厄介なルールがある。

このコードによるバレを防ぐ手段は二つ。《否定定義》による無効化と本人がコードを使用していない時しか思いつかない。

《否定定義》……鋼凧梓美の協力を借りれない今、千秋がコードを使用しないように祈るばかりだ。

「一応、今朝のうちにコードを使用するなどは千秋に言っておいたが……アイツが俺の言いつけを守るとは思えない。この前だって、勝手に覗かれてDVDを一つ失ったからな」

「そもそも、千秋先輩のコードがあれば覗き放題なんですけどね」

「んなもんは分かってるさ。しかし俺たちでやるしかないだろ？」

「すいません一輝先輩。勝手に僕を人数に含めないでください」

「なんだよ虎杖、ノリが悪いな？ お前は女の半裸を見たいとは思わないのか？」

「いや、そんな事はないですけど」

「なら何故!？」

「……正直なことを言いますけど、着替える女子はそこまでエロくないですよ？ 冬場だと特に、体育の授業でもジャージ着たりしますからなおさら」

「……………」

「そんじゃ僕、帰っていいですか？」

「いや、ちよつと待て！ まだだ！」

「いやもう、さっき心の中で僕の言ったこと納得したでしょ？」

「ぐう……………」

「大体、コードの乱用するなって皆に言っておいて覗きのためにコード使ったことが知れたら。綱風に今まで以上に軽蔑されますよ」

「コードは私利私欲のために使うものだ」

「……一輝先輩って、そこまで変態でしたっけ？」

「んー……まあ、男はみな狼だからな」

「意味分かりませんよ」

仕方ない、それじゃネタバレするか。

「千秋には、そろそろ仕掛けるからコードを使うな、って言うておいたんだ」

「そろそろ仕掛けるって……ゲームの事ですか？」

「ああ。まあだから《非観理論》と《無影無綜》を無駄に使用して、相手方を誘き出させて貰う」

「だとしても、何故に覗きなんですか？」

「ド派手な事件を起こすよりかはマシだろ？」

「まあ、そうですね……覗きじゃなかった方がいいじゃないですか」

「《無影無綜》と《非観理論》の共通点は、相手に見えないってことだ。そこで問題。男が姿を消せる力を持ったとして大半のド変態は力をどうしようする？」

「覗きつてことですか……………でも僕、ド変態扱いされるのが非常にムカつくんですけど」

「まあド変態とかは置いといて、正直な所、相手に俺を《非観理論》の使用者だと思わせたいんだよ」



虎杖が怪訝そうな表情をしたので、追加で説明する。

「俺の《非観理論》の使用者だと勘違いしてくれば、そのコード使用者は無駄足しか踏めない」

「《無影無綜》で命より大切な物を隠されてしまってるから？」

「そういうことだ。俺を殺そうとしてもそう簡単には殺されないからな。時間が稼げる」

「でも《非観理論》なら、どんな奴からでも簡単に逃げ出せると思うんですけど」

確かに《非観理論》は、全ての者に観測されないというルールもある。

しかしだが《非観理論》を捕まえる方法などいくらでもある。

「お前はあくまで観測されないだけで、その場から消え去ったわけじゃない」

「そうですね、どちらにしろ認識されなきゃ捕まらないじゃないですか」

「それじゃ考えが甘いって言うてるんだよ。実際に証明してやる、ちよつと来い」

不服そうな顔をしながらも虎杖は俺の後に付いて来た。

計画通りッ！

「いやまさか、一輝先輩の口車に乗せられて加担するとは思いませんでした」

「口先の魔術師になれるとは思わないか？」

「同じイニシャルだからってあまり調子に乗らないでください」

虎杖は無表情ではあるが声に怒りが含まれる。

まあまあ、保健室だから良いじゃないか。

しかし、まさか今日という日に検診があるとは。なんたる偶然。ご都合主義。

「あ、入ってきましたよ」

おうおう良い眺めじゃ良い眺めじゃ……ん？

そろそろ保健室に入ってくる女子たちの中に、鋼凧と千秋を発見。あ、やばい実験中止だ。バレる可能性が高いとかそういうのじゃない。死ぬ。

しかし、俺は《無影無綜》で姿を消している。虎杖に脱出の合図を送りたくとも送れない。

さて……どうする？ 虎杖を置いて俺だけ脱出するか？

いや、そんな外道なことは………。

「……一輝？」

千秋に名前を呼ばれた瞬間、背筋がゾクツとなった。というか死亡フラグだ。回避不可能な死亡フラグだ。

「どうしたんですか濁川先輩？」

すぐさま鋼凧が千秋に問う。っていうか問うな！ やめろ、俺をそこまで殺したいか！？

「ん……何でも無い。気のせいだと思う」

まさかのフラグ回避！？ いや、千秋のバカさ加減に感謝する日が来るなんて。

「はい、それじゃあ上脱いでね」

保険女医がそんな指示を出す。俺は鼻を押さえる。

いや、ただ千秋の無駄に豊かに育った爆弾の対策だ。千秋ということとを忘れれば意識と血液を持ってかれちまう。

## 覗き（後書き）

タイトルからして、酷い。  
いや俺酷い。凄く酷い。発想が酷い。全て酷い。人格が酷い。

## 直前回避

引き続き、保健室にて。

出血はせず、どうにか二人とも生き残っている。

しかしそろそろ外に出なければ、鼻から出血されてしまう。

それにしても虎杖の奴、一切表情は変えずに鼻だけ押さえて……ムツリか。

「ムツリとかそういうのどうでもいいでしょ」

まあそうだけでも、こういう覗きをしているのに表情を変えないのは不気味だぞ？

「覗きをしたくてしてるわけじゃないんで」

だったら部屋を出てけよ。このムツリスケベ。

「一輝先輩、マジで一発殴らせてもらってもいいですか？」

……なんて、何故か俺は一言も発せずに、虎杖との会話が成立してしまった。

それ程に、覗きという文化は男子にとっては共通語なのかもしれない！

しかしそれにしたって、千秋のが目にはらついて仕方が無い。

意識はしないようにしているんだが………クソ、アイツいつからあんなに大きくなってたんだ？

「あ、次は千秋先輩の番ですね」

……ちよつとついて行くか。

「行くって……いきなりどうしたんですか？」

お前、少し女子の胸やら脚やらを見た瞬間は興奮したけど、もうそろそろ飽き始めただろ？

だから少し気晴らし程度に動こうじゃないか。

「……まあ、どんな理由であれ、ここから動けるのは幸いですね」というわけで千秋のあとをテクテクとついて行く男子二名。

よくよく思ったら、ひっそり隠れることなく見ているんだよな俺た

ち。

コードというのは全くもって便利なものだ。

「……一輝先輩、あれって」

そして千秋の後について行った結果、俺たちが目撃したのは……検診で来た医師が、男だということ。

……………。

このクツソ野郎がああああああああああッ！

俺たちのようにコードを使わずとも覗き放題だというのは……か！ ええ！？

こんな覗きの方法……おかしいだろうが……………ッ！

こんな方法……………卑怯だろうがぁ！

あの男医師、今すぐにブツ飛ばしてやる！！

「一輝先輩、落ち着いてくださーい」

冷やかな声で虎杖から抑止される。

お前は……許せるというのか！？ この男医師を！

俺たちのようにこそこそと覗き見るのではなく、堂々と女の半裸を見れるこの男を！

「いや僕たちも割と堂々と覗いてますよ？ 普通なら犯罪ものを堂々とやってのけてますよ？」

んな事はどうでもいいんだよ！ 感情論、気持ちの問題なんだよ！

「バカは黙って覗いておけばいいんですよ」

それでも俺はあの男医師が許せない……………ッ！！

しかし無駄に自分の姿を晒そうものならすぐに教育指導になつてしまふ現状なので、虎杖の言葉に従って俺は戻って女の半裸を舐め回すように観まくっていた。

しかし普通おかしいだろ。

こういう女子の検診の時は、大概女医がやるもんじゃないのか？

まあ俺は、女子じゃないから分からないが。普通に考えて男医師に診てもらうよりも女医に診てもらった方が同性として安全するんじゃないだろうか？

最近はやっとしたこととでセクハラになるような世の中だ。

こういうのも、ここにいる生徒の誰か一人が親に言つて、そして親が学校側に文句を言う可能性だってある。

だからこういうのは普通、俺の考えだと、女医がやるというのにあの男医師は！

野郎……思い出しただけでムカついてきた。やっぱ一発ぶん殴つてやろうか？

大体、今日の検診だつてなんでこんな冬場にやるのかって話だ。

そもそも何の検診なんだよ？ 千秋がどこか不健康だつていう話は聞いたことがないぞ。

いいや、そもそも最近は俺がアイツの生活を管理してやってるから不健康かどうかは医者よりも俺の方が分かると思う。

そして俺の見立てじゃ、千秋はどこも不健康じゃないと思う。

なのになんで検診？ 健康検査で一度引つ掛からないと検診にはならない。

確かに春頃に、少し体調を崩してて検診に引つ掛かったというのなら納得いくが。

何故、春に行われた検査の再診が、秋の暮れなんだ？

偶然？ ご都合主義？

それは本当に、俺に合した都合だったのか？ 俺に合した偶然だったのか？

いやそもそも誰かが何かに合わせたんじゃないのか？

例えば……そう。

鋼風梓美と濁川千秋の両名はコード使用者でとあるゲームの参加者だ。

そのゲームが開始されたのはつい最近。

ゲームでは使用者の命と同じくらいに大事な物を壊し合うというものだ。

だからこそ使用者の両名は常にその大事な物を持ち歩いているはずだ。

そこで例えばこんな検診中。教室にその大事な物を置いておけるだろうか？

学校の治安とかは関係無しに、誰かに盗まれる可能性がある。さらには盗まれたりした時についてっかりとした事で壊されてしまう可能性も無くも無い。

だから、検診中であれ大事な物は持ち歩く。まあそれが普通だ。

そして次に、男医師についてだ。

俺の常識から言って、こういう女子の検診は男医師ではなく女医がやるものだ。

なのに男医師というのは少し学校側にとってもリスクを生じる部分がある。

だがしかし、世の中には学校側にそのリスクを忘れさせる方法がある。

いいや、その方法を使えば無理にあるはずのない検診をでっち上げる事も可能だ。

その方法の名を……………俺たちはコードと呼ぶ。

「ッー!!」

「きゃっ!?!」

覗きによって心が通い合った虎杖が、千秋を無理矢理その場から突き飛ばす。

俺は姿を晒し、保健室のドアを《無影無綜》によって消し去る。

さあて、こっちが仕掛ける前に相手方が接触してきやがった。壊し合い開始だ。

## 直前回避（後書き）

……あるえ？

おかしいな、ついさっきまで覗きをしてたスケベな話だったのに。  
何があっただろう？



## 作戦会議

姿を晒すと言つても、そんないつまでも晒していたら「きゃー、覗き魔！」と善からぬ称号を貰つてしまう。

そんな称号は貰いたくないので、一瞬でドアに触れ、そして自分の姿と保健室のドアを消した。

そしてそのまま敵前逃亡！　だって、一瞬であれバレたら逃げるが覗き魔の常識だから！

「……あの力ス野郎！」

俺の姿を一瞬捉えてしまった鋼風は、追う様に保健室を出る。

虎杖も《非観理論》で隠れたまま、保健室を出る。

「待つて、梓美ちゃん！」

千秋は多分、冷静に状況を把握し、いきなり出て行つた鋼風を追う様に、自然と保健室を出る。

これで、全員逃亡は成功だ。

次に考えるべきは、相手のコード。

学校側の人間に無理に検診を設けさせ、さらには女医ではなく自分を推薦させるようなコード。

簡単にまとめれば相手の思考を捻じ曲げるコード。

九つのコードの内、そう言ったことができるものは《完全干渉》《絶対規律》《結論反転》の三つ。

……と言つても俺が勝手に予測したルールでの判断だが。

まあ後で虎杖に《非観理論》を使って調べさせればいいことだ。ということとは、四人で一度合流しなければいけないか。

保健室から一定距離以上を離れたので、立ち止まり、姿を現す。ポケットから携帯を取り出した直後、誰からか着信する。

と言つても誰だかは分かっている。千秋からの電話だ。

「千秋、無事か？」

「一輝こそ、敵に捕まつてない？」

「敵に捕まる前に、教師や鋼凧に捕まりそうだ」

『これにこりたらコードを乱用して覗きなんてしないこと。分かった？』

「お前に、お前のコードだけでは言われたくない」

『まあ、確かにね』

「特別教室棟の2階と3階の間にある踊り場。他の二人にメールで伝えておいてくれ」

『分かった』

千秋がそう言うと同時に電話を切る。

まだ一番最後に出たはずの千秋が捕まっていなかったとなると、まだ相手は動き出していないのか。

一応、医師と来たから仕事は最後まで責任もってやるつもりとかか？  
つまりそれは最後まで他の女子の半裸を見続けるってことかこん畜生絶対にごん殴ってやる。

息継ぎせずに男医師（仮名）への怨念を再確認しながら、俺は自らが指定した集合場所へ向かう。

「覗き魔」

鋼凧は集合場所についた瞬間に、それより前に来ていた虎杖と俺に向かつてそう言った。

「いや僕は一輝先輩に無理矢理連れて行かれただけで」

「そうだぞ。虎杖は女子の半裸を見たって表情一つ変えないムツツリスケベなんだ、責めるなよ」

「一輝先輩一発ごん殴ってもよろしいでしょうか？」

鋼凧がジト目で虎杖を見るからって、俺に八つ当たりすんなよ。

「変態、最低」

鋼凧は最後にそう言い、それ以降口を閉じてひたすら男二人を睨み続けていた。

「ちい……私が最後かな？」

「ああ。そうだ」

千秋の到着と同時に、作戦会議に移る。

「虎杖、鋼風は《非観理論》であの医師が誰だか調べてくれ」

「分かりました」

鋼風は返事をせず、虎杖だけが返してくる。まあ実質、調べるのは虎杖だけだからな。

「千秋はコードを使うな」

「何で？」

「俺の予測だと敵は《完全干涉》《結論反転》《絶対規律》の三つのうちのどれかだ。《完全干涉》だった場合、逆算されてお前のコードがバレるかもしれない」

「分かったけど……私に何かできることがある？」

「《完全干涉》じゃなきゃ、有るんだが」

「残念ながらその《完全干涉》がああ男医師のコードみたいですよ」  
調べ終わった虎杖が、そう答える。

《否定定義》によって《非観理論》の規制が解けたからなんだが……この連携は痛手になるかもな。

「なら今回は《無影無綜》《非観理論》《否定定義》の三人でいく。千秋は……まあ、お留守番でもしてろ」

「一輝、言い方が酷い……」

まあでも仕方が無いだろ。今回のスタメンではないんだから。さて、スタメンのスタメンによるスタメンのための戦略を立てようではないか。

「鋼風、《完全干涉》のルールについて教えてくれ」

《否定定義》と《非観理論》は過去に《完全干涉》と対峙したことがある。

……と言っても、あの男医師と対峙したわけではないんだが。取り敢えず、誰が使おうとも《完全干涉》は変わらない。

「……自分を中心とした半径20メートルの範囲を5分間、干涉できるってルールよ」

「他に特典は？ 《非観理論》みたいな規制とかそんな感じの」

「特には。ただ《非観理論》の他者から観測されないってルールが通じるから……多分、カスの《無影無綜》によって消し隠れるルールも通じると思う」

「そうか、それは朗報だな」

「でもわたしと虎杖君の二人だけで十分よ。一度《完全干渉》を潰したことがあるから」

「いやでも」

「確かに、虎杖君は覗きをした。でも本人の主張だとカスに嵌められたからだと言ってるの。それに間違いはない？」

「ええ、まあ」

「そう。じゃあ覗きの主犯格であるカス野郎はここで地に這いつくばるように土下座しながら反省してなさい。濁川先輩、監視お願いします」

「うん、任せておいて」

「それじゃ、行ってきます」

「行ってきます」

「行つてらっしゃーい」

……………えっ？

え、何？ 何が今この場で起こったの？

もしかして俺、鋼凧に言いくるめられて、置いて行かれた！？

「一輝」

俺の肩に手を置いた千秋は一言。

「土下座」

つまり本当に俺は鋼凧のようなバカに言いくるめられて、義妹の前で土下座をしなければならぬピンチに陥ったということか。

いやまあ、悪いのは全部俺だから仕方が無い様な気もするんだけどね。

## 作戦会議（後書き）

まあ、覗きは犯罪ですもんね。

コードとかいう異能とか関係無しに土下座するべきですよね。  
主人公とか関係無しに。

## 説明不足

《完全干渉》……………はるなが ひさめ春永氷雨は、未だ保健室にて検診を続けていた。

本来なら、《異見互換》もしくは《否定定義》を捕え、命と同等に大切にしている物を破壊しているはずだった。

しかしそれよりか前に、《無影無綜》と《非観理論》が動き出してしまったため計画は中断。

彼らが保健室を出た時、無理に追いかけることはできかた、それをすれば氷雨の大切な誇りを穢してしまうため、仕方なく検診を続けていた。

保健室にいた女子生徒も女医も《完全干渉》によって記憶を改竄され、四人……正確には、姿を現した三人が保健室に居たことを忘れてしまっている。

無駄に騒がれても困るのは氷雨自身だからだ。

四人に脱出されてしまった今、氷雨の最速で最適な行動は、検診を終えて四人を追うこと、である。

機械的に女子生徒を診ながら、少しばかり氷雨は後悔していた。

検診に來た医師、という設定でなければ氷雨はすぐに彼らを追うことができた。

しかし医師という設定が、今氷雨をこうして保健室に縛り付けている。

最後の女子生徒を診終わると同時に、氷雨は《完全干渉》によってまた記憶を改竄し、すぐさまに保健室を出る。

《完全干渉》のデフォルトでの干渉範囲は20メートル。

おそらく彼ら四人全員がそれよりも離れた場所に移動したはずだ。

しかも《完全干渉》のデフォルトでの干渉時間は5分。

氷雨のコードは最大5分しか使えず、しかもコードの使用を止めたからといってまた5分使えるわけではない。

氷雨本人にもいつコードの制限がリセットされるのかはイマイチ分からないが、夜寝て朝起きたらリセットされていた。

睡眠を取ればリセットされるのか、それとも24時間でリセットされるのか。

それは分らないが、取り敢えず今は関係の無い話だ。

ともかく《完全干渉》を無闇に多大に使用することはできない。

記憶の改竄も一瞬でやってのけたことだ。もう二度と使いたくはない。

……いや、無闇に多大に使用する必要は無さそうだ。

二人が……《非観理論》と《否定定義》の二人がわざわざ自分の元に來たのだから。

~~~~~時間は少し前に遡り~~~~~

「あれ？ 一輝、土下座しないの？」

「するか、するわけないだろ」

踊り場に残された俺と千秋。まあくだらない雑談をするしかないわけですよ。

「っていうか一輝、どこ行こうとしてるの？」

「戦の地だよ」

「二人の後を追うってこと？ 確かにちよつと心配だけど」

「心配の域を超している。危険だ」

俺は断言する。断言するに足りる根拠もある。

「《完全干渉》は俺たち四人のコードをもつすでに知ってるはずだ」

「……知っでいるからこそ、ちいと梓美ちゃんを狙ったの？」

「鋼凧はコードが発動されることに気付かなければ《否定定義》を使わない。千秋の《異見互換》は攻撃性が一切ないコードだ。《無影無綜》で隠れられたり《非観理論》で予知されて逃げられるよ
りか、全然捕え易い」

もしも俺と千秋、鋼凧と虎杖のコードが逆だったら、女子ではなく男子の検診になってただろう。

あくまで俺の予測ではあるが。

「でも、今は梓美ちゃんだって警戒してるわけだから《否定定義》も使える。さつきよりか安全だと思うよ」

「どうだか」

千秋の言った言葉は半分正しい。でも半分は間違ってる。

「さつきまでは気付かれずにコードを発動して二人を捕えなきゃいけないかったが、今は違う。ド派手にコードを使ってくる。《完全干涉》は時間制限のあるコードだ、ド派手にコードを使った方がやり易いに決まってる」

「でも二人は、一度《完全干涉》を倒したことがあるんだよ？」

「それが油断に繋がる」

というか、多分もう鋼凧と虎杖は油断している。

さっきの《完全干涉》の説明の時に、言い忘れた事が多分あるからだ。

「《完全干涉》は自分を中心とした半径20メートルの範囲を5分間、干涉できるってルール。それは分かった。けどその干涉範囲は常にそうなのか？ 干涉時間は常に5分なのか？」

「……あ」

そんな事は鋼凧は言っていなかった。俺にそんなことは説明しなかった。

まあ、元々俺を戦いに参加させる気が無かったからかもしれないが。

「多分、鋼凧はそれぞれ最大範囲、最少時間で答えたんだと思うが

……そこら辺が油断の元だ」

「なんで？」

「その情報は《非観理論》で調べた信憑性が高い情報ではない可能性がある」

「……？ どうしてそう思うの？」

首を傾げながら千秋が問ってくる。

「俺が鋼風に《完全干涉》のルールについて聞いた時、鋼風は一切虎杖に確認を得なかった」

「それは、梓美ちゃんが《完全干涉》のことを虎杖君より知ってるからじゃ？」

「虎杖より詳しいわけないだろ。《非観理論》は全ての事象を観測できる、言ってしまうえば辞書のようなものなんだから」

辞書よりも、ネットよりも、パソコンよりも、人間の脳が記憶という概念で勝るわけがない。

「鋼風は虎杖に一度も確認を得なかった。そして虎杖は一度も説明の時に口を挟まなかった。だからもしかしたら……《非観理論》で《完全干涉》のルールを調べてないかもしれない」

「それって……考え方によってはピンチじゃ」

「ピンチかもじゃなくて、ピンチなんだよ」

鋼風は最大干涉範囲が20メートルだと思っている。

しかし、もしかしたら、場合によっては、その情報は偽である可能性がある。

いや、偽であろうが真であろうが、このままだと鋼風たちは負ける。

「千秋、あの二人は今どこにいる？」

「……保健室近くの廊下……もう《完全干涉》と対峙しちゃってる」

もう対峙しちゃってる、か。

……チャンス、良い機会かもしれない。

《非観理論》も《否定定義》もいずれ敵に回ってしまうコードだ。

もしここで《完全干涉》によって大切な物を壊され、敗退してしまったとしても、殺されない限りは二人の協力を後々も得られる。

つまりここは、序盤戦の山場かもしれない。案外早いものだ。

この戦いで、最低限二人のコード使用者が敗退する。

未確定のこの結果を確定させるには、俺の援助は少し遅らせなければいけないかもしれない。

考えがまとまると共に、俺の進路を邪魔するものを《無影無綜》で

消し去り始める。

説明不足（後書き）

最低ですよねこの主人公。ホントマジ最低。
クソってくらい最低、外道、下種のカス主人公ですよね。

対戦

「虎杖君、事前に確認しておくけど……《完全干涉》の大事な物つて何？」

「……………免許証、紙の医師免許証だ」

「何でそんな物が？」

「大切な物なんて人それぞれだろ」

そんな話をしているうちに、僕と鋼風は《完全干涉》の前に着く。

「……………そっちから来るとは、楽で助かる」

そう言々と共に、男医師は片腕を振るう。

それに伴って、無数の氷の針（？）のようなものが現れ、こちらに向かつて猛スピードで……………ってヤバッ！

鋼風も僕も、頭を抱えながらしゃがみ込み、どうにか氷の針をかわす。

「鋼風！ 何でコードを使わなかったのさ！？」

「何を否定したらいいか分かんなかったのよ！」

そうだった、鋼風はそこまで頭の回転が速いわけじゃないんだった。それに僕も何を否定したらいいか分からない程、テンパっていた。奇襲なんてされるとは思ってたから。

これは自分の考えの甘さのせいだな。

「虎杖君、わたしがアイツに突っ込むからサポートよろしく」

「……………鋼風、分かっているとは思うけどこの前の《完全干涉》とは違ってた」

「分かっている。殺す部分を身包み引っぺがして免許証を取るっていう風に変えればいいんでしょ？」

ダメだ、鋼風は力押しでこの勝負を終わらせる気だ。違いを少ししか分かってない。

しゃがんでいた姿勢からクラウチングスタートのように突撃する鋼風。

干渉範囲である20メートル圏内に入って2秒後。

「1秒後、両側から氷の壁で押し潰される」

「否定」

鋼風の声と共に、微かに集まり始めていた水蒸気が元の場所へ霧散する。

「1秒後、左膝を狙って氷柱が地面から突起する」

「否定」

直後、床に凍りそこねた水蒸気が水分となって水溜りをつくりだす。

「2秒後、右肩、左胸、腹部、左脛、右踝を狙っての氷柱と天井が崩落」

「全否定」

水蒸気は元の居場所へ戻り、崩れかけた天井は普段通りのヒビが入っていない状態へ戻った。

これが鋼風と僕の作戦。

《否定定義》はコードなどを無効化するという強力なものだが、鋼風自体は、駆け引きや相手の行動を読むことを苦手としている。

得意なものは《否定定義》を使った力押し。ゴリ押し。猪突猛進。

だがまあ、そんなことをすれば半径20メートル以内を自由に干渉できる《完全干渉》にあっさりとやられてしまう。

それを避けるため僕は《非観理論》を使って、《完全干渉》が鋼風に仕掛ける攻撃を全て先読みし彼女にそれを口頭で伝える。

その攻撃を鋼風はただ否定するだけ。それだけでコードを使った攻撃全てが無効化される。

ある意味凄く恐ろしい。相手の策略や思惑を全て跳ね飛ばし、相手の元へ辿り着いて止めを刺せるのだから。

この鋼風の猛進を止める術はただ一つ。僕を口を塞ぐ……ようは僕を潰してしまえばいいのだ。

しかしそれも叶わない。

何故なら《非観理論》には他者から観測されないというルールがあるのだから。

観測できなければ、干渉できない。つまり《完全干渉》は僕個人に攻撃をするどころか、僕がどこに居るかも分からない。

僕が干渉範囲である20メートルに入っても気付かれることは無い。だから鋼風への僕の予知が途切れることはない。

この作戦、僕もちよつと走らなきゃいけないくて疲れるけど、確実に《完全干渉》を倒せる。

鋼風の猛進を止める術はもうどこにもない。

氷雨はなおも鋼風へ攻撃を仕掛けながら、冷静に状況を分析していた。

こちらの攻撃はどんな死角や大量に同時に仕掛けても全て無効化されてしまう。

先程から氷雨には鋼風の「否定」という言葉しか聞こえないが、それは多分、観測されないルールを使用されているからだ。

つまり正確に言えば、こちらのどんな攻撃も全て予知され、全て無効化されているというわけだ。

まったく小賢しい……。

氷雨は苛立ちと忌々しさを感じて少し嘆息を吐く。

鋼風の聴覚に干渉し、虎杖の声を聞けなくしてしまおうか。

……ダメだ。聞こえなくなった瞬間にすぐさま無効化されてしまう。鋼風の周りの音に干渉することも無駄な足掻きだ。

虎杖本人に攻撃を仕掛ける事すらできれば、鋼風を打ち取ることなど容易いのだが……。

本人を観測できなければ、干渉する事も叶わない。

……いや、一つだけ虎杖に干渉する方法がある。

虎杖個人を干渉することが不可能ならば、全てを同時に干渉すればいいだけだ。

「……………」

鋼凧に対する攻撃が途絶えた。

諦めた……いや、そんな簡単に諦めるわけがない。

……もしかして逃走経路を確保しようとしてるのか？

そう思い、僕はすぐさま《非観理論》を使って相手の行動を未来予知をする。

それを行った事は間違いでは無かった。でもタイミング的には遅かった。

「虎杖君……………」

指示が途絶えたことによって、鋼凧がこちらを向いて僕の姿を確認しようとする。

それと同時に、《完全干涉》が片足で思いっきり床を踏む。

「鋼凧！ アイツ、干涉範囲全体に氷柱で攻撃してくる！」

対戦（後書き）

氷雨の考えを補足すると「取り敢えず全部攻撃すれば、当たるだろうってことです。」

言い換えるなら、下手な鉄砲数撃ちや当たる。

周りに迷惑が掛かりますので、皆さんは真似しない様にしてください。

敗退

「ッ否定！」

僕の声と《完全干涉》の全域攻撃はほぼ同時だった。

それでも僕たちに攻撃が届くよりも鋼皿のほぼ反射的に発動した《否定定義》が無効化するのが早かった。

力押しの人達だけはある。僕なら絶対反応できなかった。

しかし油断するのはまだ早かった。

「がら空きだぞ、《非観理論》」

《完全干涉》のその一言で、僕は自分の過ちに気付く。

僕は元々がら空きだ。何故ならそれは他者から観測されないルールを発動しているから。

それゆえに干涉もされない。だからその言葉は僕ががら空きだという事を示しているのではない。

示しているのは、僕の 指示が、がら空きだという事だ。

「ッッッアあああああああつ！！！！」

なんと云えばいいのだろうか？ 上手い表現が思いつかない。

氷の牙のようなもので両足の肉を噛み潰された鋼皿は悲鳴を上げながらその場で倒れ、仰向けになって足を押さえる。

直後、干涉によって無理矢理作られた氷柱が鋼皿の両太ももを貫く。

「あッッッッ！！」

悲鳴にならない、まさしく絶叫を上げる鋼皿。

もう《否定定義》も機能していない。それは多分、彼女の脳が激痛の処理で埋め尽くされてしまったからだろう。

確信はある。

僕が誤って《非観理論》を使って鋼皿の未来を予知してしまったから。

もしも《否定定義》が機能していれば、まだ僕は《完全干涉》を止める事が出来た。

でも出来ない。機能していない。故に僕は、言動も行動も禁止された……ただの傍観者となることしかできない。

今考えれば、全て僕の油断が悪い。

僕が全域攻撃を予知することも、それを鋼凧によって無効化されることも《完全干渉》には分かっていたはずだ。

《完全干渉》が狙ったのは、僕の油断。そして鋼凧梓美。

始めから僕に攻撃を加える気なんて無くて、僕の指示が途絶えることを狙っていたんだ。

「さあて」

《完全干渉》……春永氷雨が、空間に干渉し、一瞬で鋼凧の前に移動する。

脚の傷口を踏みながら、氷雨は言葉を続ける。

「まずは《否定定義》が大切に行っている物から丁寧にぶっ壊させてもらいますか。ああー、安心しろ。疵の痛みでろくに喋れないお前に問い質したりはしない。お前の脳味噌に聞くとするよ」

言葉の終わりと共に、氷雨は鋼凧の頭蓋を鷲掴みにして《完全干渉》を発動。

脳細胞の記憶領域に干渉し、彼女の記憶の中から大切な思い出を調べ漁っていく。

その思い出の中で一番印象に残っている物が今何処にあるかを脳内検索する。

そういつた風漬しの方法を5秒続けたところで、氷雨は呟く。

「制服の、ポケットの中ねえ……………」

鋼凧の体に手を伸ばし、制服のポケットの中を漁る。

そうして出てきたのは、四葉のクローバーのヘアピン。それが鋼凧が自分の命と同等なくらい大切にしている物。

「死んだ家族との思い出の品か。命と同じくらい大切な思い出の塊……壊したくは無からねえ」

氷雨はそう言うが、本心から出た言葉ではない。だからといって全てが嘘のわけではない。

少し……心の片隅程度にはそのように思っている。だがあくまで心の片隅。

どうでもいいようなことなのだ、氷雨にとっては。

《非観理論》を使えば全てが観測できる。

激痛で言葉を出せない鋼皿が、今どう思っているか。

掌で取ったヘヤピンを弄りながら、氷雨が何を思っているか。

これから起こる、鋼皿のヘヤピンの運命。

全てが分かる。全てを観測できる。だが今はこんな異能は必要ない。言動、行動によって事象に干渉できないこんな異能は今はいらない。持つて必要ない。

今こうして痛みに苦しんでる鋼皿を、大切な思い出を壊されようとしている鋼皿を救えもしないこんな異能はいらない。

なのに、僕の願いは神様どころか悪魔さえも無視をする。

「ま、大切な物が壊される瞬間だ。よく見ておけよ、お嬢ちゃん」
そう言つて氷雨は、鋼皿の目の前でヘヤピンを真つ二つに折ろうとする。

せめてもの、最後の抵抗として鋼皿はその光景から目を逸らす。正確には目を瞑る。

いかにも鋼皿らしい行動だ。

だけどそんな行動も無意味に変わる。

「そうか、見るのは嫌か……じゃあ」

鋼皿の顔の近く……耳の近くにしゃがみ込んだ氷雨は言葉を続ける。

「よく耳に焼き付けて……そうだな、音だけでその光景をイメージできるよに壊してやるよ」

どうやってそんな事をするのか。

簡単な方法だ。脳細胞の一部を組み換え、その音とイメージした光景を死ぬまで焼き付けるように記憶させるだけである。

《完全干渉》からしたら、そんな事するのは造作もないことだ。

「それじゃ、これでお前はゲーム最初の敗北者だ」

「やああああああああああああつ……」

その言葉に伴い、ヘアピンを綺麗に真つ二つに折る。

ただ折っただけではない。鋼凧の本当に最後の足掻きである絶叫を含めた余計な雑音をキャンセリングして、その音だけを聴覚に聞きとらせた。

そうして最新のヘッドホンよりもクリアな音を聞いた鋼凧は何を想像したのか。

それは何かの画像に映された、幼い時に両親と過ごした記憶が、画面ごと真つ二つに割れ、崩れ去るといったものだった。

敗退（後書き）

何か鬱っぽいような感じだった気がしなくもないんだけど。
いやまあ、全然こんなの鬱じゃないよね。そうだよね。
こんなので鬱っぽいなんて言ったら、誰かに怒られちゃうよね。

撤退

《完全干渉》により《否定定義》が敗退。彼女がこのゲーム初の敗者になった。

……………想定通り、計画通り、全て俺の思惑通りに動いている。

これによって高リスクだった《否定定義》と《非観理論》の片方は敗退。それも敵によって。

それはつまりこれから鋼風が得られるということ。

例えば俺が鋼風からしてみれば外道なことをやっただとしても、アイツが俺を敗退させることはゲーム上叶わなくなった。

このまま虎杖も敗退させたいが、まあ、限度つてものは大事だよな。ボーナスを狙うんだとしても優先順位は《完全干渉》だ。

アイツは虎杖を敗退させた後、俺たちも狙いにくるはずだ。それはとてもリスクが高い。

俺がこのゲームで残るためには優先的に潰さなきゃいけない相手だ。さて、息巻いて勝手に戦いに行った二人組を救ってあげましょうか。まずは散々悲鳴を上げたり、絶叫したりして泣き疲れて死んだ目をしている鋼風から。

「ッ！」

俺が指を弾くと、天井が消え、《完全干渉》の上に大量に色々な物が降ってくる。

まあ、《完全干渉》はさぞ驚くだろう。

自分を中心とした半径20メートルが干渉範囲ということは、つまりは天井のさらに上、次の階の床まで干渉できる。

それなのに、今の今まで無かったはずの物が大量に自分の元に落ちて来るんだから。

つまりそれは今まで処理してこなかったもの。

ほんの一瞬だけ、《完全干渉》は処理負荷によって反応が遅れるはずだ。

まあ処理負荷が掛からなくても、奇襲に対しては人間誰しも驚き反応が遅れてしまうものだ。

その一瞬の隙を狙って俺は姿を現し、鋼凧に触れる。

今までに一度でも鋼凧の体に触れた事があれば（救う気はないけど）一応救えたのだが、残念ながらこれが初タッチである。

これによって、鋼凧は《無影無綜》によって隠せる物の対象となった。

《無影無綜》によって姿を消し隠されたものには干渉できない。それも証明済みだ。

鋼凧と共にコードと共に姿を消し、俺はその場から逃げ出す。

順当な判断だ。鋼凧を今この場で回収するのはリスクが高いし、わざわざ鋼凧たちが《完全干渉》の相手をしているうちに罠を仕掛けただ。

そこまで誘導してやらないと、敗退した鋼凧も密かに努力した俺も報われない。

取り敢えず、一度虎杖と合流しておきたい。

まあ千秋に先程、俺のメールを転送してもらったから……まあ虎杖の精神が少しでも正気を保っていたら指定した場所に来るはずだ。取り敢えずそこまでダッシュだ。ダッシュ、ダッシュ、ダッシュ！

「よう虎杖。気分はどうだ？」

「……あまり良くないです」

俺が集合場所、特別教室棟3階の一室に来た時にはもうすでに虎杖が居た。

「鋼凧は？」

「さっきの場所だ。俺のコードで隠してあるから《完全干渉》に何かされる恐れもない」

「……………何か策はあるんですか？ 僕の予知は使えないし」

「使っ必要なんかない。これ以上長引かせるつもりもない。一瞬だ。

「瞬で《完全干渉》を片付ける」

「片付けるって……こっちはもう二人とも隠れる事しか出来ないんですよ」

「充分なんだよ。《完全干渉》ごとき、それだけで充分だ」

ごとき、は少し言い過ぎだが。

《非観理論》と《無影無綜》とさっきの奇襲と相手が人間であるっていう四つの条件が揃えば《完全干渉》は俺の策で討ち取れる。

「一応聞いておくが、お前は《完全干渉》の大切にしている物を知ってるよな？」

「ええ」

「その材質は何だ？ 金属類か？ プラスチックか？ 紙か？」

「紙ですよ」

「なら……これだ」

俺は虎杖に、ハサミとカッターを渡す。

「これでジョッキとやれ。そうすればあっちの負け、《完全干渉》は俺たちに手出しする事が叶わない」

「……これ、どこから？」

「盗むのは得意なコードなんだ」

特に深い説明をせずに、曖昧な回答で返す。

「これを持って、お前は待機場所へ行け」

「一輝先輩は？」

「俺はここで《完全干渉》を待ち受ける」

「……………分かりました」

「おいおい、反応悪いな。『そんなの危険過ぎます！』ぐらいは言ってくれてもいいんだぜ？」

「策の内なんですよ？ なら文句は言いません」

「あら、随分大人しい。鋼風に見習わせたいくらいだわ」

苦笑いをしながら、虎杖は部屋を出る。

……まあ、ちよつと鋼風のことでジョックを受けてるんだろつ。

《非観理論》は攻撃的なコードじゃない。助けたくても助けられない

くて、当然なのだ。

だからあまり気にしないほうが良いんだが……まあ俺の策の問題にならないから放置だ。

しかしまあ、少しばかり苛立つな。《完全干渉》の奴。

鋼皿にコードを使わせないために痛みを与えたのは分かるが、あそこまで恐怖を植え付けるようなことをしなくたっていいだろうが。

………ム力つく。ああいう壊し方が一番ム力つく。

思い出して、喉元噛み千切ってぶち殺したくなっちまう。

まあそんな苛立ちは、奴の驚く顔を見て、晴らすとしよう。

「ようこそ、《完全干渉》のコード使用者」

教室に入ってくる男医師の姿を見ながら、俺はそんな事を言ってみた。

撤退（後書き）

さあ、次で《完全干渉》戦は終了。
つまり序盤戦が終わるわけですよ、早いですねえ。
全然書いたような気がしないですよ。月日的に。

二人目の敗北者

「ようこそ、《完全干渉》のコード使用者」

部屋に入ってきた男医師の姿を見て、俺はそう言う。

「あれ？ 《完全干渉》を使って俺に傷を負わせたりはしないのか？」

「逃げる相手に対してはそうするが、お前は逃げないんだろ？」

「何でそう思う？」

「お前のコードを使えばそのまま味方全員姿を暗ますことも出来たが、こうして隠れもせず目の前に《無影無綜》のコード使用者がいる。誘ってると思えないだろ」

「お前を罠に嵌めたいからな。ってか本当に《完全干渉》を使わなくていいのか？ 鋼風たちとの戦いで幾分か時間を消費しただろうけど、まだ4分以上は残ってるだろ？」

「残念ながら4分以下だ」

「それでも、それだけの時間があれば俺の蹴って、大切な物を壊して、二人目の敗北者になることなんて造作もないだろ？」

「お前がその大切な物をコードで隠してなきゃな」

「痛みを与え続けたり、脳に干渉すれば、自然と誰でもコードを解くだろ」

「簡単に言ってくれる。痛みを与えることは楽勝だが、脳に干渉してコードを解くなんてのは時間が掛かんだよ」

「……………つまり、今こうして俺と会話しているのはその時間を稼ぐためか。」

「なら、暇潰しはここまでだ。こっちも策を出すとするか。」

「…………俺が、この部屋にお前を招いた理由は言うまでもなく罠を仕掛けたからだ」

「そうだろうな。しかし何時まで経ってもその罠とやらは発動しないんだが？」

「まあ、それはお前の隙を突かなきゃ意味が無いからな。お前が上に警戒しなくなるのを待ってたんだ」

「まさか、さっきと同じ策が通じるとでも思ってたのか？」

「だって苦労したんだぜ。お前が鋼皿たちと遊んでる間、俺はせつせと重たい荷物をこの上に運んで……その苦労を無駄にしたくないと思ってるんだろ？」

俺が千秋と別れた後、どれだけ大変だったと思ってるんだ。

《完全干渉》を打ち取る策を準備するのに手間取り、そして鋼皿たちがピンチになった時のためようの策を準備して。

上から色々な物を落とすという事は、それらの物を全てそこまで運ばなきゃいけないわけで。

それがどれだけ重労働だか分かるか。ゴミ屋敷を独りで掃除しきる時よりも疲れたわ。

しかもそれだけ手間をかけた策が、通じないとなれば誰だってブチ切れるに決まってる。

「余談だが《完全干渉》、この階の上は屋上だ。つまりどれだけ大量の物を置こうとも、どれだけ物を置こうともいい空間。さっきの5倍近くの物が降ってくるぞ」

そう言ってる俺は指を弾く。

パチンツという音と共に、部屋の天井が消え、大量の物が降ってくる。

当然上に警戒している《完全干渉》は、部屋の床も同時に消えたことに対して動揺をしてみよう。

重力に従い下へ下へと落ちていく俺と《完全干渉》と大量の物。

そのまま2階、1階へと落ちていく。というか残念ながらウチの学校は地下などないので、1階が終点。

受け身代わりに姿を消し、落ちた衝撃を無にする。

《完全干渉》は空気に干渉し、衝撃を全て逃がす。

だが逃がしたとしても上から落ちてくる大量の物を処理しなければならぬ。

途中、3階、2階にあった物も加わったので実際に俺が仕掛けた量の倍近くになっている。

それでも《完全干渉》にとってはそれらを蹴散らすことは造作も無い事なのだろう。

だから加えてやる。この1階に仕掛けた大量の物を出現させて、処理負荷を一瞬だけ起こす。

「ッ!？」

そしてその一瞬のうちに俺がやることは二つ。

一つは俺が奴の衣服に触れて、身包みを剥ぐ……とも言い、消し去る事。

もう一つは、上から降ってくる物全てを消し去る事。

身包みを剥いだ理由は簡単。奴が持つてゐる免許証を奪い易くするため。

降ってくる物を消した理由は二つ。

一つはまた処理負荷を起こすため。干渉中の物を消す事で、強制的に干渉取り消しの処理を大量に行わせる。

そしてその一瞬の隙について、他者から観測されない虎杖が安全に《完全干渉》の免許証を切るため。

《非観理論》は他者には観測されないが、決して姿を消したわけではない。

誰にも見られないだけ。だからタンスの角に小指だってぶつけるし、上から降ってくる物だって躲さなきゃいけない。

でも躲してたら《完全干渉》が次の手を打ってきてしまう。

だから虎杖の道を邪魔する物を全て消し去った。

あとは一瞬。

誰も気付かぬ間に、免許証はまるでハサミで切ったかのように真っ二つになって。

《完全干渉》の敗北が決まる。

皆さん、後片付けという言葉を知っているだろうか？

子供の頃にこう言われた事がある人もいるかもしれない。『おもちゃで遊んだ後はちゃんと片付けなさいよ』と。

そうつまり今俺はその後片付けをしているわけだ。独りで、黙々と大量に仕掛けたわけだから、その片付ける数も大量である。泣きたいね。マジで。

千秋も虎杖も、鋼凧のケアに行っちゃっている。

《完全干涉》の男医師は、何か喪失感で一杯のような雰囲気のまま、いつの間にか帰っちゃってしまっていた。

誰も手伝ってくれない。俺頑張ったのに。

しかも、この片付けはなるべく早く終わらせないと学校の七不思議の一つに認定されてしまう。

その場合は何と名付けようか。無難に、墮落場所、とかかな。

「一輝」

丁重に早急に片付けをして、もう大方終わりっていう頃。

後ろから千秋が話し掛けてきた。驚くだろ、いきなり話し掛けてきたら。

「ちよつと話があるんだけど」

「何だ？」

手を休めずに、応答する。

「何で、梓美ちゃんを助けなかったの？」

「何言ってるんだ？　ちゃんと助けただろ。危険が無いように、姿を消させて」

「そう言う事じゃない」

少し強めに、まるで怒っているかのように千秋が言う。

……　やっぱり、コイツにはバレルよな。

「なんで、梓美ちゃんの大変な物が壊される時、助けに行かなかったの？　止めに行かなかったの？」

「勝つためだ。鋼凧も虎杖もいずれは敵になる。だったら早めにゲームを降りて貰うのが妥当だろ」

「なんでそこまで、このゲームに勝ちたいの？」

千秋の問いに俺が答ええないから、しばらくその場に沈黙が漂う。

「……………まさか、家族を元に戻そうと」

「ふざけるなよ千秋。冗談にしたって笑えない」

「……………ごめんなさい」

別に謝る必要は無いのに。俺が答えなかったのが悪いんだから。だから俺は千秋の問いに答えることにする。

「見つけたんだよ」

「……………えっ？」

「コード使用者。たぶん、このゲームの勝者になれば会えるだ」

「……………確証は？」

「ほぼ無い。いつも通りの勘ってやつだ」

「勘を優先して、梓美ちゃんを見捨てたって言うの？」

「悪いかな？」

気のせいかな、場の空気が段々と冷え切っていく。

千秋がマジギレしてるのかもしれないが、俺だって揺らぐつもりはない。

「一輝、言っちゃ悪いけど……………そこまでして追う必要があるの？」

ちいは一輝について行ってるだけで、誰かを見捨てたり裏切ったりしてまで執着する気は無いんだよ」

「俺も、何で執着してるのか忘れたよ……………それでも、俺と同じ目に遭わせてやらないと死ねないんだよ」

二人目の敗北者（後書き）

うわっ、バトルをグダってしまった……。

グダってしまったよ………英語のノート整理した後だからかなあ
……？

まあ、これが俺の実力ってだけの話か。

少し昔の関係の無い話

まったくゲームにも千秋にも鋼風にも虎杖にもその他参加者にも関係の無い話をする。

それはまだ俺が養父……いや養われたような記憶がほとんど無いからやっぱ義父、濁川（にじかわせむ）は無（仮名）に出遭っていない頃の話。

それは俺が濁川一輝ではなく、立崎一輝だった頃の話。

あまり裕福な家庭では無かったが、だからといって貧乏な家庭であつたわけじゃない。

親に厳しく躰けられた記憶はあれども、愛情が無かつたわけではない。

父や母を心の底から尊敬などしていなかったが、だからといって嫌いだつたわけじゃない。

多分、普通の……どこにでもあるかもしれないような一般的な家庭だつたと思う。

俺には姉がいた。本当に血の繋がった姉が。

姉には随分と遊んでもらつた記憶がある。家にいる時は、本当によく姉に遊んでもらつていた。

しかし姉は随分と曲者であつた。

例えば、姉がコンビニに行った時。

俺は鮭のおにぎりもついでに買ってきて、と頼んだのだが……姉が渡してきたのは昆布のおにぎりだつた。

いや、それだけならまだ許せたであろう。

でもよりにもよってあのクソ姉は、俺の目の前でツナマヨと鮭とオカ力的におにぎりを合わせて数十秒で食い切りあがつたのだ。

俺が文句を言つても軽くあしらつて、最終手段の暴力に頼ろうとしても、それも軽くあしらわれた。

思い出しただけでも腹が立つ。

他にもそんな事を多々やられて、俺はいつかやり返そうと心の中で

誓ったものだ。

だからといって、姉が嫌いだったわけじゃないし、むしろ好きだったんだと思う。

俺はたぶん、家族全員、皆好きだったんだと思う。

売られる時までは。

売られると言つても、人身売買……臓器などを売られたわけじゃない。

未だに俺にもよく分からない。だけど俺はある日突然に両親から裏切られた。

仕方が無かったんだと思う。理由もお金とかそういうのじゃないんだと思う。

でもとにかく、両親が俺を売った事実は変わりやしない。例えどんな理由があろうとも。

まあそんな両親は俺が呪詛の言葉一つ唱える間もなく殺された。目の前で。

あっさりだった。全て味気なかった。空前絶後という奴だろうか？

多分少し違うんだろうけど。

簡単にまとめればこうだ。

俺の好きだった家族は、ある日、買い物に行くと息子に嘘を吐いて乗車させ、数時間車で移動したのち、よく分からない灰色の場所で、見知らぬ男共に息子を渡して、その息子の目の前で、呪詛の言葉を吐きながら両親が殺されることで、崩壊した。

今でも思う。あの汚い言葉遣いは誰に向かつてしたものだろうか？

俺に視線を向けることなく、どこかに叫んでいたあの言葉は一体誰に向けられた言葉だったのだろうか？

その時、純粹過ぎる馬鹿正直な俺はそんな事を思いながら男共に目隠しをされてどこかへ連れて行かれていた。

~~~~~

「……………」

頭が痛い。若き日の自分の事など思い出したためだろうか？

……何が、何で執着してるのか忘れた、だ。

思いつきり覚えてるじゃないか。嘔吐きもここまで来れば遺伝とか思えない。

遺伝としか……………。

時計を確認する。現在時刻10:23。

……もしも今日が平日で、学校に行かなきゃいけないんだとしても

……今日はいいや。

今日だけは、いいや。

しばらく天井を眺めながら、何かを考えようとする。

だけど頭が上手く働かず、何も考える事ができない。ただ呆然に漫然に天井を眺める。

……………。

……………。

……………。

……このままだと、また眠ってしまいそうだ。

今眠ったって、良い夢なんて見れそうにない。

どうにか体を起こし、部屋を出る。

腹も若干減っている。遅めの朝食でも作るとするか。

頭を掻きながら階段を下り、キッチンへと入る。

……………異常な程、静かだ。千秋はまだ寝ているのだろうか？

いや、学校に行ってるという可能性もある。

アイツ、朝食ちゃんと食ったのかな？ 無理に起こしてくれて良かったのに。

俺の惰眠よりも朝食を食う事を優先しろよ、まったく。

冷蔵庫を漁り、適当に炒め、皿に盛り、食う。

黙って食う。だから静かだ。いつもなら千秋がギャワギャワ騒いでうるさいというのに。

ああいう夢を見た日には、千秋くらいに騒がしいバカが傍にいたほうが気が晴れるというのに。

学校に行こうか？　ここよりも静かなわけがないし、千秋や鋼凧というバカに会え……ないかもしれない。

千秋には会えるだろう。でも鋼凧は……多分まだ精神的に回復していない。脚の怪我也相当酷い様だし。

今のテンションでは虎杖にも気を遣わせてしまっただけだろう。

なら今日は、今日だけは家に居よう。

どんなに嫌でも今日だけは、家に。

流し台に食器を片付け、ソファに座る。

特に何かする事もない。暇だ。暇過ぎる。暇はあまり好きじゃない。もう少しマトモに頭が働けば適当な妄想でも想像でも戦略でも考えられるのに。

よりもよって頭が働かない。だからまた天井を見る。

ただ呆然と、ただ漫然に、天井をひたすら眺める。

今日は、あまり気分のいい日じゃない。

## 少し昔の関係の無い話（後書き）

うわっ、暗ッ！

いきなりなんで下衆主人公が鬱になってるんですか！？

あのどんな罪を犯そうとも罪悪感というものを蹴散らしそうな下衆主人公が！！

……っっていう風な判断を下されてる主人公って何なのさ？

## 少し昔のどうでもいい話

俺が目隠しをされて連れられた場所は、これまたよく分からない灰色の空間だった。

いや灰色というより、確か暗かったから黒っぽいような感じだったかな？

そこで見たのは、檻の中にいる、姉。

鎖で繋がれ、身動きが取れない姉の姿を見た瞬間、俺はこう思った。ああ姉ちゃんもあの人達に売られたんだ。あの人たちの死を聞いたら喜ぶかな？ いや喜ばないだろうな。

そんな風に俺は思っていた。

物音とかで、誰かが近くにいると思って姉は顔を上げた。

そして俺がいる事に驚いて、しだいに悲しそうな顔をして謝ってきた。

何で姉が謝るのか、俺には分からなかった。分かりたくも無かったんだと思う。

悪いのは俺たちを売りとばした両親で、姉が謝る必要はどこにもない。

そう思っていた。

そしたら悪の権化……という言い方は失礼だろう。両親の死体が俺と姉の前に運ばれてきた。

多少乱雑に運ばれたのだろう。俺が見た時よりも汚れや傷が増えていた。

そしてその死体と共に、人間がやってきた。

暗くて見えなかったが、多分、男だ。女だったかもしれないが。声を覚えていないのが一番惜しい事だ。

その人間は姉に問うてきた。両親を生き返らせたいか、と。

姉はイエスと答えた。俺もその意見に賛同だった。生き返らせて、一発ぶん殴ってやりたいなど思っていたからだ。

でも幼く、純粹で、馬鹿正直だった俺にも分かっていることがあった。

死んだ人間は生き返らないということだ。

なのに人間は生き返らせたいかと聞いて来た。多分、バカにしているのだろう。そう思った。

でも違った。生き返った。俺と姉の願い通り、両親は生き返った。生きかえった両親は、俺と縛られている姉の姿を見て、謝ってきた。そして人間の姿を見て、またあの時の呪詛のように汚い言葉を吐き捨てた。

だからだろうか？

直後、両親は壊された……いや人の場合は殺されたか。

殺されて、人間が「おっと、つい誤って殺しちゃった」的な何かを言つて、また生き返った。

痛がつていた。二人とも痛い、痛いよ、と泣くように呻いていた。次第に痛みが治まったのか、さっきのように俺と姉にひたすら謝ってきた。

人間には目も向けずに、ただひたすらに俺と姉へ謝っていた。何を謝っていたのか、何を言っていたのかは覚えてない。けど二人とも謝っていた。

だからだろうか？

またすぐに壊された……殺された。

殺されて、人間が何かを言つて、また生き返った。

色々なところを掻き毟る様に呻きながら、今度は人間に呪詛の言葉を吐き続けた。

俺と姉には目も向けず、ただひたすら人間に向かって汚い言葉を吐き続けていた。

だからだろうか？

すぐさま壊された……壊し、殺された。

殺されて、人間が何かを言つて、また生き返った。

掻き毟り、掻き毟り、呻きながら、謝っていた。

人間に謝っていた。涙を流しながら謝っていた。とにかく謝っていた。許されようと必死に謝っていた。

きつと何度も殺されて心が折れたんだろう。だからさっきまで呪詛の言葉を吐き続けた相手に謝っているんだ。だからだろうか？

今度は徹底的に壊された……壊して、壊して、殺された。姉が泣き叫んでいた。もうやめて、と。

俺は姉まで殺されるんじゃないかと心配になっていた。

だけど人間はその姉の言葉を見殺しして、また生き返らせた。生き返って、悶えて、謝って、また両親は殺された。

そして生き返って、悶えて、謝り続けて、また両親は殺された。

そして生き返って、悶えて、謝り続けて、また両親は殺された。

そして生き返って、悶えて、謝り続けて、また両親は壊された。

ずっと姉は泣き叫んでいる。やめてくれ、と泣き叫んでいる。

俺はずっと見ている。何故？

状況について行けなかったから？ 違う。

恐怖に身も心も震わせていたから？ 違う。

こうなつて当然のことをしたと思つたから？ 違う。

諦めていたのだ。全部、もうこの円環から両親は逃れられないと。

生き返り、悶え、謝り、壊され、そしてまた生き返る。

このループから逃れる術を両親は持っていないし、俺もこのループを止める術を持っていない。

だから諦めた。諦めて見ることしかできなかった。

奇跡なんて待ち望めなかったし、目を逸らしたところで耳から無残な光景が想像できてしまう。

現実からは目を背けられない。妄想へ逃げることなんて不可能だ。姉は泣き叫んで、目を逸らして、諦めずに……止めて、と叫び続け



る。

多分、今だから思えることだが……ずっと姉が諦めなかったから俺は直視することが出来たんだと思う。

俺が諦めてしまったことを姉が諦めずにいたから、俺は俺でいられた。

だからだろうか？ いやそれもあるが多分、人間の器的に限度を超え過ぎてしまったんだろう。

姉が壊れた。姉の精神が壊された。壊れた。壊れ尽くした。

笑い出した。あひやひやうひやひやひや、と今まで聞いた事のない声で笑い出した。

何が嬉しいのか分からなかった。恐かった。壊れた姉が。

姉の全てが怖くなった。今まで両親を死を何度も見たって震えもしなかった……震える事もできなかった体が震えだした。

笑いながら、首や全身を無理矢理動かし、本気で鎖を引き千切ろうとする姉が、自分の知っている姉では無い気がした。

無理に体を動かしてるため、どこからか少しずつ出血する。それでもその自分の血を浴びながら姉は笑い続けていた。

逃げ出したかった。逃げ出せなかった。逃げ口などそう都合よくあるものじゃないんだ。

ある意味、釘付け。あの人間のことなど思考の端くれにもなかった。俺の視界には、恐怖の象徴となってしまうた姉がただいるだけだった。

少し昔のどうでもいい話（後書き）

にやはははは！

ヘッドホンして書いてるから耳が痛い……………。

## 少し昔のくだらない話

気付いたら、壁を……天井を見上げていた。

意識が途切れていた。気付いたら、レンガの壁に囲まれた場所に居た。

どこだか分からなかった。分かったところで仕方が無かった。どうせ俺以外誰もいないのだから。

……嘘を吐かれた。家族全員に。そう感じた。

両親には騙され、姉には本性を隠されていた。そう感じた  
何で騙されただろう？ 何で隠されていたんだろう？

俺が無力だったから？ 俺が非力だったから？ 俺に何かを成す力が無かったから？

そう感じて、よく分からないけど泣いていた。

泣いて、泣いて、泣いて、泣いていた。

始めは涙が出て、次に声を上げて、泣いていた。

途中から何で泣いているのかを忘れてしまったが、それでも泣きたい気持ちだったから泣いた。

泣きまくって、水分を大量に出して、声が嗄れるほど喚いて、そして。

「こんにちわ」

誰かに声を掛けられた。

最初は幻想だと思った。それを確かめるために体を上げて、誰か居るのかを確認した。

そうして、その声の主を自分の幻想だとなおさら思い込んでしまった。

壁の隙間から漏れ出す月明かりに照らされ、微かな煌めきを放つ銀色の髪。

両目の色はそれぞれ違う色で、蒼い瞳と琥珀色の瞳をそれぞれしていた。

そんな今まで見た事のない容姿をしたその頃の俺と同じ年齢くらいの少女が、居た。

声を出せず、それでも思った。天使がいる、と。

そして恨んだ。もしも俺の前に降りるのだったら、もう少し早く降りてくれればよかったのに。

神も仏も、まったくもって無情なものだ。

でも、それはただ自分の無力さから逃げ出すための言い訳にしかならず、また泣きたくなった。

そんな俺の心情を分かっているのかいないのか、よく分からないが少女は微笑みかけながら俺に問う。

「ねえ、なんで月は明るいんだと思う？」

それが、濁川千秋が俺に最初に聞いて来た質問だ。

~~~~~

「……………」

また寝ていた。よりにもよってソファで寝ていた。

首を上げて寝ていたから、肩や首筋が異常に痛い。マジ痛い。どうすんだよコレ。

ともかく、天井に橙色の光が照らされているから多分、夕方になったんだろう。

10時半から夕方までって……………5時間以上は寝てたのかよ！？

そりゃ首痛めるわ。どうすんだよ、マジで痛いぞこれ。

まあ、それは仕方が無いとして。

「…………おい、千秋。何デメエは俺の膝の上乗ってんだ？」

痛む首を下げ、真正面を見ると割と間近に千秋が居た。距離にして数十センチ。

俺の膝を跨ぐようにして座り、もう胸板に両手をついて押さえつけるように対面している。

どんだけ近いんだよ、バカ女。

「一輝、泣いてたから」

「は？」

「いや、だから一輝が泣いてたからその涙を拭いてあげようと」

「泣いてた？ 俺が？」

悪名が今にも轟きそうなの俺が？ あの夢で泣いていた？

まだ泣けた？

「……っていうか千秋。別に俺の涙拭くのに、こんなに近くなきゃいけない理由はあるのか？」

「実を言うと、バランスを崩してこんな状態になって、そしたら一輝が起き出しちゃったんです。すいません！」

「……別に、お前のせいで起こされたわけじゃねえーよ」

それもしはあるかもしれないが。別にそれで無理に起こされたんじゃない。

「おいバカ千秋」

「はい」

「取り敢えず、今すぐこの体勢を止める。お前の息が掛かってしょうがない」

「はにゅッ!？」

よく分からん声を出しながら、千秋が飛び退くようにして移動する。気のせいか夕日のせいか、千秋の頬が少ばかり紅潮しているようなしていないような。

多分、気のせいだな。こいつに恥じらいという常識が身についてるんなら、家をゴミ屋敷に変えるわけがない。

「おい千秋。お前、今日は何食べたい？」

「え、作ってくれるの!？」

「ドアホ。お前の食べたいものを今から作って、お前の目の前で美味しそうに見せびらかすようにして食うんだよ」

「じゃあ、ハンバーグ!」

輝いた千秋の顔をどん底に落としたいがために、わざわざあんな事

を言ったのに、コイツ、笑顔で答えやがって。

ああ、なんか今日はついてない日だ。自分の言葉も切れが悪いように感じる。

なんか調子悪い。っていうか首痛い。なんか千秋を騙せなかったのが悔しい。

「子供か」

千秋の言った料理名にも、悪戯が失敗して拗ねている自分にも、そんな事を思っただけで呟いてみる。

俺はキッチンではなく自分の部屋に向かい、着替えをすまして玄関に行く。

「どこ行くの？」

「冷蔵庫にひき肉なんて無いからな。わざわざ買いに行くんだよ」

「ちいも行く」

「お前は買い物カゴにお菓子とか入れそうだからダメだ」

「そんな子供っぽいことはないよ！」

「どうだか。ちいちい言ってる奴がそんなこと言っただけで説得力が無い」

そう言っただけで、俺は勝手に玄関を出ようとするが、その前に千秋に腕を掴まれる。

むくれた顔をしながら千秋は、

「ちいも行く」

再度自分の意見を主張してきた。面倒な奴だ、まったく。

「腕を掴むな。虎杖とか学校の奴に見られたら恥ずかしいだろ？」

「うん」

パツと俺の腕を離して、すぐさま千秋は靴を履く。

もう今日はダメだ。何か舌が上手くいつもみたいに回らない。

「鍵閉めてから来い」

「分かった」

無邪気に笑う千秋を連れて、俺は近くのスーパーに行った。

何か今日はホント、良くない日だ。

少し昔のくだらない話（後書き）

意味不明な文章はここで終わって、次からはバトル無し、騙し合い無しのお遊び回ですよ多分。

っていうか結局、一輝の勝ち残りたい理由って何なんでしょうね？

お見舞い

「そろそろ動き出す」

「えっ？」

スーパーで色々と買って、家帰って、食材洗ったりして、みじん切りして、こねて、空気を抜いて、型作って、焼いて、蒸して、さらに盛り付けて、食ってる最中。

見せびらかすように俺がハンバーグを食い、釣られて千秋もハンバーグを口にいしている時。

俺はそう言った。

「それってどういう事？」

頬にケチャップを付けた千秋が俺に問うてくる。

「打って出る、ってことだな。ケチャップ拭け」

「ありがと」

俺が差し出したティッシュで頬を拭き、続きを訊きたそうな顔をしてきた千秋。

「今までは参加者の誰かが動き出すのを待ってたが……まあ《完全干涉》がよりにもよって俺たちを標的にしてきたからな。こっちが手を組んでは他の参加者にもバレただろ」

「だから、隠れることから潰し合うことに変えるの？」

「現参加者は7名。こっちには3名。残りは4名。でも、鋼皿の協力が得られればこっちも4名。人数的には対等に立てる」

「……でも、敗者はゲームに介入できないんじゃないの？」

「ゲームじゃない。敗者が禁止されることは、物の破壊と参加者の殺害だ。協力してもらう分には問題無い」

「じゃあ、他の4名だって《完全干涉》に話を持ちかけるかも……」

「《完全干涉》はその話を棒に振る。アイツは元々……学校に来る前から俺たちの事を調べてた。多分、アイツには4人が手を組んだこともバレてただろう。それでも奴は独りでやって来た」

「……他の参加者と協力する気なんて更々無かったから？」

「その通り。だから奴は、協力しない…………… つつても俺から話を持ちかけるつもりでいるんだが」

「……………一輝って、昔より外道になったよね」

「勝つためだ。その為だったら外道だろうが下衆だろうが鬼畜だろうが悪魔だろうが何だってなってる」

「そう……………。でも誰とも協力する気が無い《完全干渉》が手を貸してくれるとは思わないんだけど」

「そういう時は《非観理論》の使い時だ。情報を集めれば自然と見えてくる、アイツのゲーム参加理由」

まあ、ロクでもない事だとは思っけどな。

利点があれば《完全干渉》は俺に協力するはずだ。

「ともかく……………まず次に誰を敗退させるかだ」

「それより前にやる事があるよ」

「……………えっ？」

千秋の言葉に俺は耳を疑った。

俺が何かを見逃していた？ そんなバカな。まだ悪夢心地ってことか？

「梓美ちゃんのお見舞い。一輝はまだ行ってないよね」

「面倒臭い。パス」

「《非観理論》を使うんでしょ？ 《否定定義》が無ければ聞き出せないんじゃない？」

「くっ……………」

千秋に極めて正論を言われてしまうなんて……………ホント今日は調子悪い。

「……………分かった。いつ行けばいいんだ？」

「明日」

「ああーと、その……………」

「行くよね？」

「……………はい」

バカな千秋に言い包められてしまうなんて……もう今日はダメだ。
ダメの日だ。

ああ、もう、調子が狂う。いつものペースじゃない。

「御馳走様」

「ごちそうさま」

翌日の放課後。

学校を無断欠席したんだとずっと思っていたんだが、どうやら昨日は勤労感謝の日だったらしい。

っていうことは、もうすぐ11月も終わるんだなー。

つか、昨日、千秋はどこに出掛けてたんだ……って、鋼風の
お見舞いに行ってたのか。

普通に考えればそうだろうな。多分。

「おい、鋼風、元氣かー」

病院の個室のドアを開け、適当に間延びした適当な言葉を投げかけてみる。

「……………」

返事が無い。ただの屍のようだ。

……じゃなくて、ただ普通に寝ているだけである。

「……タイミング悪いね」

「だな」

一緒に来た千秋の言葉に激しく同感しながら、室内に入る。

病院の個室……人生初の侵入である。

あんま怪我しても病院なんて行かなかったからなあ。

「ちい、お花の水、変えてくるね」

「分かった」

適当にあった椅子に座って茫然としてみると、千秋がそんな事をいって花瓶を持って出て行った。

……………する事が無い。ある意味、気まずい。

いつその事、本人を起こしてしまおうか。ぐっすり寝ているのがムカつくし。

いやしかし、これでも俺は人の子。それはやってはいけない気がする。

まあ、でも鋼風だしイイかな？

「……イイわけないでしょ、変態覗き魔」

「あれ？ 起きてたか？」

俺が行動に移ろうとする前に、鋼風がうつすらと瞼を開けて、体を起こす。

「何しに来たの、カス？」

「何って、千秋の付き添い」

「………濁川先輩は？」

「花の水変えるとか言って出て行った」

「そう……」

「………お前、大丈夫か？」

「何が？」

会話が途切れそうだったから、適当な言葉を投げかけたただけなんて言えない。

「脚とか……精神的な面とか」

「脚の方は治ってきてる。精神的な面ってのは意味が分からない」

「ならそれでいい」

うん、やっぱり気まずいから一旦退室！

しおり

「なあなあ、千秋さんや」

「どうしたの一輝？」

適当に千秋を探しに行ったのは良いのだが、数十秒で見つかるから嫌なんだよな。

もうちょっと手間を掛けさせろ。あの空間に俺を戻させるな。

っていうかいつその事、相談してみるか千秋に。

「俺、なんかあの空間、気まずいんですけど」

「それは一輝の心に罪悪感というものが生きてる証拠だね。良かった、良かった」

「良くは無い。何が良いんだよ」

「直したげて。ヘヤピン」

「……………それが目的かよ」

俺はようやく千秋が見舞いに行かせた理由が分かった。

ようは壊れてしまったヘヤピンを即刻直せとのご依頼だったわけだ。

しかも依頼料は俺の罪悪感。最悪だね。

「無理だ」

まあでも、それが出来たら俺だってすぐにやってるわけだよ。

気持ち落ち着かせるために、即刻に。

「嘔吐き。一輝なら出来るでしょ？」

「お気に入りを変えたくはない。それに色々と下準備が必要だ。今すぐ直すのは無理」

「ちいが居れば、下準備なんて必要ないでしょ？」

「まあ、そうでもないわけだ」

ともかく今すぐは出来ない。それが結論。

「じゃあ、一輝が何か作っただげて」

「……………は？」

「梓美ちゃんに、一輝が、何かプレゼントしてあげて」

「俺のプレゼントなんてすぐに捨てるぞ、鋼凧は」

「じゃあ、すぐに捨てそうもないプレゼントをあげて」

わお！ この銀髪、なんていう無茶振りしてきやがるんだ。

「時間稼ぎはしてあげるから、あと1時間以内に作って」

「姫様？ それは私には無理な所業でございます」

「作れ」

「無理だっつってんだろが、人の話を聞け」

「作れ」

こつちの話は聞かないってか？ 上等じゃねえーか。

多少プランに変更はできるが、バカ千秋に売られた喧嘩を買わないわけにはいかないだろ。

「1分。病室へと戻るこの間に創ってやるよ」

「凄いな、一輝はもしかしたら作家とかになれるかもよ？」

「なりたくないし、あの程度のでっ上げなら幾らでも誰でも作れる」

「……………？ 濁川先輩、何の話をしてるんですか？」

病室へ戻ってくるなり鋼凧が質問をかましてきた。

まあ俺じゃないから良いんだけど。

「一輝の発想の凄さについて話してたの」

「俺は自分の発想よりも、お前のバカさ加減に驚くがな」

「だって優しい幻想と厳しい現実だったら、優しい幻想を信じたくなるもん」

「……………だから何の話をしてるんですか？」

主語が抜けたような会話をしてたからか、鋼凧が不貞腐れ始めた。会話の輪に入れないからって不貞腐れるなよ。子供かよ。

「ほら」

仕方なく、俺はポケットから鋼凧にある物を渡す。

「……………しおり？」

「ああー、でもお前じゃ読める本も無いし返せよやっぱ」

「ヤダ。これ一生物のネタにできるから！」

「ネタとか言うな！ やっぱり返せ！」

「ほらほら一輝、そろそろ帰るよ」

「千秋、テメエ……本当に覚えとけよ！ 十倍で返してやる」

「うん、そうだね。だから帰ろう、もう」

「ぎゃああああ！ 千秋ごときに軽くあしらわれたあー！！」

もうダメだ、俺のパーソナリティがズタズタだ！

ボロボロを通り越して、ズタズタだ！

「あ、そうだカス」

病室を出て行く前、鋼凧が声を掛けてきた。

「何だ？ 文学少女になる宣言でもするのか？」

「違うわ。これはちゃんと大事にする。それと」

言葉を一旦区切り、鋼凧は笑顔でこう言った。

「もう、わたしは大丈夫。お蔭様で立ち直ったよ」

「……そりゃ良かったな」

まさか、鋼凧から礼を言われる日にくるとは。

なんか調子狂うんだよな、最近。

ホント、なんとなく調子を狂わされてばかりな気がする。

交錯

「貴女が《干渉不可》ね？」

「……………誰？」

夕方の電車内にて、とある少女が誰からか呼びかけられた。

席に座る事なく、外を向いて乗車している少女の視界には絶対に声の主が映るはずもない。

だから問いかけた。

「《禁思用語》って言葉だけで分かってもらえると嬉しいんだけど」

「……………ゲーム参加者、ってわけね」

声の主……………《禁思用語》の姿も見ずに少女は会話を進めてしまう。

その少女の態度に少し苛立ちながらも、《禁思用語》は少女にある話を持ち掛け始める。

「ねえ、ちよつと協力しない？」

「協力？」

「そう協力。今ちよつと勢力を集めているの」

「……………何で？」

「先日、《否定定義》が《完全干渉》に、《完全干渉》が《非観理論》に負けたの。知ってる？」

「初耳ね」

少女が集めている情報は、ゲームの進行状況ではない。

だからその情報は本当に初耳だったし、別にどうでもいい情報でもあった。

「それで分かったんだけど《非観理論》《否定定義》《異見互換》

《無影無綜》の四人が手を組んでるの」

「……………」

「こつちも《結論反転》とは手を組んでるんだけど、それでも二人

《否定定義》が抜けたからといって、三人には勝てそうもないわ」

「……………あたしに頼るより《完全干渉》に頼った方が可能性があるか

もよ？」

そう提案する少女に対し、『禁思用語』は少し溜息を吐きながらこう答える。

「アイツはダメ。完全に一匹狼っていう性格してるし、誰かと協力なんて考える性質じゃない」

「へえ……」

「で、貴女はどう？ こっちに協力しない？ できれば強制的に協力してもらいたいんだけど」

「するわけないでしょ、バーカ」

少女がそう言うと共に、停車し、車両のドアが開く。

「あ、ちよつと」

そのまま自然と電車を降りようとする少女の肩を掴み止めようとするが『禁思用語』が伸ばした手は、少女に触れる事無く、空を切る。

「じゃあね『禁思用語』。次遭う時がないことを祈るわ」

ドアが閉まり、そのまましばらく少女は行ってしまった電車の方向を見る。

（……どんな形であれ、これでやっと『無影無綜』に辿り着けるか

……）

そう思いながら、少女はホームを降りたって行った。

「べえくしょんっ!!」

うう……なんか寒気がする……。

鋼凧か？ 鋼凧あたりが俺の悪口を言ってるのか？

まあ、それでもいいから鋼凧にはさつさと怪我を直してもらいたいでなければ『非観理論』が使えないからだ。

別に鋼凧に無理をさせれば使えない事も無いんだろうけど、千秋が『梓美ちゃんはまだ怪我人なんだよ!』とかうるさく文句を言うてくる。

ああ本当、さつさと鋼風怪我のおんねかなあー。

溜息を吐きながら天井を見上げる。

現在は家の中に独り。千秋はどっかに買い物に行った。ついでに頼んだ食材をしっかりと買ってきてくれるだろうか？

色んな事が詰みに詰んで、家の中でただ静かに待つだけでも気が詰まる。

《無影無綜》は窃盗にも奇襲にも隠蔽にもスパイにも向いてるが、なんせ、相手が何処の誰だか分からない状況だとコソコソと動くことも出来ない。

だから今は《異見互換》の視界を共有できるルールを使って、映像のみの情報を千秋に集めてもらっている。

《非観理論》が居るのに、こんな効率の悪い方法でしか情報を集められないなんて……………。

状況的には最悪。こちらから仕掛ける事が困難過ぎる。

まあ、こんな状況を作り出したのは他でもない《完全干渉》と俺である。

自業自得とはこの事か。まったくもって笑えない。

「遅いなあ……………」

千秋は一体どこで何を買っているのだろうか？ 帰ってくるのが遅く感じる。

まあ俺の体内時計が焦りと共に異常な早さで進んでいるだけかもしれないが。

やりたい事があっても、やれる状況ではない。

この前のように呆然と漫然と天井を眺めていたら寝ていたというオチも嫌だ。

さて、どうするか……………。

一人才セロでもするか？ いや、俺がしたくない。

そんな風に、適当に思考を回していたら千秋からのメールがあった。もしかして………… 買い物途中で何かあったのか！？

『ちい、くじ引きで3等当たった！！』

おめでとさん、と短く返信をし、俺は携帯を放置する。

そもそも何かあった後にメールなんてしてこれるのか？　そういう冷静な考えが足りなかった。

本当、この前から思考が絶不調だ。別に平和ボケをしたわけでもないのに。

悪夢ボケという新種のボケ型だろうか？

まあ、そんなのどうでもいい。まったくクダナイ事を考えることだけはいつも通りだ。

いつの間にか放置していた携帯電話がまた振動している。また千秋からのメールだろう。

『梓美ちゃん、明日退院だって！』

「…………ハア」

思わず安堵の溜息を吐いてしまう。これで明日から動き出せる、色々々。

詰んでいた状況が一気に切り開けてきた。

返信はせずに、そのまま携帯の電源を切る。

この勢いだと多分、千秋がくだらないメールをいくつもしてくるんだろうなと思ったからだ。

交錯（後書き）

またgdgdだよ……………ほんと、まったく。

提供者

「3100円、か……………」

とある雑居ビルの2階にある診療所の診察室にて、春永氷雨は椅子に座りながらそんな事を呟いた。

彼の視線の先にあるのは、医師免許証。

先日、虎杖によって切断されたため、再交付をしてもらったのだ。

（……………命と同等に大切にしていた物の価値は、3100円か……………）

医師免許証の再交付には手数料として3100円が掛かる。

その値段がどうも、自分が大切にしていた物の価値に思えてしまう。ゲームの敗退条件である、物の破壊によって氷雨はプライドに少しばかりの傷を負っていた。

（……………安い紙切れだとしても、一応は俺の誇りだったんだけどなあ……………」

そんな事をぼんやりとっていると、どこからか鈴の音が鳴った。診療所のドアに付けてあるものだ。誰か来た時に分かり易いように付けておいた。

「ちゃんと見ておけよ……………今日は休診日だろおが……………」

そんな事をぼやきながら、それでも自分がドアの鍵を開けていた事にも少しばかり呵責があると思ひ、仕方なく診察室から出て行く。

「あのおー、すいませんが今日は休診日なんで……………」

面倒臭そうに頭を掻いていた氷雨は、途中で言葉を切る。

理由は簡単。

相手が面倒な屁理屈を立て並べる前に、脳に干渉して追い返そうと思っていたからである。

その干渉が、出来なかった。

氷雨は来訪者の姿を確認する。少女だ。

赤みを帯びた瞳に、髪型はポニーテール。まだ少しばかり幼い顔付

きに、身長などの見た目からして中学生だろうか。

そんな少女に自分のコード《完全干渉》が通用しなかった。
となるとこの少女も、コード使用者か。

「何の用だ？ 新聞の勧誘も、ゲーム関連の勧誘もお断りなんだが」

「勧誘じゃなくて提供してもらいたいんだけど」

「何をだ？ 何にしる断るが」

少女が自分を訪ねてきた理由は、おおむね察しがついていた。
わざわざ敗者である、もうゲームに参加していない自分に求めるものなど二つなどしかない。

一つは、先日来た《禁思用語》と同じ、ゲームを有利に進める為の協力。

もう一つは、とある四人のコード使用者についての情報提供。
そのどちらかだ。

「《無影無綜》についての情報提供をもらいたいんだけど」

「ム力つく野郎だった。俺から言えるのはそれだけだ」

そう言って、氷雨は指を弾く。

途端に無数の氷の針が出来上がり、少女へ向かって一直線上に突撃する。

しかし氷の針は、少女の身に触れる前に蒸発したように溶けて無くなる。

「やっぱりお前のコードは《干渉不可》か」

「そう。貴方とのコード相性は最高よ」

《干渉不可》のルールなど楽に検討がつく。

あらゆるものからの干渉を拒絶する。

大方、そう言ったものだろう。故に氷雨のコードによる干渉の類は一切効かない。

氷雨からしたら、天敵のようなコードだ。

「はあ……ゲームに負けたのを教訓に、隠居生活でもしようかと思つたのに」

《禁思用語》も《干渉不可》も何故、負けた自分などを構う暇があるのだろうか？

まだ参加者は7人もいるのだ。そちらに構えばいいのに。

溜息を吐く氷雨の姿を見て、勝利を確信したのか、少女は歩いて近付いて来る。

「さあ《無影無綜》の情報を」

「嬢ちゃん、生意気に俺に命令しようとしてんじゃねえーよ」

そう言うとき氷雨はもう一度、指を弾く。

そんな言葉も行動も気にせず、近付いて来ていた少女は、急に膝をつくことになる。

いきなり立ち眩みのようなものがしたのだ。

「あらゆるものを拒絶する、あらゆる者から観測されない。そんなルールがチートだと思えるのは高校生までだぜ。大人の世界はもっとシビアだ」

胸に苦しさを覚えながら少女は動揺する。

自分には、あらゆるものも干渉できないはずなのだ。コードであれば物理法則であれ、少女が拒絶してしまえば干渉できなくなる。

なのに、どういうわけか氷雨のコードによって今自分は干渉されている？ そんなわけがない。

自分のルールは絶対だ。

その通り。少女の思考は一部分を除いて何も間違っではない。

「別にお前に干渉できなくても、他のものには干渉できるんだよ。バーカ」

ようは氷雨はこう言っている。

直接干渉が不可能な相手には間接的に干渉すればいい話だ、と。

《非観理論》の時は、どこに居るかが分からなかった為、いつきに全域攻撃をし油断を誘う事しか出来なかった。

しかし今回は違う。

コードを無効化する《否定定義》も居なければ、相手の姿だってしっかりと見える。

ならば相手の周りの環境に干渉し、相手に間接的にダメージを与えればいい。

例えば、少女の周りの酸素濃度をゼロにするように干渉する、とか。そうすれば少女は息を吸う事はできず、息を吐けば、そこに含まれる幾分の酸素も除去できる。

「がはっ……………けほっ……………ッ!？」

少女は首辺りを耑るように手を動かしながら、空気を求めるように悶える。

このまま行けば、窒息死……………いや、それよりさきに脳死をしてしまっただろうか？

ともかくこのままでは少女は死んでしまう。

悶える少女の姿を見ながら、氷雨は干渉を解いた。

「かはっ……………けほ、けほ、けほッ!」

咽るように咳をする少女。いきなり新鮮な空気を吸ったためかだろうか？

元から氷雨に少女を殺す気などなかった。そもそも殺す事すら許されない。

ゲームのルール上、敗者である氷雨が、参加者である少女を殺す事は適わないのだ。

「これに懲りたら、今すぐ帰りな」

そう言つて、氷雨は診察室へ戻ろうとする。だが。

「ッ!」

数秒で呼吸を整えた少女は、飛びかかる様にして氷雨の首を掴み、そのまま全体重を掛けて氷雨を押し倒す。

「拒絶!」

いきなりの事で流されるまま床にうつ伏せ倒れてしまった氷雨の首に、少女の手から押し潰すように圧力が掛かる。

それは人の体重を掛けて潰すものとは違う。

少女の手に触れられている部分が、無理矢理内側に押し込められる

ような感覚。

無理に少女の手から離れようと皮膚や筋肉が内側へ、内側へと逃げ
いるような感覚。

このままでは氷雨の首の中が変形してしまうだろう。

(……………このガキ……………ッ！)

少女を退けようにも、直接干渉が出来ない上、この至近距離では間
接的に干渉した場合、自分自身にも影響が及ぶ可能性がある。

そしてこのまま首に手を当てられていれば、愉快的首の形をした死
体になってしまう。

氷雨は、少女に降るしかなかった。

提供者（後書き）

《完全干渉》 あっさり敗北。

まあ、ゲームのルールと、相性の問題が重なったからなあ

快気祝い

「鋼凧梓美、復活しました！」

「ああ、それはよかったな鋼凧。ところで千秋？ この状況を説明してくれ」

鋼凧の復活宣言を蹴り飛ばすように流し、千秋に問いかける。

今日は11月最後の日曜日。

退院した鋼凧の快気祝いをすると言われて、千秋に引っ張られるまま連れて来られた場所は……県内にあるウォーターパーク。

そう言えば、くじ引きで3等が当たったとかなんとかメールしてきた記憶があるが。

まさかこのウォーターパークの無料入場券とかそういうふざけた物を当てたわけじゃないだろうな千秋の野郎。

いやでも、そんな在り来たりな回答じゃないことを祈りつつ俺は問いかけた。

「これからプールに行くんだよ」

しかしながら、俺の夢い幻想は千秋の一言によって悉く打ち砕かれたのだった。

……嫌な予感程、よく当たるものはない。

11月の最終日曜日……まあ言い換えれば、月末といってもいいだろう。

そんなもう冬場といっても過言ではない季節に何故、プールなのだろうか？

夏なら分かる。春でも分かる。秋だとうにか分かる。冬は絶対に理解できない。

冬、プールである。これが世界の常識であり真理といってもいいと思う。

「皆、ちゃんと水着は持ってきた？」

「はい！」

「ええ、まあ一応」

鋼風、虎杖が千秋にそう答えるのだが、幾分俺には理解できない。そもそも、俺は千秋に一言たりとも水着などと言われていない。

「だってプールだって言ったら、一輝泳げないから嫌がるじゃん」

「え、カスって泳げないんですか？ ダッサーイ」

千秋の一言にたまらず鋼風が食いついてくる。うん、こりや完全復活してるな。

後で覚えておけよ、このバカ女二人。

「まあ一応水着も貸出してるみたいだから、大丈夫だよ一輝」

「千秋、お前は本当にあとでシバくからな」

「一輝、そんな事言ったら、水の中に沈めるよ」

互いに笑顔で微笑ましい会話をする俺と千秋。うんうん、仲が良かった。こういう事を言うんだな。

「珍しい……濁川先輩の目が笑ってないなんて」

そんなことを鋼風が言っていたようになかったような。まあ、どうでもいいか。

「さ、皆早く中入っちゃお」

千秋の案内で俺たち四人はホテルに入っていた。

「おお！ 凄おい！」

そりゃ、ウォーターパークだもの。

ウォーターライダーや流れるプールだつてあるに決まってる。

しかし、さすがに冬場なので屋外施設は使えないという表示があった。

でもまあ、屋内施設だけでも充実している。

………全て、泳げない俺にとってはどうでもよいことだな。

「でも、正直言って……こういう場所に来たからって盛り上がりませんよね」

珍しく虎杖がノリの悪い事を言う。いつもなら思っても口に出さな

い性質なのに。

……女性の水着姿を見て、動揺でもしてるのか？ ウブだなあ。

「あれ？ 虎杖君も泳げないの？ 泳ぎ方教えてあげよつか？」

「ごめん。鋼凧に泳ぎで負ける自信が無いから、別にいいよ」

鋼凧の親切心を挑発で返す虎杖。本当に珍しい。やはり動揺しているのか。

「……虎杖君、ごめん良く聞こえなかった」

当然、癢に障った鋼凧は虎杖に謝罪の場を設けるが。

「余計なお節介だよ、って言ったんだ。今度はよく聞こえた？」

何故か今日は毒舌の虎杖は、さらなる挑発をした。

……実はもしかして独りで泳ぐのとかつまらないから、わざと鋼凧を挑発して対決しようとしてるのか？

そこまで、泳ぐのはつまらん事なのか？ 泳げないから分からないけど。

「うん、良く聞こえた。ちょっとあつちに25メートルの競泳用のプールがあるんだけど、行かない？」

鋼凧、めっさ笑顔。

目が笑つてないとか、そういう失態をせずに、全力の笑顔で虎杖を地獄へ誘う。

「ああ、いいよ」

「虎杖」

虎杖が鋼凧の誘いを受け、移動しようとする前、俺は反射的に声を掛けてしまった。

「……死ぬなよ」

「ええ」

その俺の一言に、虎杖は短くハッキリと答え……戦場へと行ってしまった。

「……一輝、誰に向かって敬礼してるの？」

戦場へ行ってしまった虎杖にしばらく敬礼を送っていると、遅れて千秋がやってきた。

「……………チツ、パーカーみたいなのを羽織ってやがる。」

「っていうか……………あれ？ 梓美ちゃんたちは？」

「戦場へ……………行ったよ……………」

「????」

俺の回答に合点がいかないのか、千秋は首を傾げている。

まあ、千秋には分からないだろうな。虎杖の勇気は。

「まあ、いいや。梓美ちゃんたちが居ないなら先に話しておきたい事があるし」

「何だ？」

「《完全干渉》の件なんだけど」

「居場所が分かったのか？」

「うん。それと《干渉不可》と接触してた」

「……………いつ？」

「ちいが3等当てた日」

あの日か……………鋼風の退院祝いの知らせを聞いた後、携帯の電源を切ってたからな。

電話だったら、通じない。

「メールすれば良かっただろ」

「だって緊急事態だと思って……………」

「そうか……………なら、何でその日のうちに俺に伝えなかった？」

「……………買い物してたら忘れてました……………」

「この事を思い出したのは？」

「ついさつき……………着替えてる時に」

「はいはい、よく伝えられたねー。偉いねー」

「ごめんなさい！」

別に謝らなくていい。伝えてくれたただけまだマシだ。

《完全干渉》と《干渉不可》が接触か……………また、仕掛ける前に仕掛けられそうな展開だな。

「一輝……………お詫びに泳ぎ方、教えてあげようか？」

「千秋。お前正直、詫びる気ないだろ？」

快気祝い（後書き）

注意：水着は取れません。

プールサイド

「凄いね一輝！　ちいが一時間教えただけで、水に顔を浸けられるようになったね！」

「バカにされている……………今物凄く千秋にバカにされている…………ツ！！」

「前なんて、プールに入る事すら躊躇ってたのに…………あの時から考えると、凄い進歩だよ！」

「バカにされている…………千秋にこの上なくバカにされている…………ツ！！」

「にしても、水に浸かるのが怖くてちいに抱き着いて震えてた時の一輝は可愛かったなあ〜」

「何年前の話じゃ！」

「もう無理だ！　もう耐えられない！　我慢する必要なんてない！！　もうこれ以上、千秋にバカにされてしまったら俺の脳神経回路が爆発してしまう！」

「少し昔の俺の不様な醜態を懐かしむように語る千秋に、俺はとうとう怒号を浴びせた。」

「でもだって本当に可愛かったよ？　母性本能をくすぐられる様な…………小っちゃい子供みたいにプルプル涙目になって震えちゃって…………」

「それ以上は言うなああああああああつ！！」

「これ以上この話を聞いてしまったら、俺の精神と記憶とプライドが腐りに腐りきってしまう様な気がしてたまらなかった為、大声を出して強制終了させた。」

「大体そもそも俺は初めから水が怖かったわけじゃなくて、義父に『おっと、たまたま手が滑った』とか言われて大豪雨の時に川に流されたトラウマがあるからであって、幼き頃の醜態だってそれが原因だから断じて怖がって千秋に抱き着いたわけじゃなくて…………その、

本能的に何かに掴まらなないと流されるとかそういうのが……………。

「ともかく、水が克服できてよかったね」

「ああ、そうだな」

結局、結論としては千秋の言う通りである。

まあ、でも水に浸かれるとはいえ、あまり長時間は浸かりたくない俺はお風呂派じゃなくてシャワー派なのだ。全く関係ないけども。

「お腹減ったあ……………」

俺と千秋がプールから上がると同じぐらいで、鋼皿たちが戻ってきた。

虎杖は割とまだピンピンしてる……………わけはなく、まるで死闘の末に敗北して疲労困憊のような雰囲気纏っている。足取りも重そうだ。

「23勝27敗でした……………」

それが虎杖の最後の言葉だった。

……………いやまあそれはちよつと言い方が変なんだけど、それ以降、疲れ果てた虎杖は一言も喋らなくなった。

っていうかお前ら50回も泳いだのか。つくづくバカな奴らだ。

「おいカス、何か食べ物は無いの？」

勝者である鋼皿も疲れ果てており、空腹のようだ。

「食い物なんて探せばどこかで売ってるよ」

「歩く気力も体力もないから、買ってきて」

「は？ 何言ってるんのお……………」

「一輝、ちいは焼きそばとかが良いかも」

「ついでに虎杖君のも買ってきて。カスの自腹で」

……………嘗めきってやがる、この女共。

しかしまあ、多数決的に俺が買ってくることは確実なので、仕方なく売店を探す。

まあ、でも見つけたとしてもテイクアウトとかじゃなくてその場で食う事になると思うから、買ってくることはほぼ不可能だとは思っただけ。

探すだけ探してみるか。

ポリポリと頭を掻きながら、俺は適当にぼつつき歩く。

「あのお……すみません」

赤い瞳びのスクール水着を着た、中学生くらいの女の子がちいに話しかけてきた。

一体、ちいたちに何の用なんだろう？ 弟とかが迷子になったとか、かな？

だとしたら探すのを手伝ってあげなきゃ。一輝なら関係無いやら面倒臭いやら言って探さないだろうけど。

……それより、なんか頬つぺたプニプニそう。触りたいなあー。

「濁川一輝っていう人を って何するんですか！？」

頬つぺたに触ろうとしたちいを避けながら、女の子が怒り出す。

さすがに、問答無用で頬つぺたを触ろうとするのは礼儀がなさ過ぎたかな？

「頬つぺたを触らせてください！」

「土下座まですることですか！？」

ん？ 一輝に、人に頼み事をする時はまず土下座、って教えてもらったのに……。

何か間違ったこと、したのかな？

……… あっ！ 敬語が足りなかったんだ！

「貴女のそのプニプニしそうな頬つぺたをプニプニさせてください！」

「それって日本語ですか！？」

んん？ 何で驚かれてるんだろう？

あと足りないものが分らないし…… 一輝みたいに教えてくれそうも無いし……。

……… そういう時は、強硬手段にでるしかないなあ。

一輝もよく、話し合いのできない相手には武力と暴力と権力を持つ

てして相手を屈せればいい、とか言って事態をややこしくするけど……。

こういう時は、仕方が無いよね！

「あの……いい加減、頭をあげてください。ほっぺは触らせませんけど」

「とりやあ！」

「うわっ！ いきなり何すんですか！？ ってちよつと！ え！？
何でそんな飢えた獣のような目をしてるんですか！？ 何体をフラフラ揺らしながらこっちに近付いてくるんですか！？」

「じゃあーッ！！」

「ちよつと、ホント、止め　ッ！！」

一度目の襲撃を、スク水女の子は飛退きながらかわす。

……………こいつ、できる！

そう思いながらもちいしは二度目の襲撃を行うのです！

プールサイド（後書き）

サブタイを考えるのが、面倒臭い

転変

現在千秋が襲撃している赤い瞳の女の子……なるかみあかね鳴神茜は《干涉不可》というコードが使用できる。

そのルールは、あらゆるコード、物理法則、常識などの全てからの干涉を断つことが出来るというものだ。

つまりは《干涉不可》を使用すれば重力や物体からの接触全てを断つ事が可能なのだ。

可能なのだが……。

（プニプニされる！　なんかよく分からないけど銀髪女にプニプニされちゃう……ッ！！）

何を動揺したのか、茜はコードを使用してるのにも関わらずプールサイドで千秋から逃げ惑っていた。

茜と千秋の周りには、鋼皿と虎杖が居るには居るのだが……二人とも泳ぎ疲れて騒ぎを無視している。

当の襲撃者たる千秋はというと。

（……あ、れ……？）

ようやく、異変に気が付いた。

といっても、茜の死角から襲撃して頬を触り尽くしてやろうと考えコードを使用した結果、気付いたのであるが。

自らの視界を共有するルールが通じない事態に対し、まず茜がコード使用者だという風に考えた。

いつも一輝に色々と説明されている為、すぐに色々と思考が回っていく。

コード使用者という言葉で、ゲーム参加者という言葉を連想し、つい先程一輝に話した内容を思い浮かべる。

先日《干涉不可》が《完全干涉》に接触したとういこと。

その時、千秋は氷雨の視界を通じて、氷雨の居場所と二人の戦闘を目撃したのである。

つまり自然と思い出す。氷雨と戦った者の顔を。

(……………一輝に連絡しないと……ッ！)

別に相手が攻めに来たという事は確定されていない。一輝を呼び戻せば、余計に事態をややこしくしてしまうかもしれない。

しかしそれでも《無影無綜》が居れば敵前逃亡も楽に行える上、千秋がまっさきに頼ってしまふのは一輝であつた。

茜への襲撃を止め、携帯を取り出そうとする。

しかし当然、プールサイドに携帯を持ってきているわけがなかった。防水性能の携帯電話ではあるが、泳いでる途中でどこかに流れてしまふかもと千秋が思ったからである。

偶然の失態……いや、それを狙って相手は千秋たちに接触してきたのかもしれない。

(……………どうしよう……………どうしよう……………ッ！？)

千秋のコード《異見互換》は相手の価値判断などや視界を盗み見ることは得意だが、それ以外は何も出来ない。

誰かに何かを伝えるルールなど有していない。

同様に鋼皿のコードも虎杖のコードも今すぐ一輝に何かを伝えるルールを有していない。

その上、二人とも泳ぎ疲れて、今すぐ逃げろと言ってもすぐに茜に追いつかれてしまいそうだ。

考えれば考えるほど、状況に追い込まれていく千秋。

(……………一輝なら、絶対にすぐに逃げるんだけど……………ちいの頭じや上手い逃げ方なんて思いつかないよお……………)

千秋の頭の中では、もう一輝が早く戻ってくるか、相手に追い詰められて終わりのかの二つの可能性しか無くなっていた。

茜は千秋の襲撃が止んでからしばらく様子を見ていたが、冷静になったのか、また最初の時のように千秋に問いかける。

「すいません、濁川一輝……《無影無綜》はどこですか？」

「……………えっ？」

その質問で千秋は理解した。

相手はわざわざ一輝が居なくなつたのを見計らつて千秋たちに近付いてきたのではなく、たまたま一輝が居なくなつた時に千秋たちに近付いてきたのだった。

狙いは千秋たちではなくて一輝個人。

なおさら一輝に、戻つてこないで、と知らせたくなるが、連絡する手段など持つていない。

「……一輝は、先に……帰つた」

黙つてこのまま時間を稼いだつて、一輝が戻つてきてダメな事態になるだけだ。

そう思つて千秋は適当な嘘を吐いたが……。

「出来れば、こんな公衆の面前で強硬手段には出たくないんですが」下手糞な演技はすぐに茜にバレてしまい、むしろ脅されるような状態を生み出してしまった。

こういう時だけは、すぐ人を馬鹿にして、すぐ人を騙して、すぐ人から猜疑心を引きずり出す、一輝の口が欲しい。

そんな事を思いながら、千秋は最後の抵抗として黙るしかなかった。

「はぁ………仕方ないですね」

溜息を吐きながら茜は嫌そうな顔をしながら、千秋へ手を伸ばす。その手を不意に焼きそばが防ぐ。

（………焼きそば………？）

いきなり何処からともなく現れた焼きそばに茜も千秋も啞然としていると、その二人以外の声が横から発せられる。

「ごめんな、お嬢ちゃん。このクソバカ女には俺が先に用があるんだ。だから後にしてくれ」

焼きそばを突き出して茜の手を止めた、一輝が発したものだつた。その時、一輝は内心でこう思つたそうだ。

（………焼きそばで止めるつて………自分で言つちや悪いけど、凄くダサいな俺………）

逃走準備

「ごめんな、お嬢ちゃん。このクソバカ女には俺が先に用があるんだ。だから後にしてくれ」

だせえ、クソだせえ、凄くだせえ。

千秋にさっき《干渉不可》の話聞いたから、なんとなく直感的にあの赤い瞳の貧乳そうなスク水少女がそうかもしれないと思ったんだよ。

もしもそうなら手を掴んで直接止めることは不可能。ならば何か物を前に出せば妨害できるって。

いや、予想通りに《干渉不可》の手は止まったよ。多分、違う意味で！

何で俺の手元に焼きそばが入ったプラの箱が有ったんだよ！　なんで鋼皿はそんなもんを買って来いって言ったんだよ！

そもそもなんで普通に売ってる店があるんだよ！　焼きそば売るなよバーカ！

バーカ、バーカ、バーカ！！

……なんてイジケてる場合じゃない。

現在プールサイドにて。多分、ほぼ、襲撃された。《干渉不可》に状況的に何が狙いで、どうしてグツタリしてる虎杖を狙わなかったのかは分からないが……。

取り敢えず、ゲームに勝つことが目的では無さそうだ。

「……………お前、誰？」

俺の顔を見ながらスク水少女はそう言った。まるで俺に喧嘩を売ってるかのよう。

……いやあ、俺はつくづく思う事が一つあるんだよ。

歳上のことをカスやらお前やら……最近の子供は敬語ってものを知らないのか？

いや、この少女が俺より歳上だったら分かるけどさ……絶対にガキ

んちよじゃん！

スク水ってセンスあたりがもうガキじゃん！ ビキニとかにすればいいじゃん。胸無さそうだけど。

ともかく絶対にこのガキが俺より歳上ってことは無いね！

だからまずは敬語を使い、敬語を！

「ガキい、ともかく見逃してやれって言っただから大人の言う事はちゃんと聞こうねガキ」

「……ガキ、ガキうるさいな。ブツ飛ばしますよ？」

「……どおやら、俺は歳下との相性が極上を通り越して、超絶的に悪いらしい。」

今すぐにこのガキを地獄の淵へと突き落して埋めてやりたい。

「何だ？ 最近のガキは力の差つてもんを知らないとか口を慎まないのかガキだから？ そこら辺どうなんだガキ？」

「……さつきからガキばかり連呼して、バカの一つ覚えですか？ そうなんですか？」

「ぶっ殺されたい気持ちはよおおく分かったからよガキ。この邪魔者たちを除けていいか？ 邪魔されると不愉快なんだ」

「分かりました良いですよ………とでも言うと思いましたがバカヤロウ。バカヤロウみたいな三下さんには用は無いですよ。だからさっさと退きやがれ」

「上等だ。そっちがそう言うなら、消すまでだ」

そう言った後、まずはム力つく焼きそばが入ったプラスチックの箱を離して千秋に触れ、自分の姿と同時に消す。

その後、鋼皿と虎杖の近くに姿を現して、二人にも触れる。

そしてまた同時に全員の姿を消し、これで《干涉不可》からの逃走準備は完了した。

「お前達はそのまま逃げろ。あのガキんちよは俺が引付ける」

その後、しばらく離れた忌々しき焼きそばの売店の物陰に隠れなが

ら三人に俺はそう言った。

《干涉不可》はまあ当然最強の防護服のようなコードだが、逃げるのは容易い。

一度姿を隠して適当に走ってしまえば、すぐに簡単に振り切れる。だからこうしてまた全員姿を現して作戦会議ができるのだ。

「何言ってるの輝！ このまま逃げようよ！ あの子を敗退させる気でも無いんでしょ？」

「ああ、ゲームを進行させる気は無いが……性格的にあのガキが気に入ら」

情け容赦なく千秋に頭を叩かれた。痛い。

叩く事はないだろ、叩く事は。

「もう逃げれる状況なんだから、わざわざ相手しなくたっていいじゃん」

「いずれ相手にする。その前に相手のコードの情報を実戦で集めようとしてるだけだ」

「《非観理論》を使えばいいよ」

「《非観理論》はあくまで未来の出来事を観測するだけで理論値しかでない。実戦じゃ、理論値だけじゃカバーできない事が沢山あるんだよ」

「そんなの建前でしょ？」

「それを言ったら、理屈の全てがそうなっちまう」

まあでも、千秋の言う通り、俺のコードの情報とかそこら辺は全て建前なんだけどね。

俺はあのガキが性格的に気に入らない。鋼凧のほうはまだマシかもしれない。

初対面の時に俺を指す代名詞として貴方っていう風に言ったもんな。それに比べて、誰？ だってよ。

まったく本当、最近の教育現場が悪いのか親が悪いのか、はたまた育った環境が悪かったのか。

どれだかは知らないが、基本的な人に対する礼儀ってもんを教えて

やらないと気が済まない。

その情熱が、絶不調の俺を覚醒させたのかどうかは知らないが。千秋の反論に屈せず、折れない普段の俺の精神状態に戻っていた。どうやらなんか、調子が戻ってきたみたいだ。これならいける。

「一輝、ヘマとかは絶対にしないだね」

最後に千秋は反論する事を諦めたのか、俺に向かってそう言ってきた。

ホント、

「誰に向かって言ってるんだ、それ」

逃走準備（後書き）

卑怯で卑屈な主人公。敵前逃亡とは何事か！
強制的にバトらせてやるのか？

《無影無綜》

「おやおや、そこのお嬢さん。独りで何かお探しかい？」

再びプールへと戻ってきた俺は、キヨロキヨロと何かを探すように辺りを見渡すスク水少女へ話し掛ける。

「……………あ、れ？」

スク水少女は俺に視線を移した後、ようやく辺りで起こっている異常に気付く。

異常といっても、それ程、大きな事じゃない。

スク水少女以外の人間が、このウォーターパーク内に俺以外、誰もいないというだけだ。

そういった状況を作るのは簡単だ。

鋼風のコード《否定定義》はコードであれ常識であれ何でも無効化できる。

まあ、言い方を変えれば、何でも否定できる。

だからこのウォーターパーク内に濁川一輝以外の人間が居ることを否定してもらった。

まあ無効化とは少し違う使い方で、第一成功するとは思ってなかったのだが……………結果は反するものとなった。

《干渉不可》にはコードは通じない。

だから必然的に、このパーク内に居る人間は俺とスク水少女だけとなった。

「……………別にいいや。目的は達成しやすくなったし」

「……………つまりそれって、目的は俺だったってわけか？」

少女の目的も言葉の意味も、一切分からない。

だから質問するしかない。取り敢えず、このクソガキが何で俺たちに接触してきたかが分からなきゃ。

上手く交渉すれば、こっちの仲間になるかもしれない。

「アンタのコードは《無影無綜》よね？」

「だったら？」

「アンタは濁川一輝じゃない」

「……はあ？」

「……いきなり何を言い出すんだ、このガキは？」

「こっちは過去に《無影無綜》に会った事があるの。でもソイツは学生でも無ければ濁川一輝という名前でもアンタみたいな顔でも無かった」

「……おいガキ。最近じゃコードを引き継ぐって便利な事ができること知ってるか？」

「知ってる、《完全干渉》もそう言ってたからね。でもそれは実現不可能な事なの」

「何言ってるんだ？ コードの引き継ぎは可能で、引き継いだ者はこの市内に二人はいる」

「確かに、コードの引き継ぎは可能かもしれない。というかそんな可能か可能じゃないかはどうでもいい。根本的に不可能なの《無影無綜》に限っては」

「ああ？ 何が不可能っていうんだよ？」

「……ヤバい。このままじゃ、バレる。」

「ただでさえ、先日の千秋のせいで支障が出てるのに……ここでバレたら一大事だ。」

「さっき言っただでしょ？ 過去に《無影無綜》に会った事があるって。だから今、ソイツがどういう状況に居るかも知ってるの。今何処で何をしてるのか、全て知ってる」

「……」

「ソイツは今、県外の刑務所で服役しているはずなの。これどういう意味分かる？ 本来、県外に居るはずの《無影無綜》が今この場、あたしの目の前に居る。これは明らかに矛盾してる」

「……チッ」

「ココから導き出されることは一つ。現在服役中の《無影無綜》は脱走して、身分を偽り、このゲームに参加している」

「……………おいおい待て、ちょっと待て。身分を偽りつて……………名前や年齢は誤魔化せても顔までは偽ることができないだろ？」

「協力者が居るんでしょ？　そういう偽る事に関して卓越しているコードを使用できる協力者が」

「……………ふふ……………ふはははははははッ！！」

突然笑い出した俺に、スク水少女は警戒したように身を構える。

……………バアカッ！！

バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ！

「よりもよって気付くとはな……………最低だよ、このクソガキ」

最低脳！　このクソ馬鹿ガキが！　んなわけねえーだろ、バーカ！

「だがな、俺だって……………取り戻したいものがあるんだよ」

「アンタの失ったものなんて、自業自得じゃない！　カッコ付けて自分が何をしたか忘れたの！」

知るか！　知ってるわけねえーだろ！　なんて言っただって、俺の《

無影無綜》は、

偽物なんだから。

「アンタを勝たせはしない。アンタの大切にしている物をあたしが壊す」

「やってみろよクソガキ。お前みたいな甘チャンに俺が負けるかよ」

俺の挑発の言葉が終わると共に、スク水少女は突撃して来た。

触ることすら叶わない、触れようとしたら押し返される。

それがスク水少女のコード。おおよそ世界最強の防御壁……………いや、防護膜とかの方が正しいな。

それに対してこちらは姿を消し隠すだけのコード。盗みや覗きや逃走でしかその真価を発揮できない。

俺一人ではこの少女に勝つのは到底不可能。

そもそも鋼風が無効化も、虎杖の観測も、千秋の覗き見も、こちらの陣営のコード全てが通じない。

《完全干渉》すら、この少女を殺す事は可能でも、抑止することは無理だろう。

俺の周りにあるコードではこの少女を止める事はできない。

まあ、今の俺はこの少女から逃げればいいだけ。そんなの楽勝。こちらに圧倒的な分がある。

でもいずれはこの少女を倒さなければいけない。

いや倒し方ならある。周りの環境を利用すれば、この少女を殺す事も、場合によっては止めることも可能だ。

問題はその、場合、が成立するかだ。

だから、まあ千秋には建前で言ってしまったが実験をしなければいけない。

非道で下衆な悪魔的手段を用いて、この少女がどういう人間なのかを確かめなければいけない。

周りの空間に溶けるように姿を消しながら、俺は少しばかり笑みを浮かべる。

《無影無綜》（後書き）

相も変わらず、絶好調になると外道になる主人公。
いつその事、永遠に不調だったらしいのに。

下劣

「くそっ！ 逃げるな！」

俺が居た場所に手を伸ばすが、空を切るだけ。

さすがに無いとは思うが、隠れてる状態でもあの少女に触れられれば姿を強制的に現される事になるかもしれない。

出来るだけ距離を取った後、俺はまた姿を現し少女に話しかける。

「お前じゃ俺を捕まえられない。どうする？ このままじゃ俺を負かす事ができねえーぞ」

「心配ご無用」

そう言つて、少女は俺へまた突撃しようとする。

バカの一つ覚えか。

そんな風に俺が油断をしていると、少女の体が急加速した。

まあ、空気抵抗などの勢いを削ぐものを全て拒絶した結果、加速したんだろうけど……。

勢いが速過ぎる。このまま衝突されれば俺、死んじやう。

姿を消して回避しようとするが、間に合わず、少女に押し倒されるようにして捕まった。

コードによって消した姿も現され、衝撃が全てくる。

呼吸が上手くできない。苦しい。

「拒絶」

そのまま少女は俺の首に手を当てて、コードによって自分の皮膚に物が触れることが無いように設定する。

皮膚が、頸動脈が、神経が、脊髄が、声帯が、奥へ奥へと押し込まれていく。

「がつ……あ………つつ」

声が出せない。喋ることすら叶わない。

意識も体の感覚も、薄れていく。1秒後とに感じられなくなっていく。

このままじゃ死ぬ。

本能的にそう思っ、切り札を出すための合図……指をどうにか鳴らそうとする。

何かが弾けるような音というよりも、何かが強く擦れただけの小さな音だったが、どうにか鳴った。

「おかあーさあん、どこおー!!」

「ッ！」

子供の泣き声が、殺伐とした雰囲気割り込んでくる。

パーク内には俺と自分の二人だけだと思っていたのか、少女は驚き、俺の首に押してきていた手を少し離す。

溜まっていた血液が、中断されていた呼吸が、薄れかけた意識が。死ぬ前の瀬戸際で戻ってくる。

「……おまあじゃ、あのガキ死ぬぞ！」

呼吸を整えている暇なんて無い。

伝えたい事を早めに伝えなければ、俺が死ぬだけだ。

「お前……ッ!!」

俺の言葉を聞いて、激怒でもしたのか、コードの設定などをすっ飛ばして少女が俺の首を本気で絞めてくる。

絞め殺そうとする、俺を。

……だからそれじゃ死ぬって言っただろ。ガキが。

また指を鳴らす。

どこかで、支柱が失われたのか、何かが崩れるような騒がしい金属音がする。

「ッ!？」

当然、何が崩れ去ろうとも少女には傷一つ付かない。なんせ最強の防護服のようなコードが守ってくれるから。

だが、普通は違う。普通の人間はコードなんて持ち合わせちゃいない。子供ともなれば当然だ。

例えば、何かが崩れて鉄骨の山でも降ってきたでしょう。

少女ならばその鉄骨の雨を気にせず歩ける。だが普通の一般的な子

供ならば鉄骨を怖がり動けなくなる。

そして、高確率で、その鉄骨の一つに。

「ズッシャーん……」

「この下衆！」

少女は俺の首を絞めていた手を離して、強烈な一撃のパンチを鼻っ面に放ち、その場をすぐさま走り去った。

おおよそ、子供を助けに行ったというところだろう。

心配する事は無いのに。

確かに、俺が隠してパーク内に残しておいた子供の近くで鉄骨の雨は降り注ぐが、その全てに俺は一度触れてある。

雨は子供に当たる直前で全て消える段取りだ。そしてその段取りは《干渉不可》がどう抗おうとも変わる事のない決定事項だ。

だから、わざわざ俺を殺してから子供の様子を確認しても良かったのに。

……まあでも、これで少女がどういう心の持ち主かは分かった。非常に良心的な世間一般で言われる『いい子』である。

だが、こういう性格は、ことサバイバルに関しちゃ悪い。最悪の部類に入る。

まあ殺し合いでは無いけれど。それでも最悪の部類にはいる、良心的な娘だ。

あとは《非観理論》で少し調べて貰えば、《干渉不可》を討ち取るシナリオは出来上がる。

だが問題は……《無影無綜》の件だ。

あの少女は本来の《無影無綜》の使用者と面識があるそうだ。それも浅からぬ因縁まで持つてそんな言動。

今回のこの外道な行為が、少女の中の《無影無綜》が行うであろう行為だったらしいのだが……もし少しでも違和感を感じられたら、次は見破られる。

まあでも、《無影無綜》はここまで役に立ってくれたからな。十分な働きだ。

これ以上は使用しなくてもいいかもしれない。

ともかく目先の問題は……千秋や鋼風だろうな。

子供を人質に、少女の性格を晒させたなんて事はとつくのとうに知れてるだろう。千秋のコードによって。

だとしたらまず怒られる。こっぴどく怒られる。

それどころか、協力すら望めなくなる。孤独で勝ち残らなければなくなるのは当然キツイ。

当然の報いだとも思うのだが。

「ハア……………鼻痛え」

鼻の下を指でこすり、付着した血を見て、さらに溜息を吐きながら俺は起き上がる。

下劣（後書き）

さっすが、一輝さん！

子供を人質にした上に殺しかけるなんて最高に最低な行為じゃないですか！

もう懂れちゃう！

帰宅

『おう、一輝。どうした？』

「どうしたじゃねえーよ」

携帯電話から聞こえてくる、男のまるで人生を謳歌しているかのような声に、12月初頭の夜の寒さに凍え震えている俺としては非常にムカついていた。

月が無い、星明りが至る所で輝いている夜空を見上げなら会話を続ける。

「親父、アンタ今どこにいるわけ？」

そう。今現在俺が携帯で会話している人物は、俺の義父……正確には養父だが。

にじかわぜむ
濁川は無。性別オス。年齢不詳。

数十年前に親がぶち殺された俺と、不思議少女ちゃん千秋を拾って一応は育てた人物。

その人物に昨日、空港まで迎えに来いと言われたのだが……。

まあ、そんなアバウトな内容で動いてしまったって、いざ空港に着いた時ら、『居ない』なんてことになりかねないので、今俺は電話して相手の位置を確認しているわけだ。

『どこって、友達の家だけど』

「……………」

まあ、予想通り。このクソ親はそういう人間であることは昔から重々承知のことである。

人に何かを言いつけておいて、自分はどこかへフラフラと行ってしまふ。

昔からそういう人物だ。

「……………まあ、いいや。どこかで待ち合わせしよう。今は県内県外」

『電波が通じてるから圏内だな』

「くだらない事を言っているとブツ飛ばすけど、それでどこで待ち合

わせする？」

『じゃあ駅前』

「どこの駅前だ、はつきりさせろ」

『ああ？ んー、じゃあどこかの駅前』

「……いい加減にしるよクソ親父。テメエの顔面をズタズタに切り裂いて忠犬八公像の前に晒してやるうか？」

『また変な脅しを考え付くなあ。まあ、取り敢えず駅前でまた会おう』

「おい……………チッ」

またまたアバウトな事を言われて、通話が切れた。

冬の寒さのせいか、それともクソ親父に対する怒りのせいか、俺の携帯を握る手は何故かプルプルと震えていた。

携帯が軋んだ音を上げる前に、ポケットに乱雑にしまい、どこへ行くかを考える。

駅前……地下鉄なのかローカル線なのかそれともJRの駅なのか。せめてそれ位ははつきりさせてほしかった。

あまり深く考えたところであのクソ親父の前では意味をなさない。溜息を吐きながら、取り敢えず、電車に乗る事にする。

「おう、一輝！ 久し振りだな」

適当な時間を見計らって、適当な場所で降りたのだが、改札を出たところで濁川は無に会えた。

当然というかなんというか、俺はこんな場所を全く知らない。来たことがない。

それだというのに、

「何でアンタはこんな場所に居るんだよ？」

「たまたまだ」

たまたま……偶然この場所に居た、ということでもいいのだろう。

俺が適当に来たら、たまたまその場所に親父が居た。

出来過ぎた話である。当然、誰かが人為的にこうしたのだ。

本人曰く、たまたま、だそうだが。

「俺がやったお古のコートに、制服……一輝、お前また何か千秋を怒らすような事をしたのか？」

「相手の性格をするために子供を人質にして殺害未遂をしたら『頭冷やしてきて』って言われて家から追い出されたよ。頭どころか体が冷えそうなんだが」

つい先日、俺たちは《干涉不可》と戦闘になりかけた。

俺のコードでどうにか全員逃げ切ることができたが、俺だけは残って《干涉不可》と少しの間、対峙した。

その時、これから先の事を考えて子供を人質にして《干涉不可》の人間性を調べた結果。

俺は千秋にこっぴどく怒られ、その上、何の荷物も持たされないまま家を追放された。

どうにか学校に行くためという理由で制服を、冬だからという理由で一枚だけコートを着れたが、どちらにしる寒い。

俺のコードは物体を消し隠すだけだから、寒さを通さないなんて便利な性質まで持ち合わせていない。

「そりゃまあ、その程度の事で大激怒するとは千秋の沸点は低くなつたんだな」

「元からだ」

「まあ普通にこんな平和な国にしばらく居たら、普通はそういう事で怒るようになるのか」

「というか、言っちゃ悪いが俺とアンタの人間性が最底辺まで落ちてるからだろ」

「そうか？」

「多分」

子供を人質にするのをその程度という表現をするのは、この国では明らかに異常者の精神だろう。

「しかしまあ、それじゃあ俺も家に入れて貰えるかどうか分から

ないな」

「アンタは別に平気だろ。ただ単に家に帰ってきたただけなんだから」
あの元ゴミ屋敷、少し前まで俺の住処だったあの家の所有権は親父にあるんだから。」

「それじゃ、まあ、積もる話もあるだろうが」

そう言つて親父は少し間を置き、俺に顔を近づけて問いかける。

「今、お前らは何に巻き込まれている？」

「……話が早くて助かるが、それは随分長い話になる。家に帰ってからにしよう」

そう言つてまた俺は改札を通る。

親父は少しばかり怪訝そうな表情をした後、こう言つた。

「家に帰ってから……お前、家に入れるのか？」

唯一今言つてほしくない言葉だった。

帰宅（後書き）

お義父さん登場。

この人が主人公を非道下衆鬼畜の最低悪魔野郎にした人物です。

理由

「はぁ……つまりお前はその賞品の失った物を何でも取り戻せる権利を狙って参加してるわけか」

「あと、主催者潰しな」

やれやれ、とソファに座り溜息を吐きながら俺の話を通り聞いた親父は呆れた様な表情を浮かべながらコーヒーを飲む。そして一言。

「千秋に土下座して謝って来い」

まあ当然の言葉である。

いくら失った物を取り戻したくたって、鋼皿を見捨てたり、子供を人質にとったりしてもいいはずがないのである。倫理的に。俺の場合はさらに。

「というか、さっさとそんなクダラナイお遊びから手を引け」

「いやでも、そしたら主催者潰しの方は」

「《非観理論》でも勝ち残らせておけばいいだろ」

「ふざけんなよッ！」

「そんな言葉を俺に向かって吐くんなら聞くが、お前の取り戻した物ってのは何だ？」

「それは……殺された家族と」

「またそれか」

言い訳をする子供に対して親が溜息を吐くように、呆れた態度を取りながら親父は俺に言う。

「断言してもいいが、こんなクソくだらないゲームなんかよりも確実に安全にそんな物は取り戻せる。お前のコードがあればな」

「……………」

「……いい加減にしろよ。俺はお前にコードの使い方はしっかりと教えた。いつまでも偽って保身にひた走ってるんじゃないよ」

「偽る事が、俺のコードだろうが」

「なに寝惚けた事言ってるんだお前。お前は発するだけ、コードは全てを捻じ曲げるだけ、嘘かどうかを判断するのは世界の方だ」

「……………だからって俺自身が、あれを嘘にするのが嫌なんだよ」
家族が目の前で殺されて、その場で姉は発狂して。そして自分は何も出来なくて。

それを嘘にするのは嫌なんだ。それを自分で誤魔化すのは嫌なんだ。
「はあ……………ともかく、今すぐ千秋に土下座してこい」

「……………分かったよ」

千秋は、俺と親父が帰ってきた時に、親父にコーヒーを出したかと思えばすぐさま自分の部屋に引きこもってしまった。
階段を上って2階の千秋の部屋のドアの数回ノックする。

「入るぞ」

何故か千秋は鍵も掛けていなかったなので、勝手にドアを開けて部屋に入る。

「焼き土下座」

そしていきなりこの一言である。

熱した鉄板が今ウチには無いから不可能であるが。

いや、そもそも倫理的にやっちゃいけない事だと思うが。

「すまなかった」

取り敢えず、部屋に入ってそうそう俺は千秋に向かって普通の土下座をした。

なんかプライド的な何かが傷つくな。

「何が悪いか、分かってる？」

「ああ、一応」

「それじゃ、二度とあんな事しない？」

「無理だ」

「……………なんで」

「勝つためビィッ!？」

いきなり頭を踏みつけられるようにして地面に鼻をぶつけた。
痛い、かなり痛い。泣くほど痛い。

「何で勝たなきゃいけないの？」

「それは…… お前には言つてなかったけど」

「ちいが家族を元に戻すため、って聞いた時、一輝はふざけるなって言っただじゃん。それに家族ならちいがいるじゃん。なのに何で……」

「…… ちいに嘔吐いたの？」

「嘔は吐いてない」

「じゃあ」

「殺された両親を生き返らして、壊れた姉を正気に戻す。そんなおいて主催者はこの手で地獄に突き落とす」

「それじゃ、やっぱり家族を元に戻すんじゃない？」

「元には戻らない。俺は戻らない」

「……… どういう事？」

「そのままの意味だ。気にするな」

「それって…… 死ぬって事？」

「さあな」

「ねえ一輝、それ本当なの？」

「さあな」

「一輝、ちゃんと答えてよ」

「……… ともかく俺の勝ち残る理由は、主催者を地獄の底へ叩き落とす。それ以外は全ておまけだ」

「よく分かんないよ」

「お前バカだもんな」

千秋が途端に足に力を込めて何回も、俺の頭を踏んでくる。

「ねえ一輝。まず一輝の一番いけない所はその人を卑下するところだとちいは思うんだよ。そこ直そっか。うん、それがいい」

「ちょ、やめっ痛い、痛いから」

何発もゲシゲシゲシゲシ、千秋が踏んでくるため途中でそのままの姿勢で転がって起き上がる。

「あ、逃げるな一輝！」

「逃げるが勝ちっていう言葉を知らないのか？」

俺の挑発が癢だったのか、千秋が追いかけて回してくる。それも狭い部屋の中で。

たしかこういう野生動物のような勇猛果敢で猪突猛進な奴への対処法は背中を見せない、だったよな。

しかしまあ、背中を見せずに千秋を避け続けるのも疲れるなあ。

「はあ……何故、千秋はこんなにもバカなんだろう。ああ、もしかしたら頭に詰まっていくなものが全て乳に」

「ッ！　一輝、今すぐにでにゅあ!？」

「なッ!？」

頭に血が上り過ぎたのか、飛びかかろうとした千秋が姿勢を崩し、俺を押し倒すような形で転ぶ。

倒れ際に俺は、後頭部を激突して、視界をモニョとした何かで覆われてしまった。

ああ、にしてもこの今すぐにも窒息しそうなくらいに密着している何かかもしれないとしたらというアレでなくなっただけ体の部位のどこでだって体重が掛かって異常なほど千秋の体のどこかが密着してしまっているわけで、ああ、にしても肉付きがいいというかまあそんな事を女性に言えばすぐさま殴られてしまっただけとまあ触感的にはこういうモニョとした程度が丁度いいよね、なんて話をしたいわけではなく、もしもクソも無く千秋の体の部位のどこかだとしたらまずこの先の未来として予測できるのはボッコボコにされてしまう俺の姿なわけなんだけまあでも、例えば何かの怪我を負ったとしてもいえる事はただ一つ。

私の生涯に一生の悔いなし。

「~~~~~ッ!!!？」

まあ、何してんだろ俺。

理由（後書き）

すいません。テストで更新できませんでした。しかしテストも今日で終わり。

しかしまあ久しぶりに書くこうにも訳が分からなくなったので、まあこの話から色々とか何か矛盾してくるような気がしてくるですけどね。というかまずこの話が矛盾してるという。きっと〇〇のせいだ。〇〇のテストのせいだ。

しかしまあ、俺、何やってんだろ。

通常を保たないと、また今回の最後みたいな悲劇が起こってしまう。

誘拐

「鋼皿が休み？」

「らしいです。風邪引いたみたいで」

とある事情で千秋にしばらく顔が上がりなくなった俺は、その千秋の命令で虎杖と三人で学校の屋上で食事を摂っていた。

「大変だね。お見舞いとか行ったほうが良いのかな？」

「別にいいだろ。下手に見舞いなんか行つて風邪でも引いたら、気が悪くなるだろうしな」

「わつ、一輝がまともなこと言ってる！」

「千秋先輩、いくらなんでも酷いですよ。その言い方は」

「でも虎杖君、あの一輝だよ？」

「確かにそうですけど」

二人して俺のことを残念なものみたいに言いやがって。そんな俺が今まで酷いことを一回でもしたか？

にしても、鋼皿が風邪とは……………。

バカは風邪引かないってのは嘘だったんだな。千秋の体調も気にしとかなきゃいけない。

それにしてもまあ……………。

「平和だな」

「いきなりどうしたの、一輝？」

「いや、平和だなんて思ってたさ」

「そりゃここは戦争を放棄した国ですからね。拳銃一つ持ってたらしたら犯罪ですよ」

虎杖はそう言ったあと「あ、そういえば鋼皿が持ってたような……………」なんて物騒なことを言いつつパンを齧っていた。

ちなみに俺が言ってる平和って言葉はそういう戦争とかが無いって意味じゃなくて、『干涉不可』からの接触以来何も起こってないってことを言ってるんだが。

まだ参加者は俺を含めて7人もいる。なのにここしばらく、何も起こってない。

ここにいる俺を含めた3人と少しばかり行動を起こした《干涉不可》はともかく、ほかの3人……《禁思用語》《結論反転》《絶対規律》はゲームの開始時から何の行動も起こしてない。

たんにゲームに興味が無くて、もう自ら大切な物を壊して辞退するなら別になんの問題も無いんだが。

暗躍されてると一番困る。裏でこそそいつや俺たちへの対策やらを仕掛けられてもしたら、対峙する時に圧倒的に不利になる。

しかしまあ、その仕掛けがすべてコードによるものだったら《否定定義》があればすべて解除できる。

だが今は体調不良で鋼皿も休み。解除もできない。

こんな時に敵から奇襲なんてあつたら、まさしく最悪だ。

「本当、平和だなあ」

まったく、少しはまともに平和を享受できないものか。そんな最悪なパターンなんか考えてないで。

自分の思考回路を少し恨みつつ、俺も弁当に手をつける。

「……………メール？」

昼休みもあと少しで終わるであろう頃。

俺の鳴らずの携帯が、登録アドレス3件の携帯が振動した。画面にはまったく知らないアドレスが表示されていた。

「あ、これ梓美ちゃんのアドレスだ」

「……………はあ？　なんで鋼皿が俺のアドレスを知ってんだよ」

「そういえば前、千秋先輩が教えてくれましたね。一輝先輩のアドレスやら電話番号やら」

「千秋、お前……………勝手に個人情報バラしやがって」

「でも知ってたほうが便利でしょ？」

「まあ、そうだけど……………」

そのお前のドヤ顔だけはム力つくな。一発ぶん殴ってやりたいくらいに。

大体、教えるにしたって本人に了承得てからにしろよ。俺、今までバレてたの知らなかったんだぞ。

「で、なんて」

「んあ？ 何が？」

「メールだよ」

「ああ、そういえば」

千秋に促されるようにして、俺は鋼凧からのメールを開く。

メールの内容は、

『鋼凧梓美はあたしが誘拐しました 取り戻したくば、ここに来なさい』

といったくだらない物だった。

「えっ！？ 何このメール！？」

「どうしたんですか？」

千秋の反応におかしさを感じた虎杖が携帯の画面を覗いてくる。

「……………場所は？」

冷静沈着な虎杖は、とりあえず場所の確認をしようとする。

いやとても賢い。この賢さは、鋼凧にも千秋にも、そしてこの誘拐犯さんにも見習ってほしいものだ。

「……………なあ、虎杖。鋼凧の携帯ってスマートフォンとかだったか？」

「えっ？ ………………確か退院祝いに買い替えたとか自慢してきましてね」

「そうか。なら解決だ」

俺はさっそく相手に返信し、携帯をしまう。

「いやいやいや！ 一輝の人間性がそこまで落ちてるなんてちいほ信じたくないよ！」

「ちよっ一輝先輩、なに返信一つで事を済ませようとしてるんですか！？」

「仕方がないことなんだ」

「仕方なくないよ！　一輝頭大丈夫！？」

「おい、虎杖」

俺の態度に文句を言うてくる二人に対して、俺は冷静に物事を判断できるほうを指定し、携帯を渡す。

数十秒後。

「……仕方がないことですね」

「確かに、一輝の判断は正しいよ……」

二人ともちゃんと、添付ファイルが開けないという現実を受け止めてくれた。

時々あるらしいのだ。スマートフォンで撮った写真などの添付ファイルが普通の携帯じゃ受信できないということが。時々あるらしいのだ。

まあ、どうせ俺には関係のないことだと思っていたが、まさかこんな所でこんな無駄知識が役に立つとは……。

「ともかく、俺は相手の返信が来たらすぐにそこに向かう。お前たちは学校で待機しといてくれ」

「え、でも皆で行ったほうが」

「相手は《干渉不可》。狙いは俺だけだ」

「……何で分かるんですか？」

あたし、という女が主に使う一人称。機械に弱そう。鳥頭。

以下の理由から《干渉不可》だと予測できる。

まあ、言ってしまうえば鋼皿を浚って、俺の携帯に直接メールしてきたんだ。その時点で狙いは俺の確立が高いだろう。

《干渉不可》は俺に……正確には《無影無綜》に執着している。

それにもしも他の参加者だとしたら、虎杖や千秋にもメールを送っているはずだ。

「だから俺が行く。お前らは普通に授業受けててくれ」

「分かった。ちゃんと梓美ちゃん助けてよ」

「まあ、任せとけよ」

その言葉で千秋たちと俺は自然解散となった。

誘拐（後書き）

そろそろセカンドステージ、開幕させますか

テロ

「……………次で降りる、か」

メールの指示に従い、電車で移動している俺は画面を見ながらぼつりと呟く。

相手も一度注意すればちゃんと出来るじゃないか。さすが鋼風を誘拐しただけはある。

そんな事を思い、携帯をしまおうとした時にちょうど手の中で振動し始めた。

鋼風の携帯にはまだ返信していない。誘拐犯も返信を返してきて今まで指示をしてきたのだ。誘拐犯が追加でメールをしてきたとは思えない。

それに着信したのはメールではなく電話だ。今までメールだったものをわざわざ電話での指示に変える必要性は何処にもない。まあ、誘拐犯が文面を打つのが面倒臭くなったなら別だが。

携帯に表示される番号は、登録されている3件ではない。

虎杖か……？ でもどうして？

そう思いながらも一応俺は電話に出る。

「もしもし」

『もしもし一輝先輩ですか。ちょっと大変な事態が起きました』俺の予想通り、電話を掛けてきたのは虎杖だった。

冷淡……というよりはなるべく声を抑えて、伝えられる事を簡潔に伝えようとしているように感じられる。

「……………どうした？」

『いきなり放送が入って、学校がどっかの誰かに占拠されてしまいました』

「そりゃ随分、ふざけた放送だな」

『ええ、僕も同感です。後々流れた放送に教師の悲鳴と銃声を混ぜた辺りが特に』

「……今、お前は？」

『教室です。まだ幸い、酷いセンスをしてるどっかの誰かさんたちには遭ってませんから』

「なら千秋と合流して、そこから」

『えっ？ 何て言っただんですか？』

「だから千秋の《異見互換》ならそのテロリストたちと視界を共有して、死角が常に分かる。だからそれをうまく利用して、連れていけるだけ連れて、」

……あ、れ……？

俺、言えてない……言葉が？

『一輝先輩？ さっきから最後の言葉が聞こえないんですけど』
虎杖の言葉で、確信する。

「……おい虎杖。ちよつとした質問だ。答えてくれ」

『いきなりどうしたんですか？』

「目の前に殺人鬼がいたとする。お前の力じゃ到底敵わない。全力疾走すれば交番に辿り着ける。こんな場合、お前ならどうする？」

『そりゃ……交番に……』

やっぱり、そうだ。

となるともしかしたら裏で繋がっていた可能性もある。

まあ、何にしろ想定していた中で一番最低最悪の事態が起こってしまった。

「虎杖、率直に言いたいのが、俺たちは今それすら出来ない状況に陥った」

『……どういう、ことですか？』

「コードだよ。《 》による妨害……ってそれすら言えないのか……」

『……ともかく、コードによる妨害で言葉が言えなくなってる状況は、分かりました』

そう、虎杖の言う通り。

コード、《禁思用語》による妨害によって今俺たちは上手く言葉を

言う事が出来なくなった。

まあ、意味は無いが虎杖の電話のお蔭で《禁思用語》のルールは分かった。

《禁思用語》は書いて字の如く、言葉を封じるコードだ。

多分、その影響範囲はコード使用者に近付けば近付いた分だけ強くなり、果ては封じられた言葉を言う所か思うことすら封じられる。

さっきの殺人鬼やらなんやらの質問。答えは簡単で、交番に逃げ込む、と言えば良かっただけだ。

しかし虎杖はそれを言うどころか、答えまで辿り着けなかった。非常に簡単誰でもわかってしまう様な答えなのに。

だから《禁思用語》の概要が掴めた。

妨害電波のようなそのコード、封じられる言葉の数の制限、変更の有無すら分からないためにかなり強う様に思える。

だがしかし言うてしまえば、それだけである。

言葉を封じられる。ただそれだけ。

確かに思う事すら封じられるのは強みではあるが、遠くからの射撃、人為的ではなく自然発生したちょっとした事故、そう言った事には何の対策にもならない。

まあ、この平和大国日本において遠距離射撃用の銃火器を高校生が持ち運べるわけがないんだが。

近距離で、誤って意図せずに包丁が刺さるという事態には何の対策にもならない。

それは使用者本人が一番分かってて、分かってたが上に今まで動かなかったんだろう。

まあ、その他にも《禁思用語》の対策はある。例えば。

「ともかく、今から俺がそっちに戻ったところで意味が無い。虎杖は千秋と合流してどうにか学校から脱出してくれ」

『分かりました』

こんな風に、言葉を言い換えるという単純な事。それが《禁思用語》への対策になる。

まあ英語だと言い換えようとしたところでその単語を使ってしまったら《禁思用語》に妨害されて意味が無いだろう。

だがまあ、この日本語というものはバカみたいに無駄に表現豊かである。

まあ、大概は簡単簡潔な言葉で済ませるから《禁思用語》の術中に嵌ってしまうが。

「俺は変わらず、鋼風救出に向かう。間に合えば、そっちに鋼風やら連れてそのままコード使用者を討つ」

「わかりました、それじゃ」

「ちよつと待て」

「……何ですか？」

「あつちは好き勝手にコードを使えるのに、お前は全然好き勝手にコードを使えないっていうのは不公平だろう？」

「世の中の大半は、不公平、不平等で成り立っていると思いますけど」

「まあ、ともかくただの確認だ。お前は《非観理論》を活用できるか？」

「一輝先輩には出来るんですか？」

「ああ。だからその方法教えてやる」

テロ（後書き）

皆既月食だぜ！ 赤いぜ！

吸血鬼が出るんじゃないの！？ やっほい興奮してきた！

……………というのは半分冗談ですからまあ気にしないでください。

探索

一輝先輩は、ただ言葉を思えなくするだけのコードだと言っていたけども、そのただが一番怖いのだ。

《無影無綜》のようにただ姿を消すだけのコードに《否定定義》は負けた。

それと同じ事が《非観理論》でも起こるかもしれない。いや、それどころかこっちは圧倒的に不利だ。

《非観理論》のルールは二つ。全ての事象を観測することと全ての者から観測されないこと。

そして制限として、事象を観測した場合に、その事象について行動、言動などのあらゆる手段での干渉を禁じられる。

この制限のせいで、そう簡単に事象観測は出来ない。《否定定義》がいれば別だが、鋼風は誘拐されて今すぐにこっちに来るのは不可能だ。

つまり僕は今、ただ全員から見れないだけの存在だ。

しかもただ見れないだけで、《無影無綜》とは違いそこに姿はあるのだ。

最悪なことにテロリストは銃を持っている。流れ弾などは僕に当たってしまうのだ。

ただ見えないだけの存在に対し、テロリストが銃を適当に乱射でもしたら即ゲームオーバー。

一輝先輩は事象観測について、工夫をすれば制限を受けないと言っていたが、それも確証が無いものだからあまり試せない。

その手順が失敗すれば、すぐさまに制限を受けて僕は動けなくなるかもしれないからだ。

こんな普通のテロリストに対しても負けてしまいそんな弱々しいコ

ードなのに、さらに敵からのコードによる妨害を受けている。

全くなんなんだよ、この圧倒的な不利な状況は。

ゲームの性質上、参加者である僕が死ぬ確率は少ないだろうけど、それでも最悪、流れ弾に当たって死んでしまうことだってあるかもしれない。

コードが迂闊に使えない。本当に最悪な状況だ。

それなのに……この人は……。

「千秋先輩、起きてください」

「……ほえ？」

何でこのおかしな容姿の先輩は学校が危ない人達に占拠されて、もうクラスの全員が教室から逃げてるのに、机に突っ伏して寝てるんだよ……。

……あれ？ 何か違和感が……。

「あれ……何で、虎杖君がここに……？」

「ただいま学校がテロリストさんたちに占拠されていてピンチな状況だと思って一輝先輩に電話掛けたらコード使用者による奇襲だと言われまして『取り敢えず千秋と合流して脱出してくれ』と言われたので2年生のクラスに来たらなんか皆逃げ出してきてそれでガラガラになった教室を一応探していたら机の上で寝ていた千秋先輩を見つけたから今ココにこうしているわけですから分かりましたか？」

「凄いね、虎杖君。息継ぎなしで言い切ったよ」

「そこじゃないですよ。っていうか何で先輩は悠々と昼寝なんてものでしたんですか？」

「いや、一輝がちゃんと梓美ちゃんを助けるか心配になってコードを使って覗き見してたらいつの間にか寝ちゃってた」

「はあ……まあ気持ちは分らないですけど」

「だよねえ」

そんな風に千秋先輩とくだらない雑談をしていると、先輩の携帯電話のバイブレーションが鳴った。

メールは一輝先輩からで、

『虎杖のアドを知らないからお前にメールする。相手のコードは《禁思用語》。言えなくなる方の対処法はあるが、思えなくなる方の対処法はほぼない。偶然に身を任せろ。それと時間的な関係からして他のコード使用者とも繋がり、協力している可能性がある。とりあえず学校から脱出して、距離を取れ』

といった風な今後の僕たちの行動を指示する内容だった。

にしても丁度いいタイミングだ。千秋先輩の話題が脱線しかけたところを狙って送ってきたような気がする。

「ともかく、一輝先輩の指示に従いましょう。《 》の対処法としては取り敢えず距離を取るしかないみたいですし」

「そうだね。でも《 》の対処法……って、あれ？ 私、何言おうとしてたんだっけ？」

………そうだった。距離を取っている一輝先輩からしたらそれを考えるのは造作も無い。

でも距離が近い僕たちでは相手のコードの名前を知ってもそれを思うことはできない。だからそれを口にする事も、文字として書くことも出来ない。

「……ともかく、相手のコードの対処法は距離を取る事です。さつさと学校から脱出しましょう」

今の僕たちがそれをどうにか思う手段は、こつやつて曖昧にすることしかない。

それでも伝えられれば問題は無いんだ。

「そうだね。ちよつと待ってて、今から盗視するから」

そう言つて、千秋先輩は目を瞑ってしまった。

相手がどこに居るかが分かったとしても逃走経路を立てるとしたら地図が居るだろう。

そう思つて、教室の壁に貼つてあつた校舎内の地図を剥がして持ってきた。

「先輩、筆記用具借りますね」

そう言つて机の端にあつた筆箱から適当なシャーペンを取り出して、

いつでも書き込める状態を作りだす。

……それにしても、何か違和感が残る。

ちよつとした違和感……なんかどうでも良い様な、気にしなくてもいいような、そんな細かい事。それが引つ掛かる。

………何で、一輝先輩は普通に逃げろって言わずに脱出しろって言っただ？

それは、多分……相手のコードの妨害によって言えなかったからだ。でも確か、僕の記憶が正しければ、さっき、僕は思えたはずだ。言えたはずだ。

『逃げる』その言葉を。

言葉の活用形は例外、という特殊な制限が無ければオカシイ事態だ。何で、わざわざ封じた言葉を解放した？ ……それは、教室から動かない生徒たちが邪魔だったから。

何故、生徒たちが邪魔だったんだ？ ……それは……例えば何かを捜す時、人が居ると邪魔だから。

何かを捜すって、何を捜しているんだ？ ……それは考えるまでもなく、僕たちだ。

ゲームの参加者である僕たちを捕える……最悪、殺すことを目的として捜しているんだ。

そしてコード使用者の仕業だと知っている僕たちは、こうやって教室に残って、逃走ルートを探している。

そもそも、コード使用者でも無い一般人なら、普通に『逃げる』という言葉が思えるようになった時点で教室を抜け出している。

もしもがら空きになった教室に生徒が残っていれば、それは、千秋先輩みたいな昼寝をして誰からか声を掛けられても起きなかった人物か、僕らコード使用者のどちらかだ。

もしも相手がコード使用者の顔が分からなかったら、そういった探索方法が一番効率的。

最初にテロが起こったのに教室から動こうとしない生徒たちを見せ、違和感を感じさせる。

そしてコードによる仕業であると気付いたら何らかの行動を起こすはずだ。でも……違和感を感じる一般人だっているだろうし、違和感を感じても様子見をするという選択をとるコード使用者もいるはずだ。

……いや、相手は様子見しようと思う事を封じる事もできるんだ。様子を窺うという選択肢を潰す事すらできるんだ。

違和感を感じて、これがコードによる仕業だと気付いてしまったのなら、行動を起こすしなくなる。

そしてもしも、この僕の考えが全て正しかったとしたら。

あともう少しで、ここに銃器を持ったテロリストたちがやってきてしまう。

「……ッ！」

「……ふえ！？ 虎杖君、いきなりどうしたの！？」

いきなり腕を引っ張ってきた僕に対して、驚き問いかける千秋先輩。でも危機を言葉にしている暇などない。早めに千秋先輩を隠さなければ。

探索（後書き）

やだ、虎杖君、大胆

……いや、ちょっとふざけただけじゃないですか。

魔女の館

千秋からの返信も、虎杖からの呼び出しも無い。

あっちの方は、今一体どうなっているかは分からない。敵だって、

《禁思用語》とテロリストだけとは限らない。

《干渉不可》に鋼風が誘拐され、俺がその救出に向かった後、学校で《禁思用語》がテロを起こした。

この関係から言って、《干渉不可》と《禁思用語》が手を組んだと考えて間違いない。

まあ、俺に一度接触した後に、協力関係を結んだんだろう。自身にも相手にも都合がいい関係だから。

ということは、《禁思用語》の他にもコード使用者と協力している可能性がある。《結論反転》《絶対規律》あたりと。

となると学校の方にはもう一人、コード使用者がいる可能性もあるわけだが……。

今はそちらばかりを心配している場合では無い。

「ここか……」

誘拐犯からの指示に従い着いた場所は、住宅地の一角にあるボロっちいアパートなんだが。

まずそのただでさえボロ臭いアパート全体に蔦が巻き付いていて、アパートの周りも雑草やよく分からない花やらが生い茂りまくって、挙句の果てに木々まで在りやがって、その枝やら幹やらがアパート壁に沿って成長してやがった。周りと比べて、その異様さは何かよく分からないオカルト的な禍々しいオーラすら感じさせ、言うなれば森の中にある魔女の住む小屋のようはアパートだ。

なんでこんな不気味な場所に呼ぶかね。ここなら人殺しだろうが何だろうがしても問題なさそうだからか？

それともここが単に一番近くにあった廃墟だからか？　っていうか
廃墟なのか？　人住んでるのか？

「……なんか、ここに用かね？」

俺がボロアパートの敷地に突入するのを躊躇っていると、後ろから
ヨボヨボの婆さんが話し掛けてきた。

……これまた、魔女っぽい人が話し掛けてきたなあ……………。

「いえ、ちよつと。友達に呼ばれまして」

なんて本当は誘拐犯からココに呼び出されたなんて素直に言えるわ
けもなく、適当な嘘を吐いて俺はその場をやり過ごそうとする。

「友達……ってことは茜ちゃんのボーイフレンドかね」

「え、ええ」

茜……《干涉不可》の名前か。また面倒な事になってきたぞ。こん
な婆さんと話してる場合じゃないのに。

「いやあ、まさか茜ちゃんにボーイフレンドがいるとはねえ」

「あはは……あのちよつと聞きたいんですけど、茜の奴、本当にこ
こに住んでるんですか？」

「そうだよ。まあこんな外見だからねえ。近所からは魔女の館って
呼ばれて、入居希望者が少なくて大家として困ってるよお」

どことなく残念そうに婆さんが語る。

っていうか正気かよ。こんな魔女の小屋によく住めるな、《干涉不
可》のやつ。

というより、本当に魔女の館なんて呼ばれてるのかよ……………。

「にしても、茜ちゃんの顔を最近見ないんだがねえ……アンタ何か
知らないかい？」

「風邪引いたらしいですよ」

次から次へと俺は嘘を吐く。まあこの婆さんはある程度《干涉不可
》の情報を知ってそうだからな。

弱みを見つげ出すためにはどうにか会話しなくちゃいけないだろ。

「本当かい！　……そりや大変だ。魚でも焼いてやろうかねえ」

「魚？　茜の奴、焼き魚とかが好きなんですか？」

「そおだよ。前にあたしが七輪で魚を焼いてるところを覗いて来てね、食べるかいつて聞いたら食べるつて言つてねえ、食べたなら美味しい美味いって言つて、それからよくあたしの所に魚を食べに来るようになったんだよ」

「へえ……そうなんですか」

つまりこの婆さんと《干涉不可》には繋がりがあるつてわけか。それも顔見知りとかじゃなくて、ご飯を食うに行くような仲。

まあ、あの見ず知らずの子供を助けるようなやつだ。知り合いなら普通に助けようと動くだろう。

……案外簡単かもな。鋼皿を救い出す、《干涉不可》を負かす方法は。

「あの……すいませんが、その今すぐ魚とかつて焼いてもらえる事つて出来ますか？」

「まあ、出来るけど……どうしたんだい？」

「いや、茜の奴が喜ぶんならそうしてくれた方がいいなつて。それに案外、今すぐ食べれる事を知ったら風邪も治るかもしれないましし」

「そうかもしれないねえ」

「あ、あと七輪で焼いてくれませんか？」

「ん？ どうしてだい？」

「いや、俺がちよつと気になるんですよ。それに茜の奴も焼ける匂いとか嗅いだら元気が出るかもしれないし」

「そうだねえ……それじゃあ、久し振りに七輪で焼くかねえ」

「お願いします。それじゃあ俺は茜の奴に会つてきますね。また後で」

そう言つて、俺はボロアパートへ逃げ込むように……というのはちよつと行き過ぎた表現だが、できるだけ自然な形でアパートに入る様に婆さんと別れた。

……まあ、これである程度の策が出来た。

あとは《干涉不可》次第。まあ奴は素直に鋼皿を逃がしはするだろ

う。わざわざ命を奪う様な非道な行為はしない。

なんせ目的である《無影無綜》が来たんだからな。だから鋼風は自然と逃がされる。

問題はその後。俺と少し会話……子供を人質にとったことの糾弾やらコードについてやらの疑問やらをぶつけた後に殺す、または壊すか。それとも会話なんて抜きにして俺を壊しに来るか。

出来れば、前者がいい。出来るだけ時間を稼いでわざわざ蒔いた不幸の種が芽を出すまで持ち堪えたい。

まあでもともかく、これからの結果のうんぬんを決めるのは他でもない俺だ。

「やっぱりお前だったか、《干渉不可》」

ボロアパート2階の、指定された部屋のドアを開け、待ち構えている赤い瞳の少女に向けて俺はそう告げる。

魔女の館（後書き）

文章グダグダ。

仕方が無いじゃん、だって俺だもの。本当にすいません！

ただの嘘

「やっぱりお前だったか、《干渉不可》」

「気付いてて助けに来たの？ 子供を人質にとった人間の行動とは思えないけど」

「うわっ、カビ臭え！」

「なんだ、ここ！？ ゴミ屋敷の臭いがする！」

「おいテメエ、《干渉不可》！ ちゃんと掃除してるんだろうな！？」

「は、はあ？ ちょっといきなり何言って」

「答えろ！」

「……し、してるけど」

「……… っていうことはもうこの環境自体が最悪な状態ってことだな。」

「雑草やら木々やらを放っておくから、こんなカビ臭えんだ。いつそ全て燃やしてしまおうか、あとで。」

「え、ええーと…… 話進めていい？」

「ん？ あ、そうだな。話を進めよう」

「ヤバイ。あまりにも臭いがキツくて鋼皿のこととか《干渉不可》のこととか忘れてた。」

「玄関の隣には洗面台やらキッチンやらがあり、少し奥に進めば居間やらがある。」

「その居間に《干渉不可》と鋼皿はいた。両者とも服装は制服で、鋼皿は《干渉不可》の足元でぐったりと倒れている。」

「…… まずは、そこに転がってる人質を解放して貰おうか」

「なんで？」

「その為に俺は学校サボってここまで来たんだからな。さっさとテロリズムなんて日本には不釣り合いな事を鎮めたいんだが…… 人質はまだ解放しないのか？」

「んー……まあ、いいわよ。解放してあげる」

そう言つて《干涉不可》は鋼皿を蹴り飛ばすような形で、俺の方へ渡してきた。

俺は鋼皿の襟首を掴んでそのまま、自分の後ろへ投げ捨てるように移動させる。

「……蹴つたあたしが言う事では無いとは思うけど、随分と酷い扱いようね」

「俺は案外、非道な事を容赦無くするような人間なんだが……知らなかったのか？」

「確かにそうだった」

「いやはや理解が早くて助かるよ。ガキンちょ」

「……この前の続きなんだけど」

そう言つて、剣呑な瞳をこちらに向けて俺に問いかける。

「アンタのコードは本当に《無影無綜》なの？」

「その問いは前にもされたし、俺は答えたよな？」

「答えてない。よくよく考えたら答えてない」

「その結論に至つたのは、誰のお蔭かな？ 《禁思用語》？ それとも他の誰かか？」

「話を逸らすな」

「残念ながら、俺が知りたい事とお前が知りたい事は不一致だ。お前が俺の問いに答えたら、俺もお前の問いに答えてやるよ」

「チツ……一番最後に違和感があったの」

……俺の言つた条件に乗るとは随分余裕じゃないか。

時間の余裕は自分にあると思ひ込んでるのか？ それとはまったく逆の状況だつてのに。

「あたしが知っている本来の《無影無綜》ならば、あのまま子供を殺そうとしたはず。でもそうならなかった。アンタは殺そうとした子供を助けた……元から殺す気なんて無かった。だから違和感を感じたの」

ああー、やっぱりそこに違和感を感じられたかー。失策だったわー。

っていうか面白いほど予想通りだな。

「この前はつきり、アンタを《無影無綜》だと信じて、アンタを濁川一輝だと疑ってた。けどもしかして……本当は逆じゃないの？」

「何言ってるんだ？ 俺は濁川一輝でコードは《無影無綜》だ」

「違う。アンタはもしかしたら本当に濁川一輝かもしれないけど、もしかしたら本当は《無影無綜》じゃないかもしれない」

「結局それは仮定までしかないだろ？ 確証は一つもない」

「それは……」

「まあ、半分正解なんだけどな」

「それってやつぱり！」

「さあて問題です。俺とお前、ここで負けるのはどっちだ？」

リミットだ。もうこれ以上の時間稼ぎは意味は無い。むしろ焼き終る前までに終わらせないと。

さて、外道で無茶苦茶で異常なコードの使い時だ。

「ああ、そう言えば。ここの大家は案外良い人みたいだな」

「……いきなりなんの話」

「いや、さっき下で会ったんだよ。たまたま。そしたら色々聞かれちゃって困ってさあ……全部嘘で返したけど」

「だからいきなり、何で話題を逸らすの？」

「まあまあ。途中で話が盛り上がっちゃってさあ、魚、焼いてくれることになったんだよ。それも七輪で！ 今時、七輪なんて滅多に見ないよな、凄いと思わないか？」

「何が言いたい……？」

「まあでも、残念だよな。人の良心つてのは悪党にとっては物凄くつけ入り易いんだよ。あの婆さんも俺と会わなきゃ今頃は……うう、泣けてくるねえ」

「何したの……おばあちゃんに何したの!？」

「ああ？ お前、鼻悪いの？ 臭わない、魚の焼ける香ばしい匂いと……ほんのり臭う、人が焼ける臭い」

「な……今、なんて……言ったっ？」

「まあ日本に住んでりゃ、普通嗅がないよな。それにまだ焼け始めで臭いもそんなしないしね」

「ど……お前、おばあちゃんを……まさかッ!？」

「そおだよ。俺は、ついさっき、ここに来る前かな。ココの大家であるババアとこのボロツちいクソアパートに火を点けてきたばかりなんだ」

当然、嘘である。

俺は確かにここに来る前に婆さんと話したし、今は外から魚が焼ける匂いがする。

でもそれ以外は当然、ただの嘘。一つの例外も無く冗談である。

そんな事をしたって俺にメリットは無い。この部屋に入っただけに鋼皿が返されない場合だってあるし、そうなった場合、俺だって火事に巻き込まれてしまう。そんな危険な策に打って出るなんて馬鹿げたことを俺はしない。

ただ、《干渉不可》にとつては疑う要素が一つもない。

子供の頭上から鉄骨の雨を降らそうとした人物。そんな危険人物がこんな事を言ったら本当にそうなっているかもしれないと思ってしまう。

もしかしたらこの外から匂う香りは、魚が焼ける匂いではなく、家が焼ける臭いなのかもしれない。そう思えば少しばかり焦げ臭いような気がする。

あの時、子供を助けたように大家を助ける手段をすでに打っているかもしれない。

でも、必ずしもこの濁川一輝という男がそういう事をするとは限らない。

さっきも仲間であるはずの少女を、まるで重たい荷物を扱う様に、適当に退けていた。

確かに濁川一輝はいくら他人を物のように扱ったとしてもそれを殺そうとはしない人間かもしれない。

でも、ウォーターパークでの時……言葉でのデマカセではなく実際

に事を起こした。

今回もそれと同様に、もうすでに事を起こしてから……ただの事実を述べているかもしれない。

おおよそ、《干渉不可》はこう思うだろう。俺もそれだけの事をしてきたと自覚してる。

千秋にしたって、俺の「助ける」という言葉は疑っても、俺の「殺す」という言葉を疑いはしないだろう。

裏切りと非道な行為。この二つは俺が今まで何度も何度もやって来た事だ。

その反対の行為を疑ったとしても、この二つ自体を疑う必要は無い。だから必然的に、《干渉不可》は俺の言葉を信じ。

俺の言葉は、真実に変わる。

「お前……ッ!!」

怒り狂う猛獣のように、歯をむき出しにして顔全体で俺に怒りを向けてくる《干渉不可》。

この顔から分かる事は二つ。

《干渉不可》……茜という名前のガキは俺の嘘を真に受けたということ。

そして、俺のコードが発動したという事。

「タイムリミットはもう無いぞ。俺を殺してババアも殺すか、俺を見逃してババアを助けに行くか。ウォーターパークの再現だ。さあどっちを選ぶ?」

笑いながら分かり易く選択肢を提示する俺。

俺の本当のコードは《虚実混交》。

自らの発言の真偽を、世界に適応させる。嘘吐きのコード。

ただの嘘（後書き）

読み難いですよね、すみません

《虚実混交》

「タイムリミットはもう無いぞ。俺を殺してババアも殺すか、俺を見逃してババアを助けに行くか。ウォーターパークの再現だ。さあどっちを選ぶ?」

《虚実混交》。俺の本当のコード。

自らの発言の真偽を世界に適応させる、嘘吐きのコード。

詳しく言えば、自らの発言一つで発動できるコードでは無い。

俺が言う言葉、その発言を相手が真実だと思ったら世界にとっても真実に、その発言を相手が虚偽だと思えば世界にとっても虚偽に変わる。そんな無茶苦茶なコードだ。

簡単な例を言えば、初対面の相手に対し、自らのコードを《無影無綜》だと言う。

その言葉を相手が鵜呑みにすれば、俺のコードは《無影無綜》へと変わる。

その言葉を相手が疑ってかかり信じなければ、俺のコードは《無影無綜》にはならない。

ただそれだけのコードである。

だが当然、上手く使ってやればこのコードはあらゆる嘘を現実にする事ができる。

「まあ当然分かってると思うけど、俺は今玄関に居て、お前はババアを助けるにはそこを通らなきゃいけない。まさかタダで通れるとは思ってないよな?」

歯を食いしばり、まるで獣のような赤みがある瞳を俺に向け、《干涉不可》はさらに拳を握りしめる。

だがそれでも俺に殴りかからないところを見ると、まだ俺を倒して婆さんを助ける方法があると考えているみたいだ。

それなら俺は、言葉でその可能性を消し去ってやるだけ。

「ここを通りたかったら、お前は今すぐこの場で大切な物を壊せ。」

そうでなければ通さないぞ」

「……何言ってるの？ アンタのコードが何だかは分からないけどあたしを止める事なんて出来ない」

「本当にそうか？ お前だって分かってるんだろ？ 自分のコードが何からも守ってくれるものじゃないって事くらい」

「……チッ」

へえー。この反応だと本当にそうなのか。《干涉不可》を止める手段は実際に存在する。

まあでも多分それは今の俺には実行不可能だな。なんせ俺には言葉っていう武器しかない。

使いようによつては核兵器なんかよりも圧倒的に危険になる言葉しか。

「わざわざ下で火事を起こしてからこつちに来てるんだ。当然、ここから逃げる手段もお前を倒す手段も事前に準備してきたに決まってるだろ」

「……壊してる時間なんてない。渡すだけでいい？」

……なんだ。簡単に折れるじゃないか。だったらわざわざコードを使う必要も無かったのに。

「ああ、別に構わない。寄こせ。あとで壊しといてやるから」

そう言つて片手を差し伸べる俺。

こちらに近付いてきた《干涉不可》は俺の掌に一枚の写真を置くと、自然と俺が退いたために出来た通路から一目散に部屋を出て行った。写真は、全員笑顔で並んでいる家族写真だった。

……この写真を今この場で破くのは得策じゃない。なんせ《干涉不可》が偽物を渡してきた可能性だってあるんだから。

ともかく、今はこの場から脱け出して鋼皿を起こさないと。このバカなら丁度いい。何も知らずにのうのうと気絶しているコイツなら丁度いい。

「さてと……」

先程俺はコードの力によつて、《干涉不可》を倒す方法とこの場所

から逃げ出す方法を得ている。

当然、俺自身はそんな下準備など一切していないのだが、俺はその二つの方法を得ている。

だから当然、俺はこの場所から鋼風を連れて逃げ出せるのだが……

……。

問題はその後。どうやってこのバカ風を起こすかだ。

「おい、クソバカアホ風いー。おやつ時間だぞ、起きろー」

……… チツ。この言葉でも起きないか。一体鋼風の奴はどうやって起きるんだ？

鋼風を背負って逃げるといっても原始的手段でボロアパートから逃げ延びた俺は、そのアパートの真正面の道路にて『うわ、燃えとる燃えとる』なんて野次馬気分を味わいつつ鋼風を起こす事に苦勞していた。

早めに鋼風に起きて貰わなければ、色々と困るんだよ。さっさと起きろこのクソバカ。

「鋼風、あと3秒以内に起きなければキスするぞ。3、2、1」

「とりやしゃあー!!」

顎に強烈なアッパーを喰らい軽く宙を舞った後に地面に叩き落ちた。痛い。頭がクラクラする。

っていうか鋼風の野郎、俺が舌嚙んだらどうしてくれるんだよ！

大切な武器なんだぞコラア！！

「……ん？　ここは？　うわっ！　燃えとる燃えとるっ!!」

「痛い……… あれは気にするな。《無影無綜》のもう一つのルールの効果だから」

周囲を見渡す……というより火事を目撃して動揺する鋼風に対し、俺は適当な嘘を吐く。

「もう一つのルール？」

「そう。お前らには言ってなかったけど《無影無綜》にはもう一つ

だけルールがある。影も形も無いただの幻を見せるっていうルールが」

当然、嘘である。

《無影無綜》は例え世界が反転したとしてもただ物を消し隠すだけのコードだし、そもそもこれは本物の火事で一切幻などではなく、その上この場に《無影無綜》を使える者はいない。

だけど、鋼凧はその事を知らない。なんせその事実を知っている者は《干渉不可》と千秋しかないんだから。

例えその場に居たって、気絶していた鋼凧には俺がコードについて嘘を吐いていたことは分らない。

そしてあまりにもスラスラと俺が言うものだから鋼凧は受け入れてしまう。

受け入れてしまったら、その言葉は真実となってしまう。

「だから鋼凧。一応否定しといてくれ」

「あ、分かった」

そう鋼凧が言った後、一瞬にしてボロアパートを包み込もうとしていた炎の全てが消え去った。

よし、これでいい。この火事をコードのせいにしてしまえば《否定定義》を使って一瞬にして消火できる。これで本当に火事で集まってくる野次馬を追い払うこともできた。

人混みに邪魔されて学校に戻れなくなるなんて哀れな事態は避けられた。

あと残ってる事といえば、《干渉不可》をきつちりと敗北させることか。

「にしても、何でわたしはこんな所に居るんだ？ 答えるカス」

「それがわざわざ助けにきた人間に対する態度か。義務教育からやり直せ」

「助けに来た……？」

「ああ。どうやって誘拐されたか知らないが、お前は《干渉不可》に誘拐されて俺が助けに来た」

「なんで？」

「学校の方がちょっと色々あってな、俺しか動けなかった。それに《干涉不可》の狙いは俺だったからな」

「つまり、わたしはカスを呼び寄せる為の餌にされたと」

「まあそんな憤るなよ。こっちにはそれだけの収穫があったからな」
「収穫？」

聞いて来た鋼風に対し、俺は先程《干涉不可》から渡された写真を見せる。

「これ、何だと思う」

「家族写真……？」

「そう。これが《干涉不可》の大切な物」

「……わたしを助けに来たんじゃないの？」

「知らないのか？ 俺は欲張りなんだ」

当然、嘘である。

《虚実混交》（後書き）

クソ主人公が、能力乱用するなよ。
一タルビ振るこつちの身にもなってみろ。 案外大変なんだぞ、お前
の台詞長くて。

炙り出し

「濁川一輝……どういづつもり………？」

鋼皿に事情を説明している途中、婆さんを背負った《干涉不可》が話に割って入ってきた。

「どうもこうもない。当然、すべて俺の利益のためにやってるだけだ」

「段階的にやってるってわけ……火事を消したのも自分の逃げ道を確保するため……でも、なんでプールの時、子供を助けたの？」

「簡単なことだ。お前の怒りを買わないためだよ」

「あたしの怒り………？」

「あの場で子供を殺したら、お前みたいな『良い奴』はブチ切れて直接学校まで乗り組んでくるだろ？ それだと少し困るんだよ」

《干涉不可》を止める方法など人質くらいしか思いつかなかった。

学校で襲撃される場合、人質になるのは学校にいる生徒や職員。

それじゃ後々、学校封鎖となり、雰囲気的に四人で集合しにくくなる。それに千秋からの信頼度がゼロになってこのゲームを孤独でやり過ぎさなければいけなくなる。

それは俺にとつて大きな損害だ。だからあの場で子供を助け、《干涉不可》が冷静な判断ができるようにした。

結果、人質は一人だけで済み、千秋からの信頼度を減らすこともなく、《干涉不可》を敗退させられる大きな一手を手に入れられたわけだ。

「……アンタは本当に、自分の利益でしか動かないで………ッ！」

怒り狂った山犬のように歯を剥き出しにして俺への嫌悪感を表情一杯に表す《干涉不可》。

しかし幸いなことにコイツは勘違いしている。

ゲームのルール上、敗者は勝ち残っている者を殺す権利がない。

だから《干渉不可》はどんなに俺の行動に憤るうとも、殺しにかかろうとはしない。

まあ、実際はまだ俺は写真を破いてないから殺しちゃっても平気なだけだな。

本当にこればかりは、相手が勘違いしてくれていてよかった。

「カスのクズみたいな行動はいつものことだし、そんな怒ることもないと思うよ」

事態を傍観していた鋼風が、俺と《干渉不可》の間に割って入るようにして諭すようにいう。

「……貴女は、そのゴミみたいな人間を生かしておいてもイイと思ってるんですか？」

「当然、今すぐこの場でぶち殺してただの肉塊に変えた方がいいと思ってるよ。でも、それでも一応誘拐されたわたしを助けに来たっていう恩義があるからね。ここでは見逃してあげなきゃ、いつまでもカスにグダグダ言われそうだから」

ようは『べ、別にアンタのために割って入ったわけじゃないんだからねっ！　いつまでもアンタに恩があるなんて屈辱が耐えられないから、し、仕方なく助けてあげるだけなんだからねっ！　ほんとっ勘違いしないでよねっ！』という風に鋼風は言ってるわけか。

そんな現実逃避をしてなきゃ、ともてもこの二人の少女（歳下）からの罵声に耐えられそうにない。

「別に発情した犬のようにそのゴミを襲い殺しませんから、そこを退いてください」

「そんなこと言って、もう眼が血に飢えた狼のような感じになっちゃってるよ。まったく体は素直だねえ」

両者睨み合い。どちらとも一步も引く気はない。

そんな緊張した空気の中、当事者の俺は一人だけのんびりした感じで考え事をしていた。

考えていることは簡単。《干渉不可》に《禁思用語》と協力しているかを問うかどうかだ。

というよりそもそも《禁思用語》の目的が半分ほどわからない。

狙いは《非観理論》である虎杖ただ一人だとして。俺をわざわざ引き離す理由がどこにある？

あの時、テロが起こる前の俺はまだ《無影無綜》だった。だからついでに潰すには少しばかり効率が悪いと考えたのかもしれない。けどそれでも、わざわざ協力して引き離す理由はないはずだ。

天敵となるであろう《否定定義》を誘拐させるために《干渉不可》と協力した？

それじゃ理由が不十分だ。そんな誘拐なんてテロを起こすよりも遥かに簡単なことをなんでわざわざ他人にやらせなきゃいけないんだよ。

もしかして協力関係なんか結んでいない？ いや、それにしては色々和不自然だ。妙に《禁思用語》が有利になるような出来事ばかり起きている。

だとしたらやはり協力している？ でもだとしたら何故、協力した？ 《干渉不可》にだって自分のコードは通用しない。むしろ都合の悪い相手だ。

俺たち同士で潰し合わせた方が、一番自分に利があるだろう。……

……もしかしてそれが狙いか？

鋼風を誘拐させたのは後々俺に駒として使わすため。俺がわざわざ一人で救出に向かうのはプールの話を《干渉不可》あたりから聞いた時点で見当がついていた。

だからわざわざ誘拐させるなんて誘き出すなんて面倒な真似をして、俺と虎杖を離れさせ、虎杖は自分が、そして俺が《干渉不可》を討ち取れるような構図を作り出した？

だとしたら必ず俺たちの方に保険として誰かを回してくるはずだ。俺が必ず成功するとは限らないんだからな。

でも、それがもしも本当だとしても確かめる術は……一つだけ。

「なあ《干渉不可》。これ、なーんだ？」

「っ！ それ、あたしの……なんでっ！？」

俺が問いかけながらピラピラと振る写真を見て、《干涉不可》は驚きを隠せずに叫んでしまう。

いいねえ、そういう斬新な反応を俺はまっけたよー。

こんな大きな反応をしたら、本人の口から言わずとも、自然とこれが大切な物だと……敗北条件だと気づくだろ。

そしたらコソコソ隠れて様子を見てるような卑怯な輩は、動き出すしかなくなる。

「鋼皿、ともかく否定しろ」

「何いきなり意味分かんない事して、意味分かんない事言ってるの……否定」

異能を打ち消した時になる特有の音が響く……………わけはなく。

実際に相手にコードを使われたのかどうなのかも分らないが、まあ居ようが居まいが関係なしに。

俺の本当のコードで無理にでも炙り出す。

分裂

「それで、カス。今はどんな状況なんだ？」

「いや別に。もしも俺の予測が正しければこれで、『干涉不可』を消そうとする誰かが行動するはずだ」

この言葉だけでは誰も俺の言葉を信じない。信じるにしたって意味が分からない。

誰も信じられなきゃ、俺のコードは意味を成さない。だからまだ俺の言葉は現実になれない。

それにまだ予測だ。無理に信じさせてわざわざ本当は居なかった敵を作りだす必要はない。

だから問いただし、補足し、もしも予測が当たっているのならば俺の言葉を現実に変えてやる。

「……………どういうこと？」

自分の名前が出てきたことに驚き、眉をひそめながら問いかける『干涉不可』。

「その前に答えろ。お前はあるコード使用者と協力して今回のことを起こしたのか？」

「それは……………」

「その反応だとそうなんだな。まあ、無理して嘘なんか吐いて庇う必要はない。お前を売ったんだからそいつは」

「……………カス、わたしにも分かるように言ってくれない？」

ついさつき起きたばかりの鋼風が口を挟んでくる。まあ、余計ではないからいいのだが。

「相性の問題だ。あらゆるコードが通じない相手をわざわざ味方に引き入れようとするか？」

「わたしならしない。っていうかアンタと協力してるのも成り行きだし」

「まあ、だろうな。主に千秋のお陰でお前は俺に協力してるんだろ

うけど」

千秋がいなかったら協力関係にまでは至らなかっただろう。そこら辺は千秋に少しばかりは感謝してたりしてなかったり。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「誰かとわざわざ協力関係を結ぼうとする奴は、このゲームを勝ち残ろうとしている奴だ。後々自ら協力関係を破って、そいつらを敗退させにくる」

その時に、味方にあらゆるコードが通じない奴がいれば倒しにくくて仕方がない。

そもそも《干渉不可》に銃器や刃物、毒物なども通じないのだ。ごく普通の殺し方だろうが、コードを使った異常な殺し方だろうが、通じないものは通じない。

そんな奴を味方につけたって後々厄介になるだけだ。こんなに手が込んだ仕掛けをする《禁思用語》がその程度のことを考慮してないわけがない。

だから俺にわざわざ倒させる。それがダメだった場合に備えて誰かをここに配置しておく。《干渉不可》には知らせずに。

「……つまり、最初から罠に嵌めるつもりで味方にしたと」

鋼風がやや納得したように頷きながら呟く。

「まあ、ついでに俺も倒そうっていう魂胆だったかもしれないけどな。ともかく、俺も《干渉不可》もまだ敗退していない。だとしたら当然」

確信が持てた。だから今度こそ俺のコードで世界の未来を変える。半強制的に。

「《干渉不可》または俺を消そうとする誰かが行動するはずだ。いや、動くしかないんだ」

「それでわたしに否定させたと……………」

鋼風はそう納得しながら、周囲に目を配らせる。

《干渉不可》は、事態についていけないのかただ呆然と突っ立っている。

事態は最悪。敵は学校にいる虎杖たちにも、今ここにいる俺たちにもいる。どちらとも独りつきりってわけではないだろうが、ほぼ孤立無援状態だ。

だけどそれだと俺が困る。だから。

「鋼皿。二手に分かれよう」

「二手……？ 誰と誰？」

「俺と《干渉不可》。お前とその婆さん。向かう場所は両方とも病院、そのあと学校だ」

「学校、病院……仕方がないから、従ってやる」

「何様だよ、お前」

合図もなしに、俺たちは《干渉不可》から婆さんを引き取り、それぞれ別々の経路で走り始めた。

しばらく呆然としたまま俺に手を引かれていた《干渉不可》は数分経った上でようやく事態を理解した。

「……っ！ 触れるな！」

《干渉不可》がそう言った途端、掴んでいた俺の手が物理現象のすべてに逆らって弾かれた。

「……お前、名前は？」

「はあ！？」

「俺は濁川一輝。お前の名前は？」

「何でそんなことを答えなきゃ」

「名前」

「……………鳴神、茜」

「そんじゃ茜ちゃん」

「ちゃん付けするな！ 気色悪い！」

「なら、鳴神ちゃん？」

「苗字でも同じだアホ！」

ああ、まったく思春期の女の子っていうのは面倒くさいな。どう呼べばいいんだよまったく。

……あ、そうだ。千秋のように呼べばいいんじゃないのか！？

「あーちゃん！」

「殺すぞ！ バカ！ 変態！ 悪魔！」

なんだ、ダメなのか？ いい案だと思っただんだが……。

……って、ふざけてる場合じゃない。

「鳴神茜、お前はあの病院知ってたよな？」

「いきなり普通になったな……というかどの病院だよ？」

「《完全干渉》のいる病院」

なんかかんやで俺は、その情報を千秋から聞き忘れた。

でも一度接触しているはずのコイツなら場所を知ってるはず。

「……もしかして、それが知りたいがためにあたしの手を引っ張ったの？」

「俺はいつだって自分の利益のために動く人間だ。まあ、理由はそれだけじゃないんだがな」

婆さんの安全を取り敢えず確保するには、コードを無効化できる、

またはコードが通じない人間が必要だ。

だからまあ当然、鳴神茜か鋼凧のどちらかが婆さんを背負う役目を負わなければいけない。

そしてその後、できればコードに強い二人ともが学校に来るようにしたかった。

鋼凧は言うまでもなく学校に行くだろうが、鳴神茜はそうはいかない。婆さんの安全確保までしか動かない。

だから仕方なく鳴神茜を連れていくことになったんだ。

だから決して、俺が《完全干渉》に会うまでの道がわからないから連れて行っているのではない！

必死に言い訳をしている俺に対し、鳴神茜は呆れるような視線を向けてきた。

部分観測

「……ベクシュンっ!!」

人生詰んだ。ワザとやってるとしか思えない。もしかして嵌められたんじゃないか？

嵌められてないんだとしても、僕にはあの不思議な容姿の先輩のお守は無理だったんだ。一輝先輩は本当、凄いな。

まず経過から言えば、僕らが移動し始めた時にはすでに検討した策通りに相手が動いていた。

廊下を出た途端に聞こえてきた足音に対して、一応は隣のクラスに移り、千秋先輩をロッカーに押し込んで息を潜めていた。

僕自身は《非観理論》で誰かに見つかる心配はないから一応外からロッカーを押さえつけていた。千秋先輩が何かやらかすような気がしたからだ。

そしてその予想も的中。静寂している教室や廊下によく響くクシャミをしてくれた。

それもテロリストだと思われるアサルトライフルのような物騒な物を持つて二人組が丁度、僕たちが隠れた教室を詮索している時に絶対にワザとやってるとしか思えない。どちらにしろ詰んだ。

僕は見つからずにやり過ごせるが、千秋先輩は見つかってしまうだろう。

そしたら当然、殺される。殺されたら必然、僕は安全な逃走経路が分らない。

いやでも《非観理論》を常時使用して、常に誰にも観測されないような状態を作ればどうにか逃げ出せるんじゃないか？

……ダメだ。どちらにしろ相手のコードによって誘導される可能性がある。

そして相手に誘導されたとしても《異見互換》があれば最低限、人が待ち伏せしているような罠系統は回避できると。

今隠れれば後々自分が、今姿を現せばすぐにでも自分が、標的として銃弾を撃ち込まれる。随分と世界は僕の都合の悪い方へと転がっていつてるわけか。

なら、試してみるか。一輝先輩の案。対観測制限の案を。

あれも一か八かではあるけど、どうせこのままだと僕死んじゃうし。これほど試す為に用意された状況はそうないだろう。

テロリスト二人組はそれぞれ片腕を動かし互いに合図を送って、ロツカーに近付いてきている。

チャンスは一度たりともない。失敗すれば死。成功しても状況を逆転できるとは限らない。

ただ、成功すれば一度ばかりかは死を回避できる。つまり死なない。僕は少しばかりロツカーから距離を取り、二人組がちょうどそれぞれ待機場所に着いた時に。

ロツカーから少しばかり遠い位置にいた一人に向かって全力でタツクルする。

僕の姿はコードによって誰にも見えない。何人たりとも僕を観測できない。

だからテロリストの一人はいきなり姿勢を崩され、一人分の体重が追加された状態で床に倒れ込むように後頭部を打つ。

このままもう一人へ追撃を行ってもいいが、それだといずれ銃を乱射でもされて流れ弾が僕に当たる可能性がある。

それじゃダメだ。しっかりと僕を狙って撃つてくれなければ。

床に倒れて唸っているテロリストの一人から蹴るように距離を取ると同時に、僕は姿を現す。まあ正確には見えるようにするだけ。

普通なら突然のことで多少は驚くはずなのに、もう一人のテロリストはそんな暇なくアサルトライフルっぽい銃を僕に向けてきた。

「床に跪け」

そう言いながらテロリストは銃口で促してくる。

何故、撃たない……………あ、そうか。僕を殺したところでゲームのルール上では僕は敗退にはならない。僕が大切にしている物を壊さない限り、敗退とはならない。

だから僕を誰かに殺させるわけにもいけない。ということは命令したのは捕縛。

そして僕が命令に背いた場合は、頭や胴体は狙わずに、脚や肩を狙うっていうわけか。

「いやだ」

そう返しながら、観測の準備へと入る。

一輝先輩の案は、部分観測、というものだ。

内容もそのまんま。一部分だけを観測する。それも観測した事象に干渉しない部分を。

一輝先輩の観測の捉え方は所謂、動画と静止画の関係だ。

僕が今までやってきた事象観測は動画で、今からやるのは静止画。

銃口がどこに向けられて引き金が引かれ銃弾が発射しその結果どうなるか、を観測するのではなく、引き金が引かれた時の銃口がどこに向けられているか、のみを観測する。

そののみなら《非観理論》の制限に阻害されない。そう一輝先輩は言っていた。

だが、その言葉には確証などなく成功するかどうかは一か八か。

まあ失敗してしまえば、もうそれでキッパリ諦めて死でも痛みでも何でも受け入れた方がいいだろう。

脳へ直接、情報が流れ込んでいく。その流れを途中で止める。

結果、得たいものは得られた。これから少し先のアサルトライフルの銃口の向き。

さて……………もう観測してしまった。退路はない。この先にあるのは死か成功のみ。

「ッ!？」

そして、それだというのに僕の体は動かない。

この感触には覚えがある。行動、言動などの手段をもってし観測し

た事象に干渉させないための制限。その感触。

体のどこも動く事はない。その場に縫い付けられた感覚だ。

つまり……………失敗。

相手が観測通り、銃口を僕の右すね辺りに向ける。

どうでも良い事だが、どうもアサルトライフルというと連射のイメージが強い。もしかしたら僕の脚向かって弾丸を連射するって事はないよな。

そんな僕の心配をよそに、テロリストは引き金を引く。

部分観測（後書き）

どうやったら、文章って上手くなるんでしょうかね？ やっぱ才能かな？

だとしたら才能がほぼ皆無の俺には絶望的な感じですよね。
はぁ……………。

逆転観測

結果から言うと、僕は……………銃弾を避けられた。

もうダメだ。そう覚悟した後、せめてもの足掻きとして自分の姿をコードで見えなくした。

そしたら、体を縫い付けていたコードの規制が解けた。

だからギリギリではあるが僕は銃弾を避けられた。理由は分からないが。

取り敢えず、仮定はできた。

事象観測による干渉制限は、観測した通りに事象が起こればあらゆる行動を起こしてもいい。

でもまだ仮定。確定させなければまだ部分観測は使い物にならない。

「こつちだよ」

また姿を現し、テロリストへ告げる。

「…………お前、どうやって……………？」

「ちよつとしたトリックだよ」

部分的に観測を始める。観測する事象は、これから先の20秒間のテロリストの目線。

すぐさまに頭に情報が流れ込む。データはそろった。

5秒後、下方へ移動。その3秒後、銃へ移動。1秒後、標的へ移動。

4秒後、ロッカーへ移動。6秒後、標的を目視。

これにすら従えばいい。これ以外は何も従わなくていい。

これから僕はテロリストの視線をこれの通りに動かしてしまう。ただ動かせば、あとはその最中に何をしたらって構わない…………はず。

さっきの銃口よりは安全な確かめ方だ。

しかしどうやってその通りに視線を動かす？ 一輝先輩のような無駄に饒舌な人間じゃないし。

…………いや、そこら辺は考えなくたっていい。どうせ制限のせいですう抗ったって、その事象に干渉する行動、言動はとれないんだ。な

ら干渉しない行動や言動を僕は強制的にとらされる。

何を考えようと、何も考えてなくても。

「あ、お前の下にゴキブリ」

自然と僕の視線はテロリストの足元に移り、口からそんな言葉が出た。

僕にはそんな物は見えないが、自然と口からそんな言葉が出てきたのだ。

テロリストは多分反射的に自分の足元に視線を落とした。

それに合わせて僕の体が自然と、不自然なくらいに自然と、距離を測るように横へ移動する。

……ああ、そうか。二度ほど標的目視を観測してしまったから、ここでは僕という標的は姿を晒していなければならない。

だからわざわざテロリストの視線が下に移って、姿を晦ませるチャンスだというのに僕はコードを使わずに横へ移動しているわけか。動く必要性はあるのか……………標的目視のときの目線の位置とかの関係か。

案外、《非観理論》の制限ってのは使い用があるかもしれない。

「……………ダメエ！」

一瞬、アサルトライフルに目線を映したテロリストは僕の姿を見るや否や、僕に向かってアサルトライフルを乱射してきた。

なんて迷惑な野郎なんだ。しかも先程と違って胴体狙ってきやがった。

僕は僕で、テロリストに見られた瞬間にコードを使用し姿を消して、適当に飛び退く。

そのため幾つもの弾丸は空を切り、その先の壁にめり込んでいったわけだが……………。

このままだとマズい。適当に教室中に乱射される可能性がある。下手な鉄砲、数撃ちや当たる。そんな戦法を取られたら僕は簡単に死んでしまう。それにロッカーに当たって蜂の巣のように穴が空いてしまうようなら、隠れてる千秋先輩にも弾が当たってしまう。

……でもまあ、その心配はほんの少しの間だけ無いんだけど。

「……チッ！　また消えやがった！」

テロリストが周囲に目配せしようとした瞬間、ロッカーの中で何があったかは知らないが、がたんっ！　何かがぶつかる音がロッカーからした。

それでロッカーに視線を向けるわけか。千秋先輩のドジをこういう風に役立つとは驚きだ。

さて、ここから6秒後に僕は姿をまた現さなければいけない。

その間に、あのドジな先輩が作ったこの自由に動ける6秒間で、終わらせる。

テロリストは音がなったロッカーへと静かに近付いていく。

おおよそ、最初の異変であるクシャミをした音あたりを思い出してロッカーの中に誰かがいるかもしれないと検討づけたんだろ。

そしてそう検討したら僕が姿を現した理由も、そのロッカーの中に誰かいることがバレないようにしたことだと勝手に想像がついてしまう。事実、その通りだ。

そして自分の身を危険に晒してでも隠したかった人物を人質に使えば、おのずと僕を引きずり出せるかもしれない。

そう思っただらう。思っただけでなく、どちらにしろロッカーの中は怪しいと考えたはずだ。

目線も意識も銃口も、完全にロッカーに向いたその状態なら。

「チエックメイトです」

このテロリストの脇腹に直接アサルトライフルの銃口を突きつける事が出来るだろう。

最初、教室に入ってきたテロリストは二人いた。その内の一人は最初に昏倒させておいた。だからそいつからアサルトライフルを奪い取って、切り札にする。

でも、一輝先輩が鋼風にしたような効果……相手を抑制する意味などこの行為には無いと思うが。テロリストの反抗的な目を窺い見れば、そう思ってしまう。それに僕も相手がその気ならヤル気がある

からだ。

「……素人が扱えると思ってるんのか？」

「その素人すらこういう物騒なものを持って戦わなきゃいけないのが現代の戦争ですから」

実際、銃を撃つにしたって反動っていうものがあるだろうし引き金を引く以外の操作はまったく分からないし知らない。

それでも、僕にはこういう殺戮兵器よりも扱い難くて圧倒的な効力をもつ武器を一つだけ持っている。

一か八かの賭けをもう一度だけ、もう一度だけ未来の事象を観測する。

そしてその結果を、この何も知らないテロリストに伝えてやる。

「それに僕には観えてますから。反抗しようとしたお前が僕に脇腹を撃たれてのた打ち回っている姿が」

逆転観測（後書き）

ようは虎杖君の勝ち。

文章が雑なのは毎度のこと。本当にすいませんでした。

突然変化

「虎杖君って案外過激なんだね」

たかがアサルトライフルを撃った程度でそんな事を言われてたら、今時の軍隊とかはどうなるんだよ。

それに相手だつて防弾チョッキを着ていたのも知っていたから僕は情け容赦なく銃弾をぶっ放したんだし。

そこまで過激ではないと思うんだけどなあ……………。

テロリスト二人をカーテンを使って縛り上げた後、僕は千秋先輩に問う。

「それより、敵がどこにいるかも分かったんですか？」

「あ、うん。しっかり調べておいたけど…………案外、無意味かも」

「…………銃声に群がってきてるって事ですか？」

校内は静寂しきっている。そんな中で銃なんて発砲したら、よく響いてしまう。

つまり敵に自分の居場所を知らせているようなものなのだ。

敵の詮索部隊が複数に別れてこつちを探しているのなら、当然銃声のした方へと向かうはずだ。

「そういう事だね…………ねえ、虎杖君。こつちも二手に別れない？」

「こつちも…………？」

敵の詮索部隊が複数に別れてるから、こつちも一人ずつに別れたって…………大して意味は無いと思う。

むしろ今この状況で別れてもしたら、どちらかが捕まった時、その捕まった方を人質にされる可能性すらあるわけだ。

それにこの先輩ならあれよこれよという間に捕まって人質にされてしまうと思う。とういかされる。

僕が反対しようと口を開こうとした時に、千秋先輩はそれを封じるように自分から喋り始める。

「細かい事は気にしちゃいけないよ。私が言葉を封じるコードを狩

るから、虎杖君はその間にテロリストやらもう一人のコード使用者
やらを引き付けておけないかな？」

「でも僕にそんな事」

「さっきの部分観測だっけ？ それを使えばある程度の間は引付け
ておけるでしょ？ その少しの間でケリをつけるよ」

「は、はあ……………」

……………あれ？ 千秋先輩ってこんな人だったっけ？

ガンガン指示を飛ばしてきて、それに狩るなんて言葉遣い。まるで
一輝先輩みたいな物言いだけど……………。

……………いや、っていうかちよつと待て。さっきもう一人のコード使用
者って言ったか？

何で、そんな事が分かるんだ？ 一輝先輩もメールでコード使用者
と協力してるかもしれないとは言っていたけど、必ず学校にもう一
人コード使用者がいるとは言っていない。

なのに、何で？ 覗き見しただけでそんな事が分かるっていうのか
？ ただ視界を共有しただけで？

「一応《非観理論》で言葉を封じるコードの方の居場所を探してく
れないかな？」

「でも制限が」

「大丈夫。今この瞬間の居場所を部分観測してくれるだけでいいか
ら。あとは気付かれずに近付くよ」

……………おかしい。

この不思議な容姿をした先輩は、頭の中も不思議ちゃんだと思って
いた。一輝先輩もそんな感じでバカにしたような対応ばかりとって
いた気がする。

こんな風に自ら敵を倒すような行動をわざわざ起こそうとする人だ
とは思えなかった。千秋先輩は温厚な人間だから。

なら今、僕の目の前にいるこの銀髪でオッドアイの少女は……………誰だ？
「ほら早く。私のことなんて考えないでさ」

「ッ……………お前、誰だ？」

思わず、そう言葉に出してしまう。

心を読まれたから。あの先輩に。今のこの目の前の人物が、あの不思議ちゃん先輩には見えないから。

思わず、そんな言葉を出してしまう。

「酷いなあ……私は私だよ。濁川千秋。濁川は無の養子で濁川一輝の義妹にあたる人物。忘れちゃったの？」

それに対応した千秋先輩の言い様はまるでわざと言ってるのかと思うほどに不気味な言い様だった。

とにかく唯一、僕に分かるのは、今いるこの濁川千秋は僕や鋼風が知っている濁川千秋でないということ。

それ以外は分からない。本当は一輝先輩のような人間で今まで僕らにそんな姿を晒して無かっただけなのかもしれないし、もしかしたらこのテロ騒動が始まる前に何者かの手によって他の誰かにすり替えられたのかもしれない。

もつとも、そんな行動をして利益を得る人間が居るかどうか分からないが。

「……応接室。そこに言葉を封じるコードを持った人間が居ます」

「ああ、だから見た事のない景色だったのか」

何かを納得したように呟き、千秋先輩は教室を出て行く前に紙を渡してきた。

「一応それ、逃走経路。できるだけ敵を引き付けて逃げ惑ってね」
そう言つて、教室を出て行った千秋先輩。

囹役としてせいぜい精進してくれ。一輝先輩の言い方にするらなこんな感じだろうか？

千秋先輩の突然の変化について行けずに、しばらく出て行った扉を見ていると、ひょっこりと千秋先輩は顔を出してきて一言。

無邪気な笑顔でただ一言。

「くれぐれも、この事は一輝には他言無用でね」

陽動と誘導

「あア！ 本当、なんで学校に監視カメラの一つも置かないのかなあ！」

応接室にて、ソファに座り足を組んでいる《禁思用語》……宇津木うつぎひな陽菜はそう喚きながら携帯を弄っていた。

「知るか。叫ぶな。うるさいんだよ」

それに対し、《結論反転》……衣笠海翔いがさかいとは壁に背をあずけ顔をしかめながらそう返した。

「知るかってね……無線に確保した報告が入ってないの。これ、殺しちゃったか倒されちゃったかのどっちかなの。もしも倒されちゃった場合、もう二度と《非観理論》の姿を拝む事なんて無理。こっちの作戦大失敗になっちゃうの」

「確かもう一人コード使用者もいただろ？ そいつを捕まえて人質として使えばいい。それともそいつも姿を隠せるコードなのか？」

「別にそうじゃないけど、相手と視界を共有できるコードなの。そしてここは見知った場所。身長による高低差があるとはいえ、どこにこっちの駒がいるかはバレバレなの。だから遭遇することは無いと思う」

「両方とも厄介だな。いつその事、お前のコードで使用を禁じればどうだ？」

「どう指定するんだボケえ。このコードは使用者本人にも効果が出るんだぞ」

「ならオレが直接出るしかないか」

そう言つて壁から離れ、部屋から出て行こうとする衣笠。

「あ、ちよっと！ こっちのシナリオちゃんと覚えてるでしょうね！？」

「覚えてる。最後にオレが反転させればいいんだろ？」

「覚えてるんじゃないんだけど……くれぐれも、『非観理論』に隙を突かれない様に」

「お前こそ、『非観理論』ばかりに目が行ってるが、もう一人のコード使用者に隙を突かれない様にな」

「大丈夫だつて、『異見互換』はただの覗きのコードだから」
「どうだか」

そう言葉を残し、衣笠は応接室を後にした。

「おい、今度はこっちから銃声がしたぞ！」

テロリストの怒号が静寂しきった廊下に響く。

一応は作戦通りだ。『非観理論』で姿を隠し、その上でアサルトライフルを学校の至るところでぶっ放す。

敵を攪乱させることには成功した。そしてこのまま僕は校外へ逃げて一輝先輩たちの合流を待つだけでいい。

それにしても千秋先輩は勝手にどっか行ってしまったが、平気なんだろうか？

よくよく考えれば敵に遭遇しないことだけを考えれば千秋先輩や僕のコードは最適と言っても良い。

多分、一輝先輩が千秋先輩と一緒に脱出しろと言ったのも、昼寝とかをしていていつの間にか捕まってたなんてバカな事態を起こさない為だろう。

だから僕たちが別々に行動してもテロリストに捕まる心配は無いはずだけど……。

千秋先輩の様子がおかしかったのが気になる。

別にいきなり高笑いを上げて踊りだしたわけではない。別にいきなり容赦なく人を殺し始めたわけじゃない。

でも確実におかしかった。ほんの少しだけだけど、少し口調が変わ

った。たかがその程度の変化だけでも僕には異常としか思えなかった。

そして一番最後の言葉。一輝先輩には言うな。そういう意味を持った言葉。

それが一番気がかりだ。それはどういう意味での言葉なんだろうか。一輝先輩にバレると怒られるから？ それとも、一輝先輩すらあの千秋先輩を知らないから？

千秋先輩は一輝先輩に何かを隠しているから？

「ちくしょう……何処に居やがる」

近くでしたテロリストの声で我に返り、また階を移動して銃声を響かせようとする。

その時、放送が入った。

『あ、あー。テスト。マイクのテスト中、マイクのテスト中』

そこからした妙に緊張感がない声は、あからさまに教職員のものでは無かった。

そもそも、わざわざ二人とテロリストしかない校舎内に放送を掛ける必要はない。というより誰が二人のために自分の命を犠牲にする。

つまりこれは、テロリストの声。それかもう一人、言葉を封じる以外のコード使用者。

『テロリストの皆さん、および《非観理論》にお知らせします。職員室に来てください。繰り返します、職員室に来てください』

……職員室？ 其処に何があるっていうんだ？

……まさか、教師共を人質にして僕を迎え撃つ気なのか！？

『そこにオレたちが所有する人質のうちから10人を置いて行きま。助けに来たきや来い。自分の命が大切なら見殺しにしる。以上、臨時放送でした』

毘だ。率直に僕はそう思った。職員室には少しだけ何度が入った事がある。

あそこは教師たちのために設置された机やら書類やら半透明の仕切

りまである。冬は暖房器具もあるとかな何とか。

そんな物がありふれてる場所に僕を連れて行くことするなんて……

完全に相手は何かを仕掛けてきている。

なら、見殺しにするか？

そう問われてしまえば、僕の答えは最初から一つに絞られてしまうのだった。

人質に時間

………いない。

敵の罠だと思つて誘いに乗つたのはいいけども、職員室に入った瞬間に違和感を感じた。

テロリストが一人たりともいない。何故？

疑問に思いながらも職員室を詮索していると、人質と思われる手足を縛られた集団を発見した。数はちょうど10人。

……もしかしてこいつら全員が人質ではなくてテロリストで、助けようと姿を現した俺をいつきに襲撃するつもりか？

一応、保険で全員がどうやって職員室に来たのかを部分観測したが、全員が目隠しをされて一切の状況が分からないままこの職員室に連れて来られたようだ。

テロリストではない。テロリストが一人たりともいない。

さつき放送で、テロリストにも職員室に人質を放置したことは告げていたのに……。

ちよつと待て。何を僕は勘違いしてたんだ？

僕にその事実を伝えるには、放送という手段が一番だ。けど味方のテロリストに伝える手段は他にあるだろ。仲間なんだから連絡手段の一つもあるはずだ。

携帯とか無線とか。

むしろ味方のみ知らせたいことがあつた場合はそつちの手段を使った方が有効的だ。

例えば、僕がある場所に行かせて……またはある場所から遠ざけて何か校舎に追加で仕掛けをするとか。

くそっ！ さつき無線があるかどうか確かめておけばよかった。

『あー、《非観理論》聞いてるう？』

先程の放送の声が職員室内に響く。

僕は放送を流すスピーカーを睨みながらそのまま耳を貸す。

『人質を見殺しにしたかどうかは知らないけど、もしも見殺しなんかにしてない心優しい人間だとしたら当然、違和感には気付いてるよな？ これはオレからのプレゼントだ。そこにいる人質10名だけは逃してやるっていうプレゼント』

また無駄にご親切で。あまりにも良い人過ぎて涙が零れてきそうだ。それで、この人質たちを使って何を企んでいるんだ？ このテロリストは？

『さらに追加でプレゼントで昇降口のカギを人質の一人に持たせる。それでその人質たちは完全に逃げれるはずだ』

本当に何を考えている？ わざわざ人質を解放する意味があるのか？ テロリストなら、テロリストでなくても人質は多くいても問題はな

いはずだ。
この行為には絶対に裏がある。むしろ何もないなんて、絶対にありえない。

……逃がす事で成立するような仕掛けがあるのか？ そんな無茶苦茶な仕掛けが？

あるとすれば、それは当然コードを使った仕掛けになる。

言葉を封じる以外で、こんな面倒な仕掛けをようするコード……

……ダメだ。思いつかない……いや、多分まだ思いつく事を禁じられている。

思考も発言も阻害するこのコードをどうにかしない限り、相手の裏を読む事なんて無理だ……

『さて10人を救う事になるヒーローさんに質問だ。今、体育館にはこの学校の全生徒および職員……といっても10人はそこにいるから全体から10引いた数の人間が無理矢理押し込められている。助けるor見捨てる？』

ますます相手の考えが分からなくなる。そんな脅しを仕掛けるのなら本当に何故この10人を解放した？

必要無いだろ。解放する意味なんて。最初から体育館に全生徒と職

員がいることを言って僕を誘き出せばよかっただろ。

何で？ 何の意味があるんだ？

『あ、そうそう。助けるんなら早くした方がいいよ。10分経つごとに13人ずつ殺していくから。ちなみに13つて数はオレがもってるハンドガンの弾倉に入れられる弾の数で、それ以外になんの意味も持たないから』

その後、ぴんぽんぱんぱーん、と自分の声でわざわざ言った後に放送は終了した。

何はともあれ、僕に考えている暇は無いわけだ。

「取り敢えず、今の放送聞きましたね？ 僕はすぐ体育館に行くんで貴方たちは勝手に学校から逃げてください」

突如として現れた僕に全員驚いていたが、それについて説明する気も時間も一切なかったので対応せずに人質たちを束縛から解放した。「それじゃ」

そう言って僕は人質たちの方を見向きもせず、職員室を後にした。ともかく今は、体育館に行かなければいけないが……。

今度は正直ヤバイ。体育館は広くて隠れる場所も無い。銃撃戦になれば確実に人質に当たる。

だからって僕が犠牲となるわけにもいかない……いや、その手があるか。

相手はあくまで僕の命じゃなくて僕が大切にしている物を壊したいんだ。でも僕は自身が何を大切にしているか分からない。

けどその事を相手は知らない。だから僕を直接殺すことはしない……はず。人質を使って脅してきたりはするかもしれないけど。

だからどうにか僕が時間を稼いで、鋼皿や一輝先輩が来るまで時間を稼げば、人質は救出できる。

でも正直言えば、これは賭けだ。

相手が僕が自身でも大切な物が何か分からない事を知れば、無理にでもコードを使わせるか、殺しに掛かる。

多分、後者を選択するだろう。なんせコードを使ったかどうかなん

て本人にしか分からないだろうから。

だからどうにか、僕は相手にバレずに嘘を吐き続けなければいけない。

この賭け、8割方、僕の負けが決定している。でも今の僕に打てる手はこれしかないんだ。

《異見互換》

「……………はあ」

応接室にて、陽菜は安堵の溜息を吐いていた。

後は《結論反転》の仕事だ。自分の仕事はもう終わり。

一通りの自分の役割を終えたことに陽菜は安堵していた。

安堵しきっていた。あまりにもそれは無防備過ぎた。

「溜息するするだけ幸せが逃げて行くんだよ。知らないの？」

応接室のドアが開かれ、外から入った人間に陽菜は驚き臨戦態勢を取る。

長い銀髪。それぞれ色が違う瞳。片方は蒼で、片方は琥珀色。

そんな日本人離れた容姿を持った人間。濁川千秋がここまで来てしまった事に、陽菜は驚きを隠せなかった。

何故なら自分が行った事前調査では、四人の中でもっとも危険度が低いコードを持つ人間だったからだ。

（……………大丈夫。所詮ただの人間相手にコード使用者の方が優勢だつて話じゃない……………）

それに自分には言葉を封じるコードもある。いざとなったら『敵』などの敵対を象徴する言葉を指定して、思わせなくしてしまえば逃げれる。

そう驕っていた。しかしその驕りは彼女の言葉によって打ち崩されてしまう。

「安心して。例えどんな言葉で思考を妨害されたとしても、『敵』というワードが浮かべられなくなったとしても、ちいは絶対にお前を逃がさないから」

笑っていた。笑いながら言っていた。無邪気な笑いを浮かべて楽しそうな声色で彼女はそう言っていた。

ただの嘘だ。偶然、自分が思っていた言葉を言ったただけだ。そんな事は絶対にない。

ただ何となく、その異様な容姿の少女から異常なものを感じた。

「どうしたの？ さっさと自分のコードで指定しないの？」

千秋の言葉通りに設定するのを陽菜は躊躇った。今、彼女の言う通りに行動してしまつたら、それこそ彼女の思う壺のように感じたからだ。

「貴女……何を企んでいるの？」

取り敢えず、この場で何も言葉を発さなかつたら、そのまま場の流れを銀髪少女に捕まれる。

そう思つた陽菜は、まずそう千秋に問いかけた。

それ自体が間違いだつた。

「ただお前をこの場で始末することしか考えてないよ、陽菜ちゃん」
陽菜の背筋に悪寒が走つた。

自分はこんな銀髪女を調べはしたが、知り合いではない。この日本においてすれ違つただけでも印象に残りそうなこんな容姿をした人間としても自分が知り合いならば覚えてはいるはずだ。

なのに相手は自分のことを知っている。相手も同様に、自分のことを調べていたのか？

「ん？ ゲーム開始時に《結論反転》衣笠海翔と結託し、その後、ちいたちが《完全干渉》春永氷雨と対峙した後に《干渉不可》鳴神茜に話を持ち掛け、そして一度断られたが、《無影無綜》濁川一輝との対峙後すぐさま鳴神茜と接触し、またも結託。拳句の果てには《絶対規律》までも話を持ち掛け、結託した……程度のことならちいは知ってるよ？」

悪寒では済まない。自分のコードと同じレベルの最弱コードだと思つていた。だというのにこの銀髪少女は自分がゲーム開始時から今までの概要のほとんどを知っている。

確か、少女のコードは《異見互換》。たかが覗き見る程度のコード。

それなのに、そんな事まで分かるというのか？

「言っておくけど、覗き見るのはあくまで『おまけ』みたいなものだよ。ちいのコードは本来、異見……異なつた見解、異なつた思考、異なつた価値観、異なつた感性。それらを理解解析するものなんだよ」

自分と違つた考え方を理解するコード。それが《異見互換》。

相手と視界を共有するのはあくまで『おまけ』。コードの本来の使い方は相手の思考を理解する事。

「まあ、お前のコードとは相性が良いんじゃないかな？ その言葉を封じるコードは自分にも影響するみたいだし」

「……………ッ」

使用者本人と同じ思考をすれば、コードによる阻害を受ける事はない。千秋の言う通りだ。

つまりそれは陽菜にとつては自分のコードがほとんど通じない相手と現在対峙しているということになる。

(……………護衛の一人でも付けときや良かった……………)

後悔してももう遅い。対峙してしまったのだから仕様が無い。

「あ、そういえば当然ちいはお前が懷に隠し持つてる物の事も知ってるよ。それがお前の敗北条件なんでしょ？」

「……………まるで未来予知じゃない、これ」

詰め、というものを実感した陽菜は思わずそう呟く。

今ココで自分が何か手を打とうとしても、それは相手にすぐにバレてしまう。そもそも手を打たせてくれるかどうか分からない。

「虎杖君みたいに先に起こる事象は観測できないけどね。ちいのは相手の思考に合わせてるだけ」

それがどれだけ恐ろしい事が、本人は自覚しているのか。

いや、千秋にとって自分のコードが恐ろしかろうとそんなものはどうでもいい。

彼女がこのコードを本来の意味で使つとしたらその行動原理はただ一つ。

「でもそんな事関係無く、お前のコードは一輝にとって一番厄介になる。だからお前、ここで消えてよ」
ただ無邪気な笑顔で、千秋は陽菜に向かってそう告げた。

取り引き

「なんだよ、これ……」

体育館に着いた僕は、目の前に晒された光景に思わずそう呟いた。赤かった。床が、壁が、所々疎らに赤く染まっていた。人の血だ。人の。

「早かったなあー、想定外だ」

ステージの方から聞こえる声に目を向けると、一人の男が立っていた。

聞き覚えのある声。さっきの放送の声の主。

「お前……ッ！」

怒りのあまり思わず拳を握りながら僕はそう吼えていた。

「怒るなよ。時にはこういう演出が必要だろ？」

悠々と平然と何事も無い様に、冷やかすような口調で男は僕に言う。おかしいだろ。大勢の人が血を流してるんだぞ。何でそんな冷静でいられるんだよ。

こいつは、人を何だと思ってるんだ。

「まあ、そこまで純情な心の持ち主だとオレも心が痛んじまうよな。仕方が無い、一つ良い事を教えてやろう」

そう言つて男はステージから降り、僕へと近付きながらこう語る。

「オレのコードは《結論反転》。決定した出来事を引っくり返す事ができるコードなんだ。つまりそれは死者を生き返らせることができるって意味なんだが……取り引きと行かないか？」

「取り引き……？」

「ああ。オレのコードでここにいる全員を助ける。その代りお前はこのゲームから手を引く……ようは敗退する」

「……………ああ、分かった」

敗退するには僕の大切な物を破壊しなければいけない。

でも僕自身にすら大切な物は分らない。だから相手にも壊せるわけがない。

大丈夫だ……話を上手く持っていけば、全て成功するはずだ。

「そうか。ならお前の命以上に大切にしている物を」

「それより先ず、ここにいる人たちを助ける」

「おいおい、そう焦るなよ。今からこのテロのタネを明かすんだから」

「……このテロのタネ？」

そんなもの、僕や千秋先輩を捕まえてゲームから敗退させるために……。

いや、それだけだったらこんな回りくどい手を使う必要は無いんじゃないか？

鋼皿を誘拐したように《干涉不可》に僕らを誘拐させればそれだけで事済んだはずだ。

わざわざ学校を占拠するような回りくどい手を使う必要はまったくない。

なら、どうしてこのテロを行った？

「まず最初に《非観理論》、お前自身が自分の敗北条件を理解していない……ようは物がどれなのかを把握していない事はこっちだつて気付いてる」

「……バレてた……のに、何故取り引きなんて持ち掛けた？」

初めから成立しないことを知ってたのに何で？

「だからオレたちは考えた。自身すら分かってないものをどうやって破壊するかを。物凄く悩んだぜ。なんせ《非観理論》を使われればこちらの命よりも大切な物が何なのかバレちまうからな。他の参加者のことなんて忘れて考えた。そしてある発想に辿り着いた」

「ある発想……？」

「敗北条件だよ。命と同等に大切にしているものの破壊。それを逆に利用しようと考えた」

どういう事だ……？ どう考えた？ 命と同等に大切にしているものの破壊のどこに利用性がある？

「まあ人間性によるから一か八かの賭けだったんだけどな。オレたちはこう考えたんだよ。もしも自分の命の危険性を顧みずに人を助けようとしたらそれはソイツにとって大切な物になるんじゃないかって」

自分の命と他人の命を天秤にかけ、その結果、他人の命を優先した場合。それはある意味、命と同等かそれ以上に大切にしたことになるのではないか。

それがコイツの言ってる事。そして僕は人間として正しい方に、コイツの思惑通りに動いてしまった。

よりにもよって、僕は。

もしもコイツの言っている事が正しいとなれば、今現在僕の正しいものは……テロリストたちの人質の命になる。

でも……だとしたら……別に僕に取り引きを持ち掛けなくてもいいはずだ。

だってここに居る人たちがこんな状態になっている時点で僕は敗北しているはずだから。

コイツは一体、誰を殺して僕を敗退させる気だ？

「さて、そこでオレは2度ほどそのチャンスを設定したわけだが…

…意味分かるか？」

……職員室と体育館。まさか。

もう僕が到着していた時には全員が死んでいた体育館は対象外にされて、職員室で助けた10人が対象とされているのなら……。

コイツのコードを使って、死んでたものを生き返らせ、助かったものを助からなかったことに……殺されたことにしてしまえば。

「やめろっ！」

最後まで、その結末まで考えるよりも先に口が動いた。

その一言は、相手に言ったのか自分に言ったのかすら分らない。

「おいおいどうした。多を救うために少を切り捨てる。常識だろ？

それともお前は少を救うために多を切り捨てるのか？」

「とにかく止めるって言ってるんだろ！」

「お前に考える時間をやったって、オレの結論は変わらない。諦めるよ」

その時だった。

僕に近付いて来ていた男が途中にあつた死体を踏んだ。道端に落ちてるゴミを踏むように、気付かなかったように。

そして死体が悲鳴を上げた。

死体が悲鳴を上げた。それが意味する事は、今の僕に思いつくとしたらただ一つ。

まだ、ここにいる人間たちは生きているかもしれない。

まだ、全員を助けられるかもしれない。

取り引き（後書き）

まあ、俺がそんな主人公っぽい行動を誰かにさせるわけじゃないですよ。
ね。

まったく虎杖君は甘いんだから。

形勢逆転

「……チッ」

取り敢えず、救急車。

そう思つて携帯を取り出した僕に対し、男は拳銃を取り出してきた。大丈夫。もう観測した。今から10分以内にあの銃口から弾丸が飛び出すことはない。

だから僕は男と距離すら取ればいい。そうして捕まらなければ僕はみんなを救えるかもしれない。

引き金を引く金属音のみが小さく鳴り、男は少しばかり銃に視線を移して捨てた。

「救急です！ あ和学校で皆が血を流して倒れてて

」

僕は僕で、電話のコールが繋がると共に早口で事態を告げるとともに男から目線を離さないでしっかりと距離を取っていた。

人質の多さが男にとってアタとなった。

量が多過ぎて……障害物が多過ぎてすぐさまに僕に近付けない。

そして僕は体育館の出入り口側にいる。男はまだ体育館の中ほどもでしか辿り着いていない。

走って距離を詰めるにしたって、足の踏み場がないくらいに人が横になっている。

人を踏めば足場が安定しなくなり、結局スピードは出ない。

大丈夫。これならみんな助けられる。

「……………こう思っていた時点で気付くべきだった。

そもそも例え千秋先輩が《禁思用語》を敗退させたところでそのコードが使用不可能になるわけではない。

コードによる思考封じ……思考誘導が行なわれたとしてもゲームのルール上ではなんの問題も無い。

だってゲームのルール上では敗者が物を壊す事、参加者を殺すことを禁止にしているだけなんだから。

それ以外の妨害行為をしたところでルール違反にはならない。
いや、そもそも大前提が間違っていた。

この男は、僕が職員室に置いてきた人質を助けたという確証を得ていない。

僕の言動や行動が演技だった場合を考えれば、そもそも取引自体が成立しない。

だって可能性の一つとして僕は、自分の命と職員室にいる人質の命を天秤にかけて自分の命を優先したかもしれないんだ。

男からしてみれば、僕が体育館に来た理由だってコード使用者である自分を討ち取るために来たという風に考える事もできる。

確証はないんだ。男にとって、僕の天秤が人質に傾いたという確証が。

なら簡単なことで、この場で確定させてしまえばいい。

「最後の演出によくぞ引つ掛かってくれた」

体育館の中央で男は止まり、そう僕に告げた。

携帯から聞こえてくる声を無視して、思わず僕は男の言葉に耳を貸す。

「ネタ晴らしをするとな、この虫けらのように地べたに這いつくばっているゴミ共はまだ助かるんだ」

僕だってそう思った。だから救急車を呼ばうと電話を掛けた。

「救急車を今すぐ呼べば、もれなく全員助かる。そう言う風に怪我の具合をわざわざ調節してやった。何故かといえば、お前にわざわざ助けるチャンスをやるためだ」

その言葉を聞いて、途端に僕は今までの事に違和感を感じる。

「そもそも出来過ぎじゃないか？ 体育館にきたらオレしかいないくて、人質をたまたま踏んで誤って悲鳴を上げさせて、拳銃の弾は一発もなく、その上こんなにお前との距離が遠い。偶然にも程があるだろ」

つまり全てはわざと……仕組まれていたことなんだ。

違和感に気付くタイミングならいくらでもあった。でもそれに気付

けなかった。

原因はコード。思考を封じるとあるコード。だから違和感に気付けない。違和感に対して考えることが封じられているから。

「まあ、それでも賭けではあった。もしかしたらお前が羊の皮を被った狼かもしれないからな。でもそれは取り越し苦労だったみたいだ」

嵌められた。奴らの仕掛けた最後の罠にまんまと嵌ってしまった。こうなれば未来はコードを使わずとも観測出来てくる。

今すぐ救急車を呼ぶのを止めたら、僕は敗退。人質は死ぬ。

このまま何もしなければ、僕は敗退。人質は全員死ぬ。

今この場で《結論反転》を敗退させれば、奴はゲームのルール上、コードで僕が命と同等以上に大切に思った人質たちを殺す事はできなくなる。

でも距離が有り過ぎる。部分観測で大切な物が何でどこにあるかが分かってても、素手では時間が掛かり過ぎる距離だ。アサルトライフルの弾も陽動のさいに大方使ってしまったって残り数もほんのわずかない。

そもそも素人の腕で標的を射撃できるかどうかが怪しい。ほとんど無理だろう。

形勢逆転。いや、そもそも僕は最初から有利じゃなかったからこの言葉は合わないか。

ともかく、僕の浅はかな考えでまた誰かを救えずに立ち尽くすことしかできないってわけか……。

……………くそっ……………。

「敗退おめでとう。心の底から祝うよ」

皮肉の言葉かどうかは知らないが、男は僕にそう言っていると指を弾きこ

う言った。

「リバー

反転」

「アクセ

干渉」

世界の変える力には音はなく、ただ人の知らぬうちに人為的に変えてしまう。

「うわぁ患者が一杯で儲かりそうだ」

「なんで棒読みなんだよ。お前医者だろ？　もっと喜べよ。稼ぎ時だぞ」

「不謹慎、カスはカスらしく黙つとけ」

どこからか影も形もなく突然、三人が姿を現した。

形勢逆転（後書き）

今年最後の更新。よいお年を

第三者の介入

「……チッ」

「舌打ちとは酷いな。俺たちはわざわざこの演劇に遅れないように急いで来たつてのに」

三人の集団の中から一人の少年……濁川一輝が前に出てきてその声を大にして衣笠に告げる。

「……お前らは別会場に招待したはずなんだけどな？」

「ああ、あのクソボロツちいアパートね。あまりにも雑草が多かったから一度燃やしちゃったらさあ、何か追い出されちゃって……仕方が無いからこつちに来たんだよ」

「……ミスリやがつて、あの野郎」

「つーことはやっぱり、グルになって《干渉不可》と俺を潰そうとしてたわけね。まあ別にそんなのはどうでもいいんだが」

一輝から視線を逸らし唾を吐くように呟く衣笠に対し、適当に笑いを浮かべながら語らう一輝。

「ところで聞くけど、お前は《結論反転》だよな？」

「……そういうアンタは《無影無綜》か？」

「残念、ハズレです。違います。俺のコードは《虚実混交》だ」

「……？」

一輝の言葉に疑念を抱き、探るように衣笠はその姿を睨み付ける。

「まあ、このフィナーレが終わった後辺りに参加者全員にメールで送られるだろ。そのメールをお前が受け取る事は無いとは思っけど」

「随分な自信じゃねえーか」

「そつちも、随分と余裕を振りまいてるが……大丈夫なのか？」

そう言い、首を傾げながら腕に嵌められていない一つの腕時計を見せつけるように掲げる一輝。

その腕時計を見た途端に、衣笠の表情が変わった。

「正直、俺自身のコードは最強でもあるが最弱でもある。だから俺

の基本戦術の一つは【他力本願】なんだ」

一輝のコード《虚実混交》は、相手の真偽の判断で決まる。簡単に言えば、相手を信じさせなければその効果を発揮できないものだ。騙し合いや駆け引きなどの勝負事においては一番不利となる。

その為、一輝は自らのコードを偽って使用していた。

そうしなければ会話の成立しない相手……自分の言葉の真偽を判断する気の無い相手と対峙することなど一輝には不可能だからだ。

そして今、偽っていたものもバレてしまい《無影無綜》を使うことができない。

そして初対面の相手を信用させるほどの嘘など一輝の頭の隅にもない。

故に使えるものは自分ではなく他人の力。

「《否定定義》《干渉不可》《完全干渉》。この三つのコードすらあれば余裕でお前らを潰せるという算段は最初からついていた。千秋からは《干渉不可》と《完全干渉》が接触していたという話は聞いていたし、鳴神茜から《完全干渉》という言葉聞いていた時点で三人の協力を得られる状況すら作ればいいという考えだった。そこに都合よく、お前らの保険として仕向けた参加者の一人が来たわけだ。お蔭で鳴神茜と、鳴神茜をバイパスに春永氷雨の協力を得ることができた」

あとはそれぞれの学校についた時点でその三人のコード使用者を二つに分割する。

思考妨害が効かない鳴神茜を《禁思用語》の元へ、その他の二人をもう一人のコード使用者である《結論反転》のところへ自分と一緒に向かわせる。

あとは春永に《結論反転》の記憶に干渉させ、大切な物の情報を得る。そしてそのまま空間に干渉し、大切な物を奪い取る。

「まあ正直、鋼風は春永の協力を得られなかった場合の保険だからここまで付いて来なくても良かったんだけど……一応、春永が途中で裏切らないとは限らないからな」

もしも春永が途中でなんらかの理由を付けて協力を断った場合には、虎杖と鋼凧の二人を使って《結論反転》の大切に行っている物を調べさせるつもりだった。

そして鋼凧にサポートさせながら自分が無理矢理奪い取れば何の問題もない。

「まあ分かつてると思うけど、さっきお前がコードを使用してここにいる全員を殺そうとしたアレ。鋼凧によって否定されてるから意味無いぜ。それに春永がここにいる全員の肉体に干渉して治療済みだ。だから虎杖を敗退させるお前の作戦……もう意味ないよ」

「……………詰みってわけか」

本来なら、衣笠のコードは自身が追い込まれれば追い込まれるほど一瞬にして有利な状況へと変えることができる一発逆転のコードである。

しかし《否定定義》がいるこの場ではコードを無効化されてしまう。もしかしたら《禁思用語》が『破壊』や『壊す』などという言葉で封じているかもしれないが、《否定定義》がいるなら意味がない。すべてが無効化される。

彼に打てる手など何一つ残されていない。

「……………何故、時計を今すぐ壊さない？」

「残念ながら、今この腕時計を壊せるような器具をもってなくて。家に帰ったら即座に」

「絶対規律」

一輝の言葉を遮るようにスピーカーから声が発せられた。

「《否定定義》は《絶対規律》のコードを無効化できなくなる」

「……………なに、この放送？」

鋼凧が自分のコード名が呼ばれた事で反応して、そんな疑問を口に出す。

「……………ヤバイ、油断した」

一方、一輝は自分の甘さをに嘆くようにそう呟く。

「絶対規律。衣笠海翔は今すぐに敗退する」

その言葉が終わると共に、一輝が手に持っていた腕時計は爆発するかのよう破片を飛び散らせながらいきなり自然崩壊した。

「絶対規律。衣笠海翔は今の場で死」

「春永！ スピーカーをぶっ壊せ！！」

一輝の指示と共に、体育館とその傍にあるスピーカーが内側から破裂した。

そしてそれと同時に衣笠は無抵抗に倒れ、そのまま動かなくなった。放送が収まり、場の空気が白けかけたところで鋼皿が一輝に問う。

「……………おい、カス……………もしかして今の放送」

「俺だけじゃなかった……………普通に考えれば分かったはずだ……………」

親指の爪を噛みながら、苦汁を飲まされたように顔をしながら呟く。

「《絶対規律》も宣言系統^{コール}だったから、《禁思用語》に従った……………そう考えれば納得がいくし、追撃が弱かったのは主にそれが理由か……………」

「……………カス。わたしにも分かるように簡潔に」

「《絶対規律》は俺たちを利用していた」

「……………えっ？」

「詳しくは後で言う。虎杖！」

「……………な、なんですか？」

いきなりの事態について行けず、自分の名前が呼ばれたことに動揺した虎杖は近付いて来る一輝に視線を合わせながら問う。

「千秋のバカはどこに行った？ さっきから姿が見当たらないんだが？」

「え、えっと……………それは……………」

「……………あのバカ、途中でお前とハグれたのか。クソッ」

はつきりとした回答をしない虎杖の態度からそう間違った推測をした一輝はやや早歩きで体育館を後にしようとする。

「どこに行くんだ？」

「千秋を探しに行く。《絶対規律》が狙うとしたら孤立している参加者だらうからな」

問い掛けた春永に目も合わせずに、一輝は体育館を後にする。

第三者の介入（後書き）

はい、非常に読み難いですね。自分でもそう思います。
でもこれでセカンドステージ終了。

あとは《絶対規律》戦を残すのみとなりましたね。さあ大変だ。
チートと外道の戦闘なんてどう書けばいいんだよこのヤロウ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2876y/>

クローバー：コード

2012年1月5日23時45分発行